

西浜折曾の関遺跡

－西海岸広域農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2003年3月

青森県教育委員会

西浜折曾の関遺跡

—西海岸広域農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2003年3月

青森県教育委員会

序

風光明媚な海岸線や日本海に沈む夕日の美しい深浦町には、絵馬をはじめとした海運・漁業に関連する重要な文化財が数多く存在しますが、縄文時代から弥生時代・古代・中世・近世までの遺跡も数多く分布しています。

この報告書は、西海岸広域農道建設事業の実施に先立ち、事業地内に所在する深浦町西浜折曾の関遺跡を発掘調査した結果をまとめたものです。

調査によって、縄文時代の土器・石器をはじめとして、奈良時代や中世の遺物などが見つかりました。

地中に埋もれていた深浦町の歴史を、より身近に感じていただくとともに、今後、この調査によって得られた成果が、地域の歴史・文化の理解に役立つことができれば幸いです。

調査の実施及び報告書の刊行にあたって種々ご指導、ご協力をいただいた関係各位に対して、厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤良治

例 言

- 1 本報告書は、平成11～13年度に実施した深浦町西浜折曾の関遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 西浜折曾の関遺跡は、青森県遺跡地図に遺跡番号17015として登録されている。
- 3 本報告書の執筆者は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に記してある。
- 4 試料の分析、鑑定等については、次の方々に依頼した（順不同、敬称略）。

石器の石質鑑定

八戸南高等学校教諭

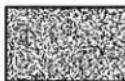
佐々木 辰雄

弘前大学理工学部教授

柴 正敏

- 5 本書に掲載した地形図（遺跡の位置・周辺の遺跡）は、国土地理院発行の5万分の1の地形図「鰐ヶ沢」を複製したものである。
- 6 掘図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真的縮尺は統一していない。
- 7 遺構・遺物の文・図中の表現は、原則として次の様式・基準によった。
 - (1) 検出遺構については次の略号を使用し、発見順に番号を付した。

S T=捨て場 SK=土坑 SD=溝跡 SB=掘立柱建物跡 SE=井戸跡 SW=沢跡
 - (2) 遺構内外堆積土の注記には、「新版標準土色帖」(小山、竹原:1996)を用いた。
 - (3) 層位名は基本層位を「I・II・III…」などのローマ数字、遺構内堆積土層位を「1・2・3…」などの算用数字で表記し、細分層についてはその後にアルファベットの小文字を付けている。
 - (4) 遺物には観察表・計測値を付した。計測値の単位は土器類はcm、石器類はmm、重量はgである。
 - (5) 遺構・遺物実測図で使用したスクリーントーンの表示は次のとおりである。



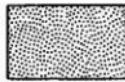
焼土



スリ



煤状付着物



タタキ・クボミ

- (6) グリッド別及び調査区内の遺物分布図の記号は図中に付してある。
 - 8 引用・参考文献については本文末に納めた。
 - 9 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
 - 10 発掘調査及び本報告書作成にあたって、下記の諸氏・機関から御協力・御助言を得た（順不同、敬称略）。記して感謝の意を表します。
- 本堂寿一、工藤清泰、西田茂、越田賢一郎、鈴木信、愛場和人、中田裕香、佐藤智雄、宇部則保、齊藤淳、伊東信、工藤忍、深浦町教育委員会

目 次

序

例 言

目 次

図版目次・写真目次

第1章 調査要項	1
第2章 調査方法と調査経過	2
第1節 調査方法	2
第2節 調査経過	4
第3章 遺跡周辺の環境	8
第1節 遺跡周辺の地形と地質	8
第2節 基本層序	11
第4章 検出遺構と出土遺物	15
第1節 検出遺構	15
1 屋外炉	15
2 捨て場	15
3 土坑	32
4 沢跡	37
5 挖立柱建物跡	37
6 井戸跡	39
7 炭窯	43
8 溝跡	47
9 ピット群	47
10 土星状地形	47
第2節 遺構外出土遺物	53
1 縄文土器	53
2 石器	58
3 金属製品	60
第5章 自然科学的分析	65
第6章 まとめ	68
第1節 捨て場について	68
第2節 沢跡出土の土師器について	68
第3節 炭窯について	69
第4節 まとめ	70
引用・参考文献	72
写真図版 報告書抄録	

図版目次

図 1 遺跡の位置	3	図26 沢跡	38
図 2 調査区地形図	5	図27 沢跡出土遺物	39
図 3 調査行程	6	図28 第1号据立柱建物跡	40
図 4 グリッド配置図	7	図29 第1・2号井戸跡	41
図 5 土層実測図	10	図30 第1号井戸跡出土遺物	42
図 6 周辺の遺跡	13	図31 第1号炭窯1	44
図 7 造構配置図	14	図32 第1号炭窯2	45
図 8 第1号屋外炉	16	図33 第1号炭窯3	46
図 9 捨て場遺物出土状況 1	18	図34 第1号溝跡	48
図10 捨て場遺物出土状況 2	19	図35 ピット群1	49
図11 捨て場遺物出土状況 3	20	図36 ピット群2	50
図12 捨て場出土遺物・土器 1	21	図37 ピット群3	51
図13 捨て場出土遺物・土器 2	22	図38 土壘状地形	52
図14 捨て場出土遺物・土器 3	23	図39 造構外出土遺物・土器 1	54
図15 捨て場出土遺物・土器 4	24	図40 造構外出土遺物・土器 2	55
図16 捨て場出土遺物・土器 5	25	図41 造構外出土遺物・土器 3	56
図17 捨て場出土遺物・土器 6	26	図42 造構外出土遺物・土器 4	57
図18 捨て場出土遺物・土器 7	27	図43 造構外出土遺物・石器 1	59
図19 捨て場出土遺物・土器 8	28	図44 造構外出土遺物・石器 2	60
図20 捨て場出土遺物・石器 1	29	図45 造構外出土遺物・石器 3	61
図21 捨て場出土遺物・石器 2	30	図46 造構外出土遺物・石器 4	62
図22 捨て場出土遺物・石器 3	31	図47 捨て場遺物接合図	63
図23 第1～3号土坑	33	図48 グリッド遺物分布図 石器・石製品	64
図24 第4～7号土坑	35		
図25 第1号土坑出土遺物	36		

写真図版目次

写真 1 遺跡近景	82	写真12 炭窯	93
写真 2 遺跡近景	83	写真13 土壘状地形	94
写真 3 作業風景	84	写真14 捨て場出土遺物・土器 1	95
写真 4 基本層序	85	写真15 捨て場出土遺物・土器 2	96
写真 5 屋外炉	86	写真16 捨て場出土遺物・土器 3	97
写真 6 捨て場	87	写真17 捨て場出土遺物・土器 4	98
写真 7 土坑土層断面	88	写真18 捨て場出土遺物・石器	99
写真 8 土坑完掘	89	写真19 土坑・沢跡・井戸跡出土遺物	100
写真 9 沢跡	90	写真20 遺構外出土遺物・土器・金属製品	101
写真10 挖立柱建物跡	91	写真21 遺構外出土遺物・石器	102
写真11 井戸跡	92		

第1章 調査要項

1 調査目的

西海岸広域農道建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する西浜折曾の関遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成11年度 平成11年9月28日～同年10月29日

平成12年度 平成12年6月20日～同年8月11日

平成13年度 平成13年8月20日～同年10月31日

3 遺跡名及び所在地 西浜折曾の関遺跡（青森県遺跡番号17015）

西津軽郡深浦町大字関字柄沢1-126外

4 調査対象面積 8,000平方メートル

5 調査委託者 青森県農林水産部農村整備課

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員 村越 漢 青森大学教授（考古学）

調査員 藤沼邦彦 弘前大学人文学部教授（考古学）

佐藤 仁 元青森県立弘前高等学校教諭（歴史学）

島口 天 青森県立郷土館学芸主査（地質学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島邦夫（現県立郷土館長）

次長 成田誠治（平成14年3月退職）

総務課長 西口良一（現県商工観光労働部総括主幹）

文化財保護総括主査 笹森一朗（平成12・13年度担当）

文化財保護主事 神 康夫（平成11年度担当・現文化財保護課）

文化財保護主事 斎藤 正（平成11・12年度担当）

文化財保護主事 平山明寿（平成13年度担当）

調査補助員 盛田英人、新谷幸子、中村敦子、長浜久美子、坂本光子、

佐藤由加子、伊藤敦子、天内敦子、伏見友里

第2章 調査方法と調査経過

第1節 調査方法

1 調査区域の設定

今回調査した西浜折曾の関遺跡は、小童子川の左岸の丘陵部に位置している。グリッドは道路建設用地内のセンター杭No.2を基準として調査区内に4mのメッシュを組んでいくこととした。グリッドの呼称は北西隅としている。南北軸は磁北を基準としており、国土座標軸から東へ6°ずれている。従って真北は本調査区基準（南北）軸より西へ6°ずれることとなる。また、調査で使用した標高原点は、道路建設用地内にある工事用測量原点からレベル移動を行い、調査区域内に適宜設置した。

2 発掘調査

- 1) グリッド単位で発掘区を拡張する方法を探った。
- 2) 粗掘りは、層位的に進め、遺物・遺構を確認してから、下層の掘り下げについて判断した。また、一部重機による表土除去を行った。

3 実測図の作成

- 1) 遺構については、大きさによって4分法、或いは2分法によって土層観察用のベルトを設定し、精査した。
- 2) 遺構の実測図（平面図・断面図）の縮尺は20分の1を原則として作成した。
- 3) 遺構外出土遺物については、原則としてポイント・レベルを記録して取り上げた。
- 4) 調査区の基本土層については、必要に応じて縮尺20分の1の実測図を作成した。

4 写真撮影

- 1) 遺構については、確認状況・土層断面・遺物出土状況・発掘状況等を中心に撮影した。
- 2) その他必要に応じて、基本層序、遺跡の状況・調査状況についても記録した。
- 3) 使用カメラは35ミリカメラで、フィルムはモノクロームとカラーリバーサル（スライド）及びネガカラーの3種類のフィルムを主に使用したが、必要に応じてポラロイドカメラも使用した。

(笹森)

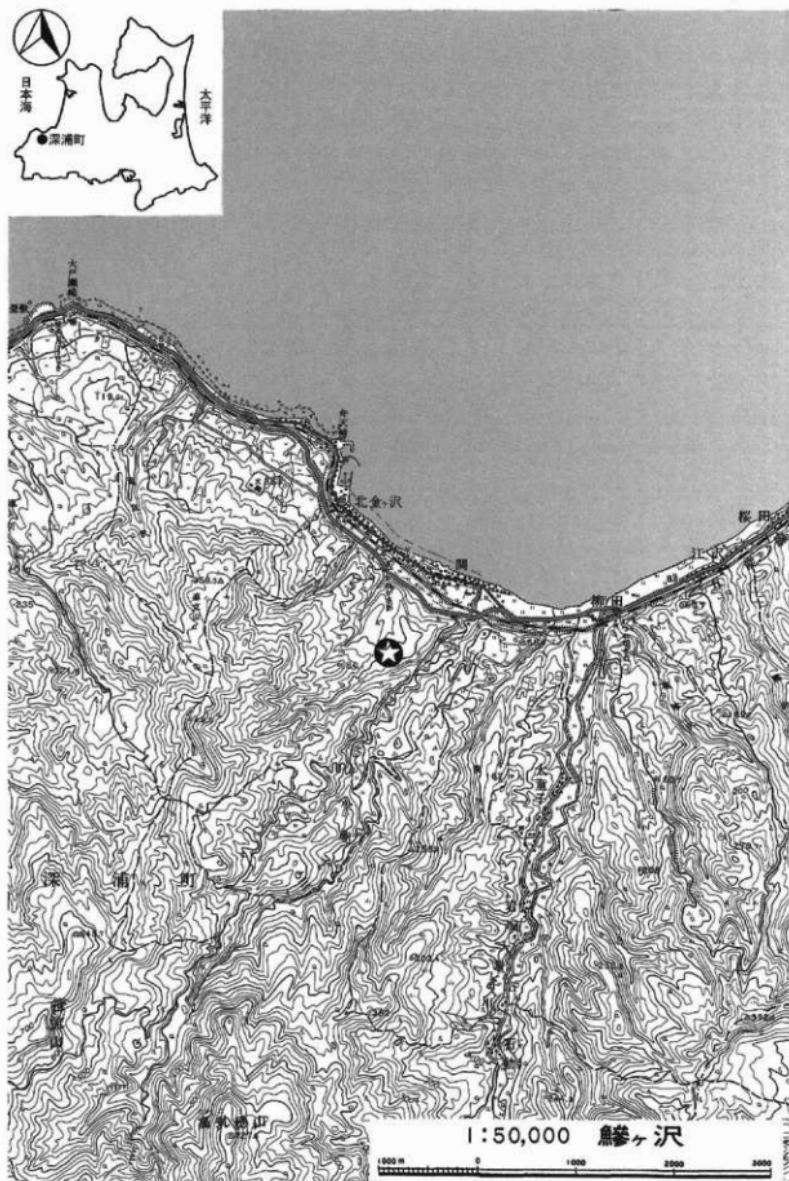


図1 遺跡の位置

第2節 調査経過

平成11年度は9月28日に調査が開始された。1ヶ月間の調査期間ということもあり、調査区に計5本のトレンチを入れ、確認調査を行った。調査の結果、土坑1基、縄文土器や石器の散布地が広範囲に確認されている。また、炭焼き窯とそれに伴うと思われる落ち込みも確認されている。第2トレンチからは溝跡と思われる落ち込みが3カ所で確認されている。覆土の上層には白頭山火山灰（B-Tm）が堆積していた。第5トレンチは急傾斜の沢部に入れられ、片側の斜面からはかなり大きめの円礫が多量に見つかっている。遺構や遺物をブルーシートや土蓋で保護して、10月29日をもって平成11年度の調査を終了した。

平成12年度は6月20日から調査を開始した。排土置き場の問題から、調査区南部から調査を行った。前年度の調査で確認された溝跡は、沢地形が埋まりきったものと確認できた。沢跡は南、或いは南西方向から北及び北東方向に傾斜して検出されている。合流地点では広めの窪地状になっている。調査中も水が流れ、一部に水たまりが形成されていた。遺構は前年度に確認された土坑の周辺から数基の土坑が検出されている。また斜面部からは複数のピットも検出され始めた。調査区際の沢端部からは井戸跡も検出されている。覆土上層からはチャート製の大珠未製品が1点見つかっている。斜面地からは北宋錢の景德元寶が1点出土した。沢の合流地点の窪地の際からは土師器の甕がまとまって出土している。それに伴うと思われる住居跡等の遺構は検出されなかった。その他には縄文時代の土器・石器が散漫に出土している。前年度に入れた第5トレンチ部分は自然の急峻な沢地形であることが確認された。危険な地点でもあったため、周辺に数本のトレンチを入れ、また拡張を行ない、遺構・遺物の検出もなかったため調査を終了とした。8月11日をもって平成12年度の調査は終了した。

平成13年度は8月20日から調査区北側の遺構確認・精査を行った。排土は第5トレンチ付近の急峻な沢部とした。遺物は前年度同様縄文時代の土器片が散漫に出土していた。前年度にはなかった、おそらくは樹木の伐採に伴う運搬路が作られており、それによって切られた土壘状の地形の土壘断面図を作成した。沢に挟まれ舌状に張り出した尾根の平坦部からは縄文時代の石圍炉が検出された。その周辺の斜面部からは多量の土器片や石器類が出土し始めた。小規模ながら捨て場が形成されていたことが確認された。引き続き捨て場の遺物取り上げを行った。沢跡の端部からはもう1基の井戸跡が検出された。それに伴うと思われる溝跡の一部も検出され精査を行った。10月31日、天候にも恵まれ3カ年にわたる調査を終了した。

(笹森)

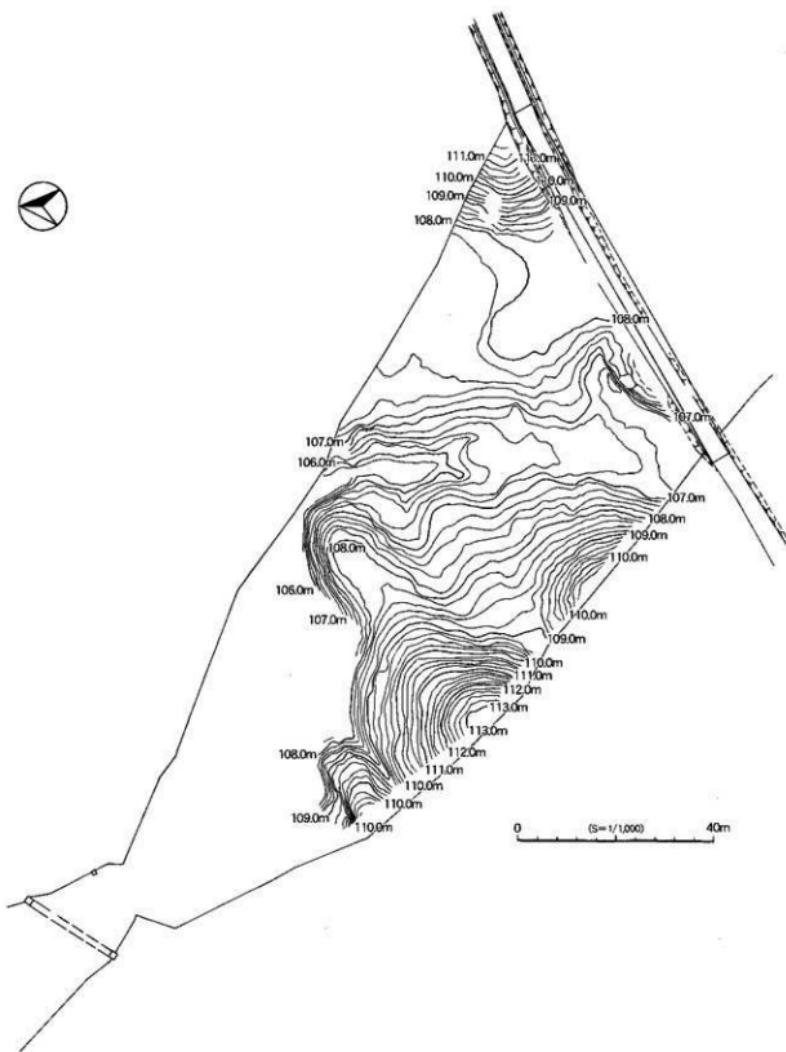


図2 調査区地形図

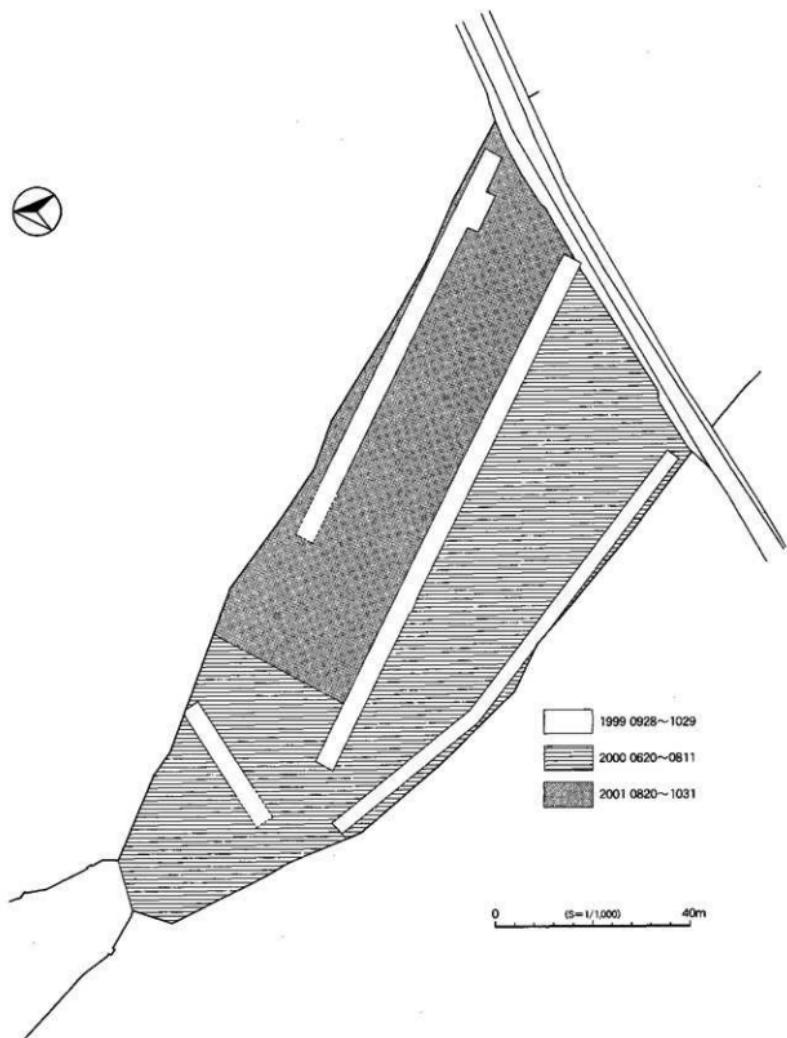


図3 調査行程

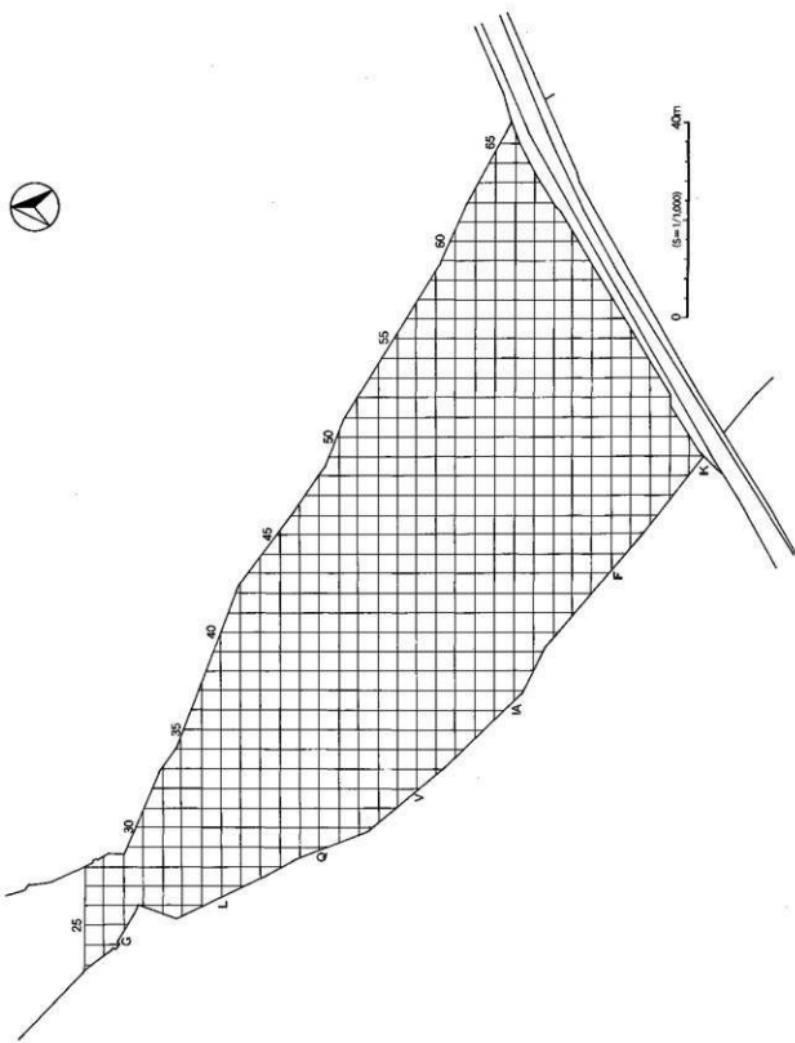


図4 グリッド配置図

第3章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡周辺の地形と地質

青森県立郷土館 島口 天

ここでは、深浦町西浜折曾の関遺跡周辺の地形・地質について述べるが、地形・地質それぞれについて、まず、国土地理院発行の5万分の1地形図「鰐ヶ沢」で示された地域の概要を平山・上村(1985)から引用して述べる。その後、遺跡及びその周辺について現地調査の結果を元に、平山・上村(1985)の記載と対比させて述べる。

地形

本地域は、平山・上村(1985)によって地形的に3分されている。それは、南隣地域の白神山地が徐々に高度を減じながら北北東に直線的に延び、北金ヶ沢一大戸瀬崎間の日本海への突出部に連なる「樹形山地」とその西側の「風谷瀬丘陵」、東側の「赤石丘陵」である。西浜折曾の関遺跡は、赤石丘陵北端に位置する。

赤石丘陵は、樹形山地の東側に広がる緩い起伏の丘陵性山地で、大部分が標高300m以下である。この地域の南縁に沿って標高400mを越える山地が、東の一つ森(439.9m)付近から西の大森山(466.9m)を経て高乳穂山(727.6m)にかけて次第に幅を増しながら連続する。この地域では、西から大童子川・赤石川・中村川の3河川が、地質構造とほぼ平行に流れている。これら3河川に挟まれる山地は、南から北に徐々に高度を減じる。標高100m以下の沿岸部には、西部地域から連続する高位2段の海成段丘面が広く発達し、東の鰐ヶ沢から西の北金ヶ沢付近に向けて、徐々に高さを増している。このほか、鰐ヶ沢南方の標高130m付近に開析された段丘面、海岸沿いに北金ヶ沢・柳田・江沢・赤石などの集落がのる標高5~10mの繩文海進時の段丘面が発達する。

本遺跡は、東側の小童子川が刻んだ谷と西側の小谷に挟まれた、標高100~110mの高位段丘面上に立地する。この段丘面から南東方向には岩木山を遠望でき、約1km北東には海岸線を望むことができる。

地質

本地域は、主として新第三紀の緑色凝灰岩類とそれを覆う泥岩を主とした海成層からなり、先第三紀基盤岩を欠く。また、海岸沿いには第四紀の海成段丘堆積物が、これらの新第三系を不整合に覆い分布している。新第三系は、下位から大戸瀬層・田野沢層・大童子層・赤石層・舞戸層及び鳴沢層に分けられる。大戸瀬層と田野沢層の間には顕著な不整合があるが、大童子層以上は、部分的な傾斜不整合を除いてほぼ整合に重なっている。

大戸瀬層は樹形山地を中心に、風谷瀬丘陵東縁部や赤石丘陵南西部の高乳穂山周辺にかけて分布する。全体として安山岩溶岩やその火碎岩を主とするが、流紋岩溶岩とその火碎岩のほか疊岩・砂岩・泥岩などの碎屑岩類も伴う。

田野沢層は大戸瀬層を不整合に覆い、西海岸沿いの風谷瀬丘陵から樹形山地の東縁を経て赤石丘陵の南縁に沿って広く分布する。温暖な浅海域を示す大型有孔虫のほか、小型有孔虫・貝化石・サンゴ・ウニなどの化石を多産する疊岩・砂岩・泥岩・石灰岩を主とし、安山岩や流紋岩の火碎岩を伴う。

大童子層は田野沢層を整合しない一部緩い傾斜不整合に覆い、風谷瀬丘陵と赤石丘陵南部に断続的に分布する。赤石川と大童子川の間で最も厚く発達するが、そこから東西に厚さを減じる。板状層理のよく発達した典型的な珪質泥岩からなる。

赤石層は、赤石丘陵に広く分布する。黒色泥岩からなり、塊状泥岩は非常に少なく、硬質泥岩と軟質泥岩との互層からなる板状層理に富むものが大部分である。大童子層の珪質泥岩と似ていて漸移的に移り変わるために、両者の境界は調査者によって個人差が大きい。

舞戸層の分布は赤石丘陵に限られる。北金ヶ沢－赤石間では、沿岸部の標高100m以下の丘陵部に限られるのに対して、赤石川以東ではその分布は内陸部に向かって急激に広がる。主として青灰色の塊状シルト岩からなり、酸性凝灰岩を挟む。下位の赤石層を整合に覆う。

鳴沢層は分布が狭く、北金ヶ沢付近と中村川東側に限られる。青灰色の泥質砂岩と細粒砂岩からなり、貝化石に富む。

第四系は海成段丘堆積物、岩木火山噴出物、扇状地堆積物、砂丘堆積物及び沖積層よりなる。この中で、海成段丘堆積物を除くと他はいずれも分布は狭い。

本地域の海成段丘堆積物を、段丘面の地形的高位にあるものから順に第Ⅰ段丘、第Ⅱ段丘、第Ⅲ段丘及び第Ⅳ段丘の各堆積物とする。北金ヶ沢から東南東の柳田を経て赤石川河口に向かう海岸線沿いの丘陵には、第Ⅰ及び第Ⅱ段丘が発達する。ここでの第Ⅰ段丘の旧汀線高度は120m前後で、段丘面は海岸に向かって傾いている。堆積物の層厚は5～6mで、主に大戸瀬層などの新第三系を構成する火山岩や泥岩などを礫として含む含礫砂層からなり、風化が進み赤褐色または灰褐色を呈する。また、第Ⅱ段丘の旧汀線高度は80mで、段丘面は海岸に向かって傾いており、開析もやや進んでいる。堆積物の層厚は7～8m、主に淘汰のよい礫層と砂層の互層からなり、シルト層を挟む。砂層の中にはクロスラミナが認められる。

本遺跡内の最も高い地点では、地表面から深さ約2.4m以下に礫層が確認され、その上には層厚約1.2mの灰色細粒砂層、層厚約0.4mの茶灰色礫質砂層、層厚約0.6mの茶褐色シルト質砂層、黒色土層が順に重なる。礫層を構成するのは、泥岩を主とした直径3cm以下の亜円礫である。砂層にはクロスラミナが認められず、直径10cm以下の泥岩・安山岩を主とした亜円礫が散在し、部分的に密集する。砂層上部はシルト質となり、淡灰色を呈する。礫質砂層には弱いラミナが認められ、茶褐色を呈する鉄分を含んだ砂礫質の部分もみられる。シルト質砂層には、安山岩・凝灰岩・泥岩などの亜円礫が含まれ、大きなものでは直径80cmを越えるものもある。このような巨礫は地表面にも露出し、特に沢跡と考えられる場所に多くみられ、表面は風化が進んでいる。黒色土層以外は海成段丘堆積物であり、含まれる礫は新第三系を起源にしていると考えられる。

本遺跡の位置する段丘面の標高は100～110mであることから、この段丘は第Ⅰ段丘に相当すると考えられるが、平山・上村（1985）は地質図上で第Ⅱ段丘としている。平山・上村（1985）が記載した第Ⅰ・第Ⅱ段丘の段丘堆積物は、いずれも本遺跡内でみられる堆積物の特徴と矛盾しないため、本遺跡がどちらの段丘面上に立地しているのかは、今後、さらに詳細な調査を要する。

文 獻

平山次郎・上村不二雄（1985）鰐ヶ沢地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）、地質調査所、86p.

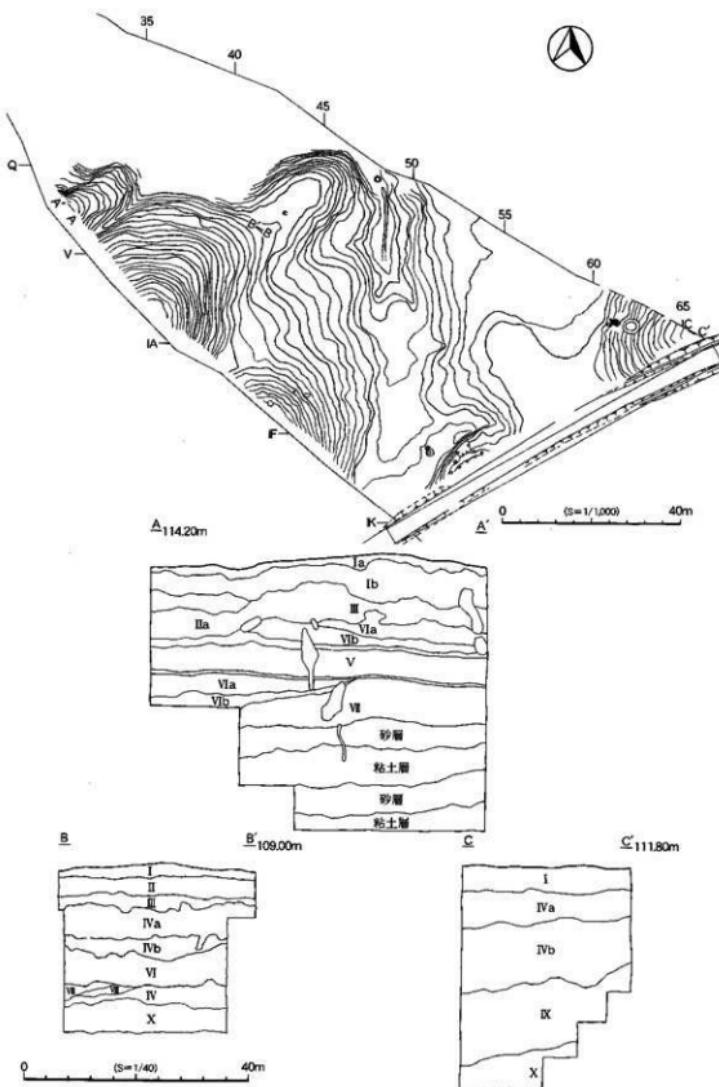


図5 土層実測図



沢跡に露出する巨礫

A-A'セクション

第I a層 黒褐色土	10 YR 2/2	草木多量・腐化物 15%
第I b層 黑褐色土	10 YR 2/3	草木や多い・ローム 15% (ブロック状に巻在)・炭化物 7%
第II a層 黑色土	10 YR 2/1	シルト質・草木あり・白頭山一苦小牧火山灰降下以後の自然堆積層
第II b層 にじみ黄褐色土	10 YR 4/3	白頭山一苦小牧火山灰層
第III 層 黑褐色土	10 YR 2/4	泥炭少量・炭化物 5%
第IV a層 黑褐色土	7.5 YR 5/6	繩文時代の遺物包含層・黑色土とロームの漸移層 は部分的にグリーン化し、粘土質な部分もある
第IV b層 黄褐色土	10 YR 5/6	ローム土体・1~10 cmの大角礫を含む
第V 層 にじみ褐色	2.5 YR 6/4	第IV層と第V層の間の土層で漸移層・1~10 cmの大角礫を少含む
~暗褐色土	~7.5 YR 5/8	複数した部分と互層となる部分もある
第VI a層 オリーブ黄色土	5 Y 6/3	舞戸層の粘土上半・第V層との界面間に数分が凝固
第VI b層 深褐色土	2.5 YR 7/2	舞戸層の粘土下半・非常に乾燥して均質な粘土・非常にかたくしまる
第VI 層 明褐色土	10 YR 6/6	舞戸層の砂層・10~20 cmの大角礫を少含む

B-B'-C-C'セクション

第I 层 黑褐色土	10 YR 2/2	草木多量
第II 層 塗褐色土	10 YR 3/3	シルト質・褐色約 2%・炭化物 1%
第III 层 黑褐色土	10 YR 2/3	シルト質・ローム 1.5%・炭化物 2%
第IV a層 黑色土	10 YR 4/4	粘土質ローム・にじみ黄褐色小塊 1%
第IV b層 黄褐色土	10 YR 5/5	粘土質ローム・褐色 1%・白色中粒 2%・炭色中粒 2%
第VI 层 黑褐色土	10 YR 6/6	粘土質ローム・白色中粒 1%・褐色中塊 1% 黑色小塊・白色中粒 1%・炭色中塊 1%
第VI 层 黄褐色土	10 YR 5/5	粘土質ローム・炭色中粒 2%・褐色中粒 2%・炭色粒 7%
第VI 层 黑褐色土	10 YR 5/5	粘土質ローム・炭色中粒 2%・褐色中粒 2%・炭色粒 7%
第VI 层 黑色土	10 YR 4/6	粘土質ローム・炭色中粒 2%・褐色中粒 2%・炭色粒 7%
第VI 层 黑色土	10 YR 4/6	面を含むローム混合土層

第2節 基本層序

第I層 黒褐色土層 (10YR 2/3 厚さ 5~25cm)

耕作土。締まりがなく、崩れやすい。地点により擾乱を受けており、下位層の粒子の混入や草根の混入も目立つ。

第II層 黒色土 (10YR 2/1 厚さ 10~20cm)

平安から中・近世の堆積土である。腐食質土で、下位に白頭山火山灰 (B-Tm) が層状に混入する地点も見られる。主に沢部に堆積している。

第III層 黒褐色土 (10YR 3/4 厚さ 5~10cm)

繩文時代中期~晚期にかけての遺物包含層。黒色土とロームの漸移層と思われるが、上部の黒色土は遺存していない。

第IV層 明褐色土 (7.5 YR 5／6 厚さ20~40cm)

ローム主体で角礫の含まれない上部層 (IV a 層) と角礫の含まれる下部層 (IV b 層) に分けられる地点も存在する。

第V層 にぶい黄色土 (2.5 YR 6／4 厚さ10~20cm)

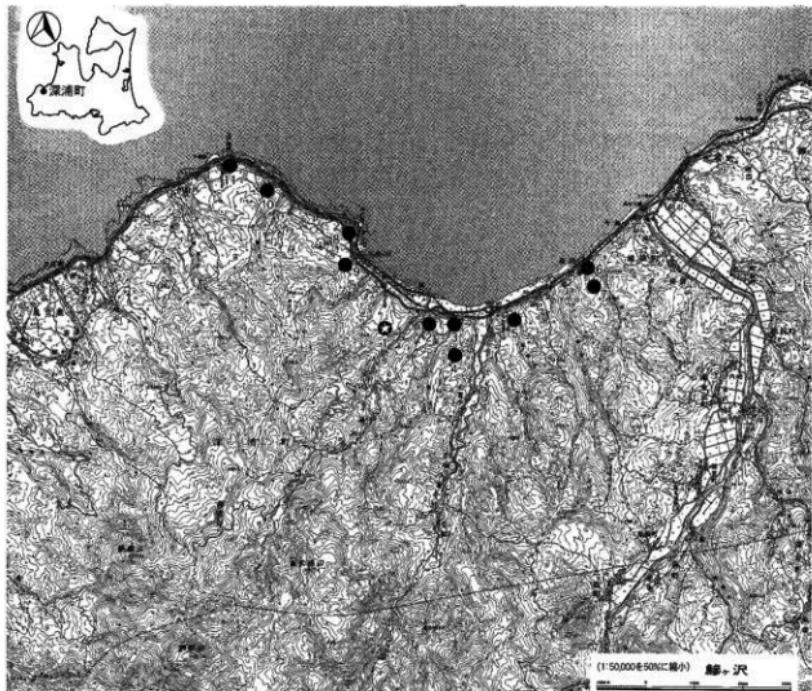
第IV層のロームと粘土及び砂の混土層で、IV層とVI層の漸移層となっている。

第VI層 オリーブ黄色土 (5 YR 6／3 厚さ30~50cm)

舞戸層の粘土層で、層中に砂を含む部分も認められる。

第VII層 明黄褐色土 (10 YR 6／6 厚さ40cm以上)

舞戸層内の砂層。10~20cm大の角礫を少量混入。



周辺の遺跡

番号	遺跡番号	遺跡名	縄文時代			平安	中世	遺跡の性格
			中期	後期	晚期			
1	17015	西浜折曾闇				○		館跡
2	17005	稻ノ山遺跡		○	○			散布地
3	17016	井ノ山城				○	○	館跡
4	17011	小島崎遺跡						散布地
5	17013	柳田遺跡	○	○				散布地
6	17001	桜田(1)遺跡						散布地(時期不明)
7	17027	桜田(2)遺跡						散布地(時期不明)
8	17006	塩見形(1)遺跡						散布地(縄文時代)
9	17007	塩見形(2)遺跡		○	○			散布地
10	17028	神原上野遺跡						散布地(縄文時代)
11	17012	小田沢遺跡		○				散布地

図6 周辺の遺跡

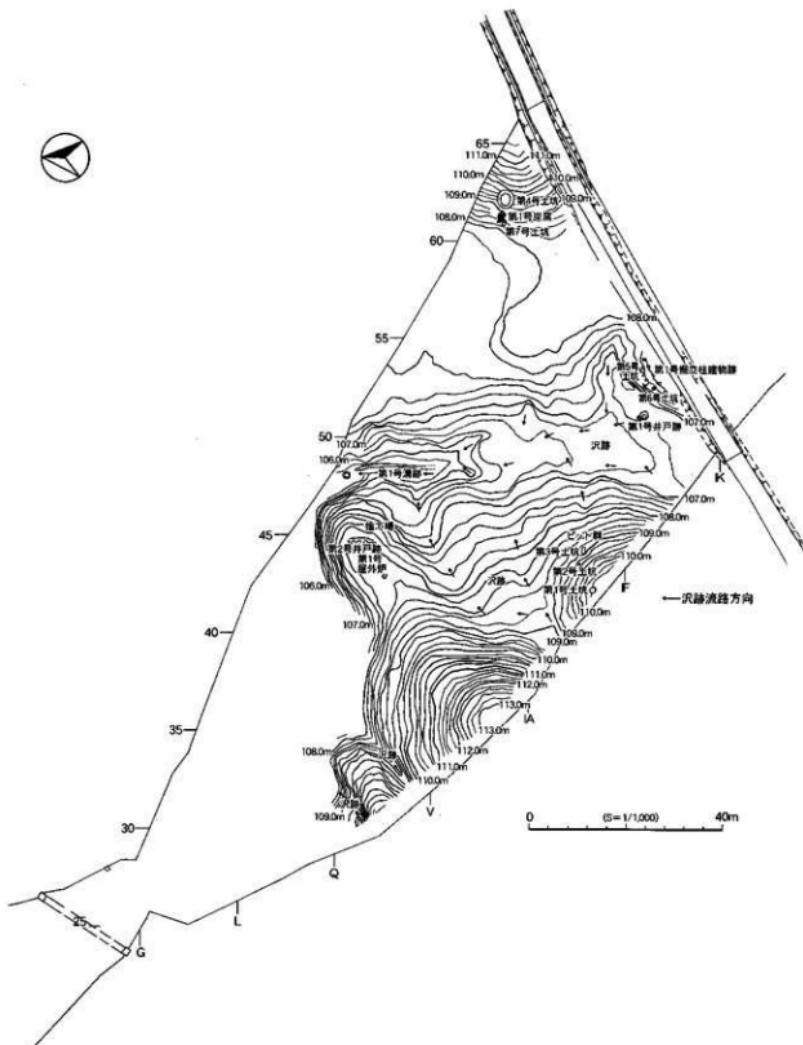


図7 遺構配置図

第4章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の屋外炉1基、捨て場1カ所、土坑2基、奈良時代には水が流れていると思われる沢跡4条、時期不明の掘立柱建物跡1基、土坑5基、近現代と考えられる炭窯1基、井戸跡2基、溝跡1条である。以下各遺構ごとに概要を記述する。

1 屋外炉

第1号屋外炉（図8）

【位置・確認】調査区中央の丘陵状の盛り上がりの頂部にあたるS-42グリッドに位置する。第IV層上面で焼土とそれを取り囲む礫の広がりとして確認した。

【重複】周辺を掘り窪めた痕跡や柱痕は検出されなかつたため、単独で構築されたものと判断した。

【平面形・規模】石囲炉であるが、南東側の礫は欠けている。11個の礫で構成されているが、礫は間隔をやや開けて約100cm×85cmの楕円状に配置されている。火床面は礫から5~10cm程内側に約70cm×50cmの楕円状に拡がる。火床面の厚さは8cmで、あまり固くない。

【堆積土】3層に分層される。第3層は礫を埋め込んだ際の掘方と思われる。

【出土遺物】炉内から遺物は出土していない。

【小結】前述のようにこの遺構には上屋構造がなかったものと思われ、形態から縄文時代の屋外炉と考えられる。遺物の出土がなく時期決定の根拠に欠けるため詳細は不明であるが、位置関係から捨て場と関連があるものと思われる。なお、遺構の南東方向には岩木山が眺望できる。 (平山)

2 捨て場（ST-01）（図9~22）

第1号屋外炉を囲むように尾根の平場の際から斜面にかけて、小規模ながら縄文時代の捨て場が形成されている。時期は縄文時代中期から後・晩期にかけての土器や石器類がほとんどである。図9~11から見ても分かるように、遺物量は比較的南東側に多い傾向が認められた。土器は精製土器に比べ縄文後~晩期の粗製土器が圧倒的に多い。しかし、ほとんどが破片での出土で復元個体は極めて少ない。ここでは遺構外の遺物も含めて以下のように分類する。

第I群土器 縄文時代中期の土器を一括した。

第1類 円筒上層a式に比定されるもの。

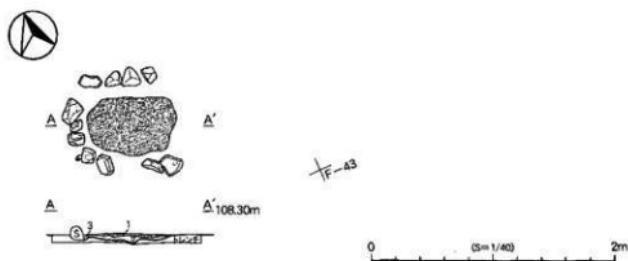
第2類 円筒上層b式に比定されるもの。

第3類 円筒上層c式に比定されるもの。

第4類 榎木林式に比定されるもの。

第5類 最花式に比定されるもの。

第6類 大木10式に比定されるもの。



第1号屋外炉
第1層 赤褐色土 5YR4/6 塩化物約2%。第2・3層よりしまりあり。
第2層 黄色土 10YK4/6 挖土前、塩化物約1%。
第3層 黄色土 10YK4/6 砂の層方、第2層より堆みがある。

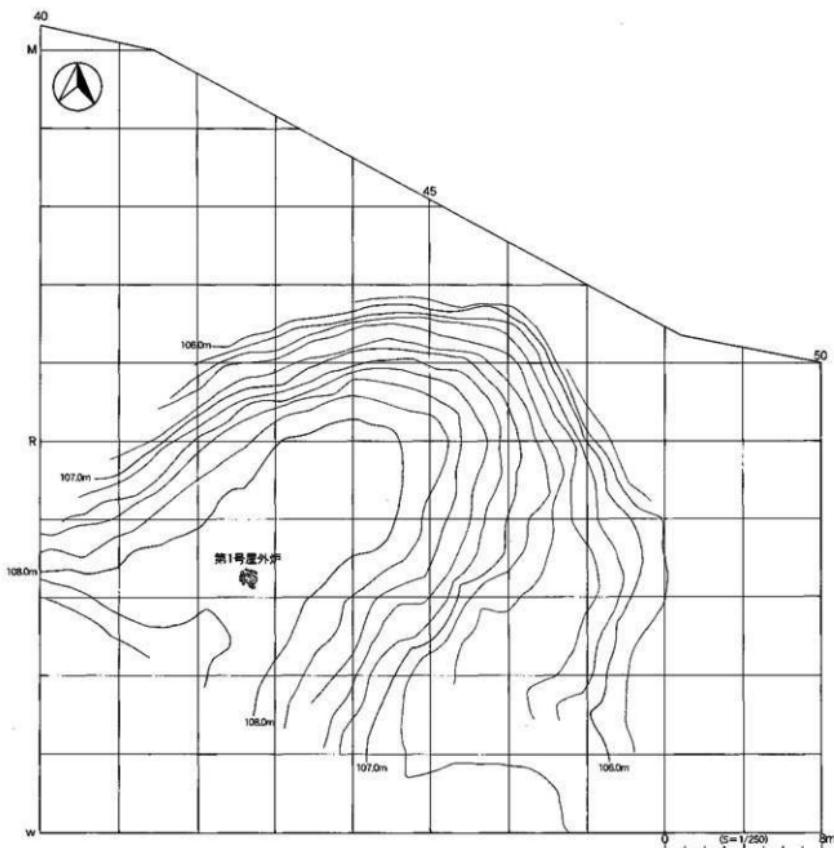


図8 第1号屋外炉

第II群土器 繩文時代後期の土器を一括した。

- 第1類 地文縄文に沈線・擦消し帯を有するもの。
- 第2類 無文に沈線を有するもの。

第III群土器 繩文時代晩期の土器を一括した。

- 第1類 入組文を有するもの。
- 第2類 三叉文を有するもの。
- 第3類 玉抱三叉文を有するもの。
- 第4類 羊齒状文を有するもの。
- 第5類 雲形文を有するもの。

第IV群土器 粗製土器・底部を一括した。

- 第1類 L R 縄文が施されるもの。
- 第2類 R L 縄文が施されるもの。
- 第3類 羽状縄文が施されるもの。
- 第4類 縦位縄文が施されるもの。
- 第5類 無節縄文が施されるもの。
- 第6類 無文或いは擦痕を有するもの。
- 第7類 細縄文が施されるもの。
- 第8類 底部。
 - a種 台(脚)が付くもの。
 - b種 高台が付くもの(高台気味も含まれる)。
 - c種 平底。

捨て場出土土器(図12~19)

1~5は縩文時代中期の土器片。すべて胴部片で隆帯が貼り付けられ区画内には刺突が施される。円筒上層d式に比定される。6~33は縩文時代後期の土器。6・7は同一個体と思われ、地文L R斜縄文に沈線・磨り消しが施される。十腰内I式、或いはそれ以前の土器に比定されるものと思われる。8~19は胴部片。地文無文に沈線が施される。十腰内I式に比定される。20~22は口縁部片。地文斜縄文に沈線が施される。23~33は胴部片。地文斜縄文に沈線・磨り消しが施される。34~63は縩文時代晩期の土器。34~47は口縁部片。沈線により三叉文が施される。64~132は鉢・深鉢形土器。64~112口縁部。L R斜縄文が施文される。口縁部は外反・直立・内湾の3種類に分けられる。口唇部の断面形態も平・円・丸・銳に分けられる。113~130は胴部片。L R斜縄文が施文される。131・132は底部。胴下部にL R斜縄文が施文される。131は平らに、132は高台気味に作られている。133~157は深鉢形土器の口縁~胴部片。R L縄文が斜・横位に施される。158~189は無文や擦痕が施される。底部は平らなもの(158・187)、高台気味のもの(188)、高台付きのもの(189)が認められる。190・191は無節の斜縄文が施される。192~203は細縄文が施される。204~225は底部。204~208は台(脚)付き、209~213・216・217は高台付き、214・215・218・219は高台気味に作られている。220~225平底。221と222は多少上げ底気味に作られている。

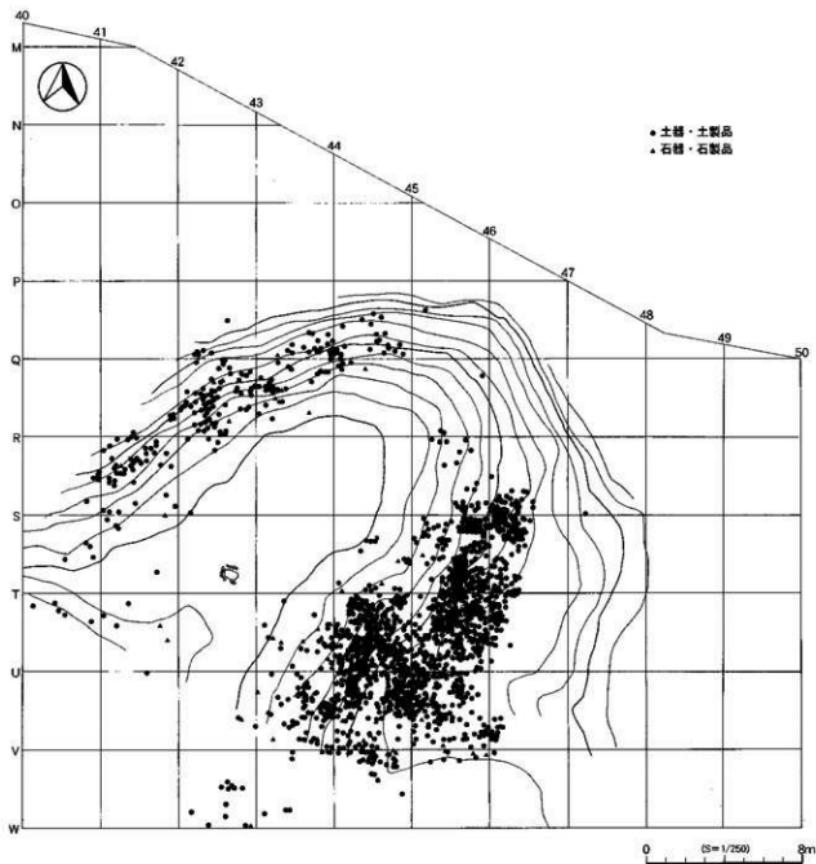


図9 捨て場遺物出土状況 1

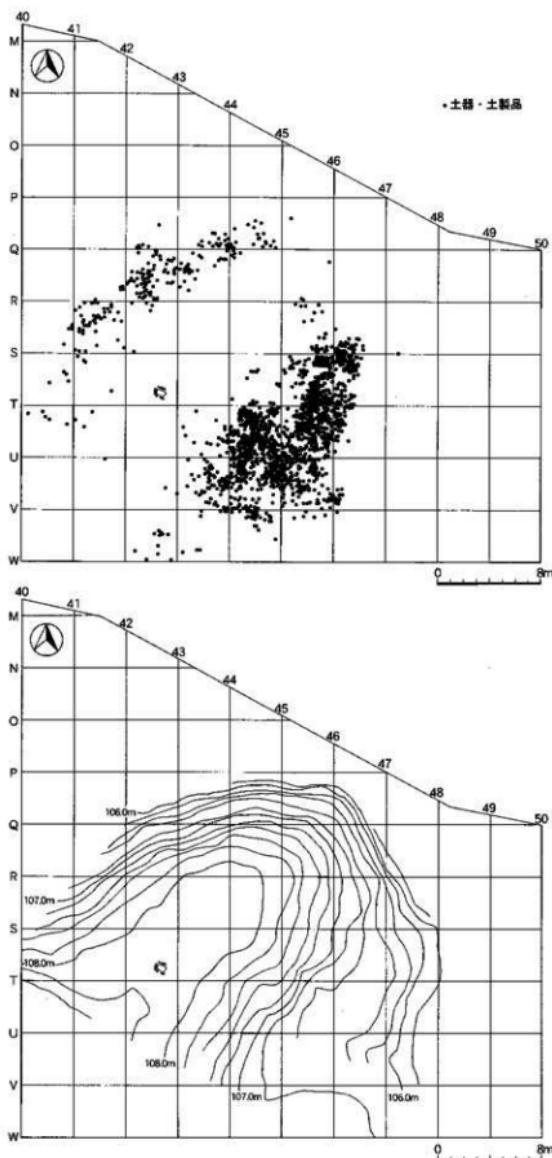


図10 捨て場遺物出土状況 2

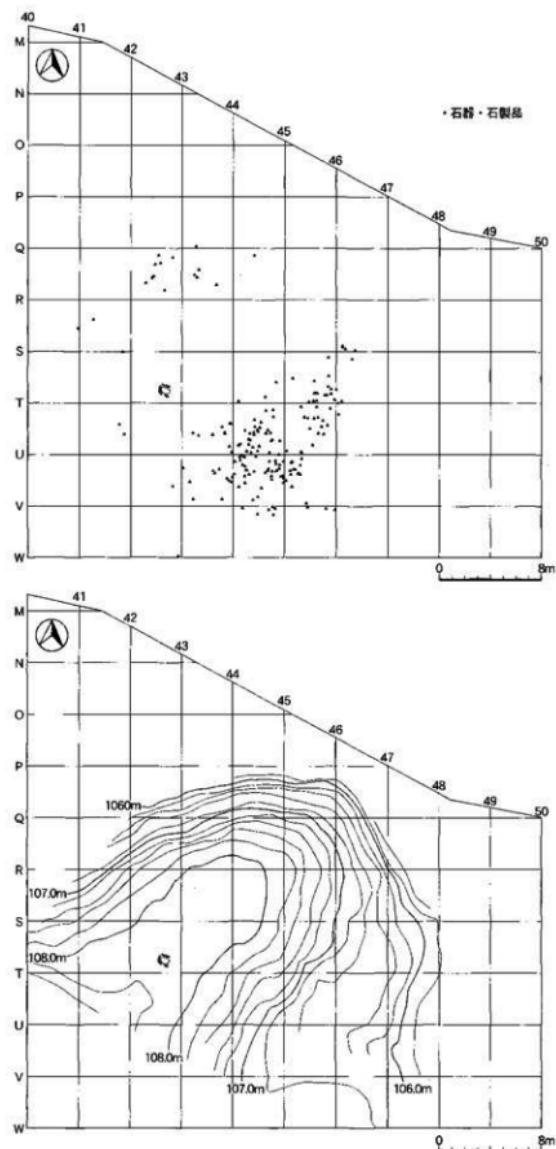


図11 捨て場遺物出土状況3

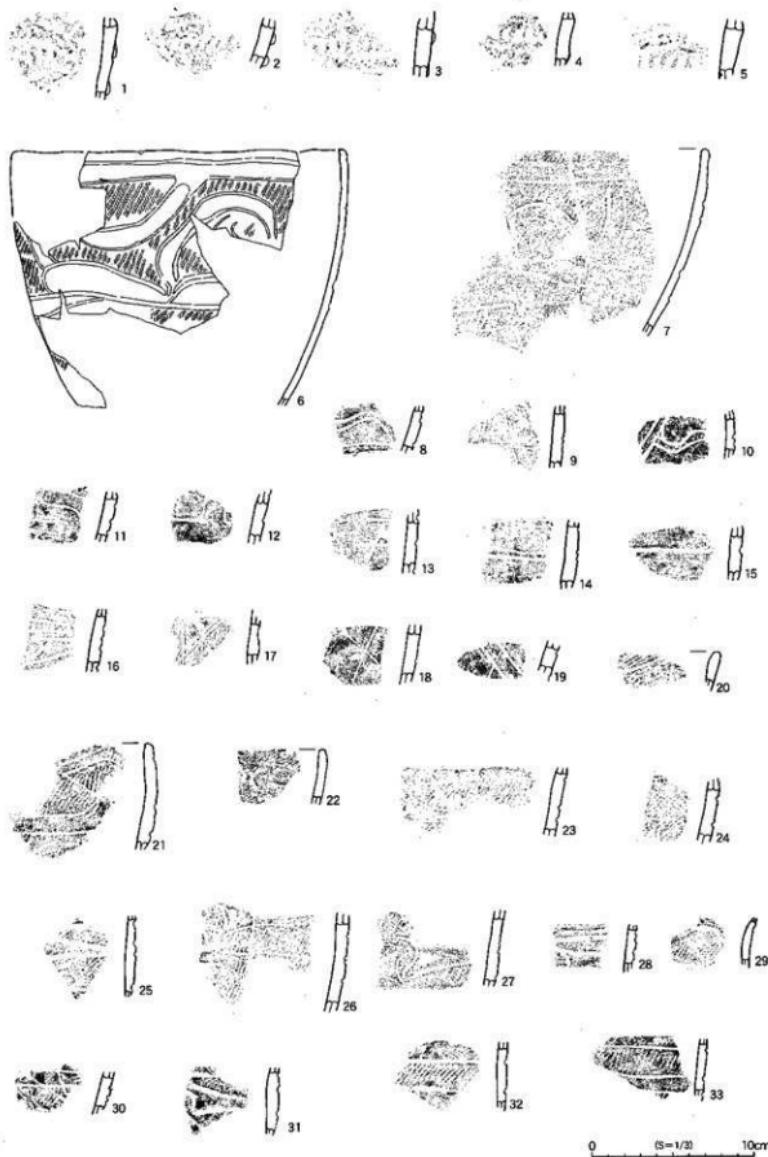


図12 捨て場出土遺物・土器 1

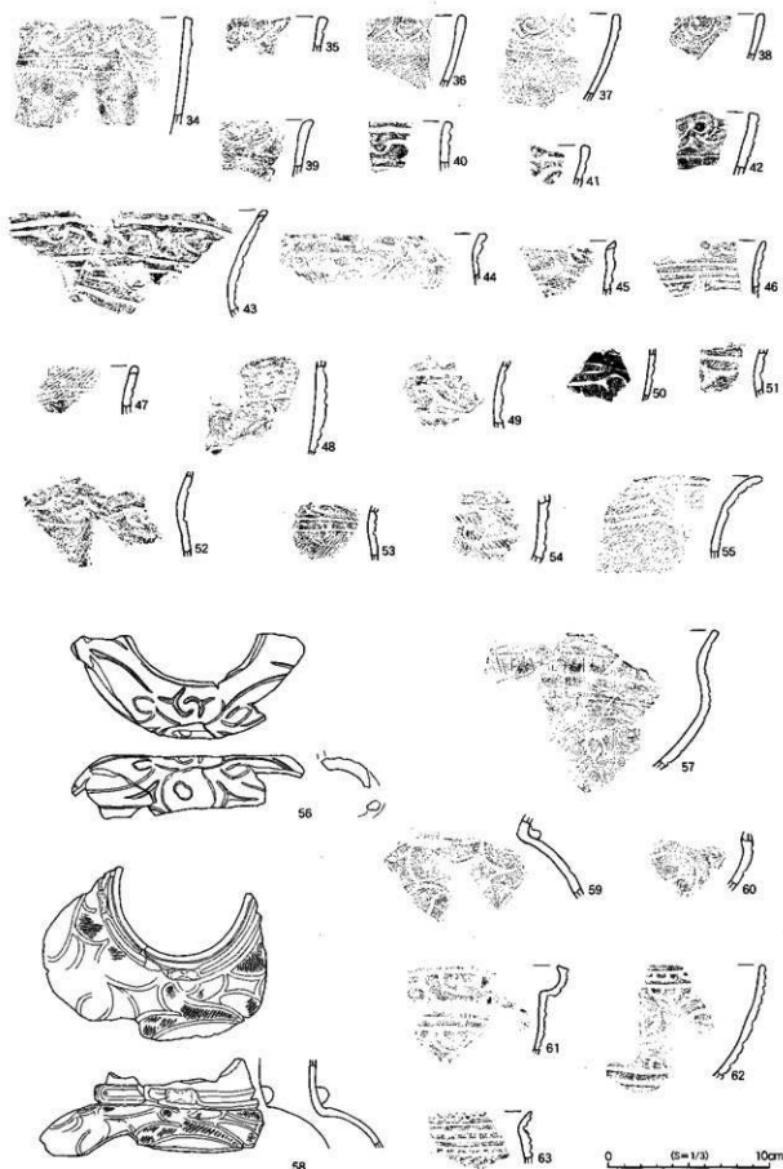


図13 捨て場出土遺物・土器2

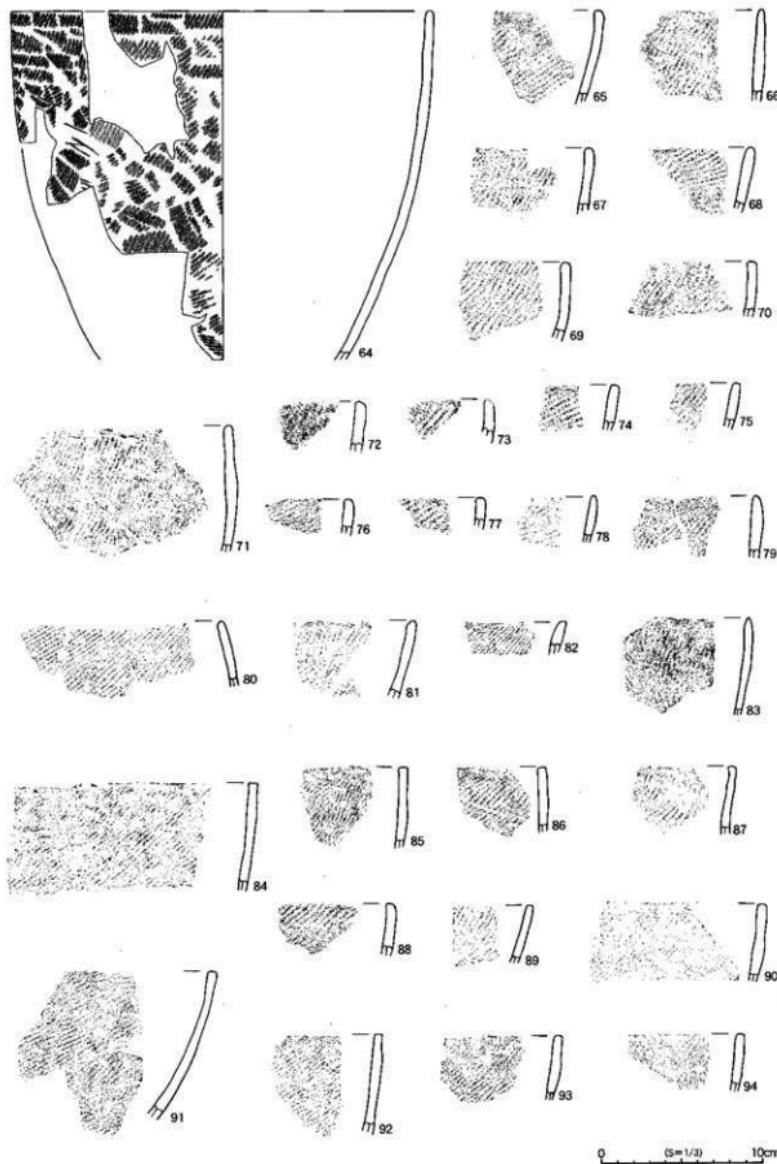


図14 捨て場出土遺物・土器3

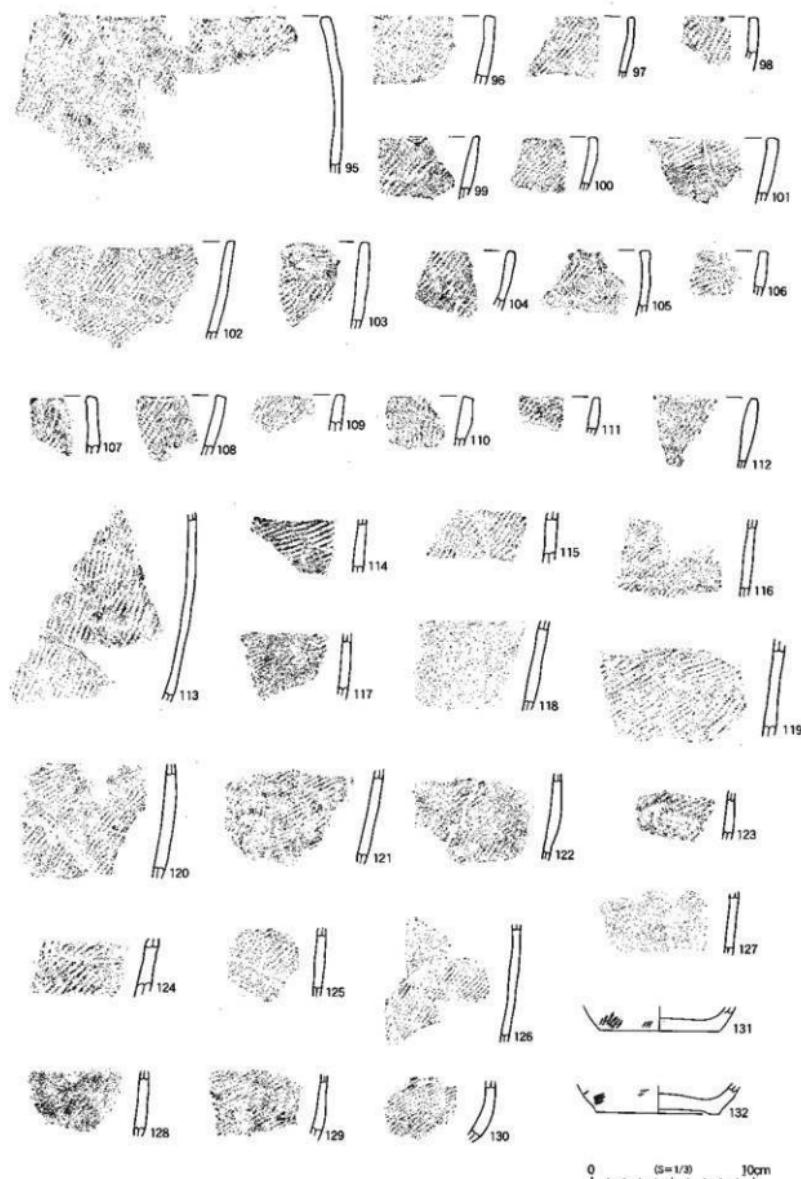


図15 捨て場出土遺物・土器4

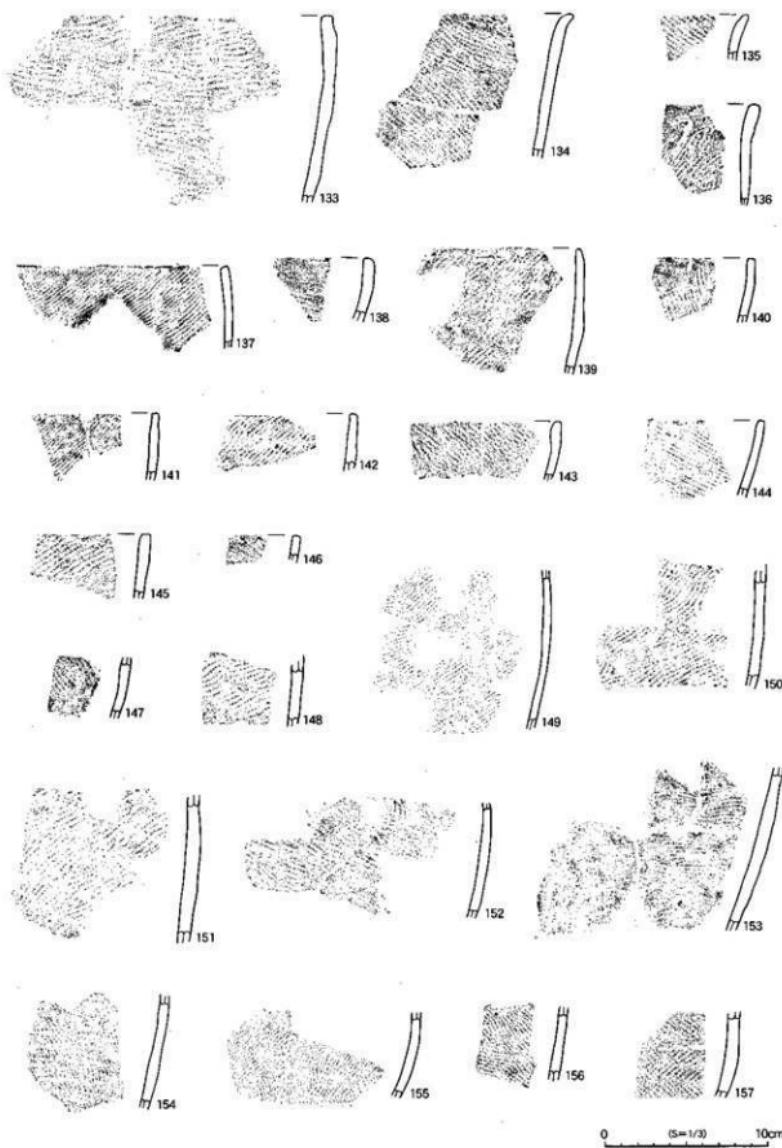


図16 捨て場出土遺物・土器5

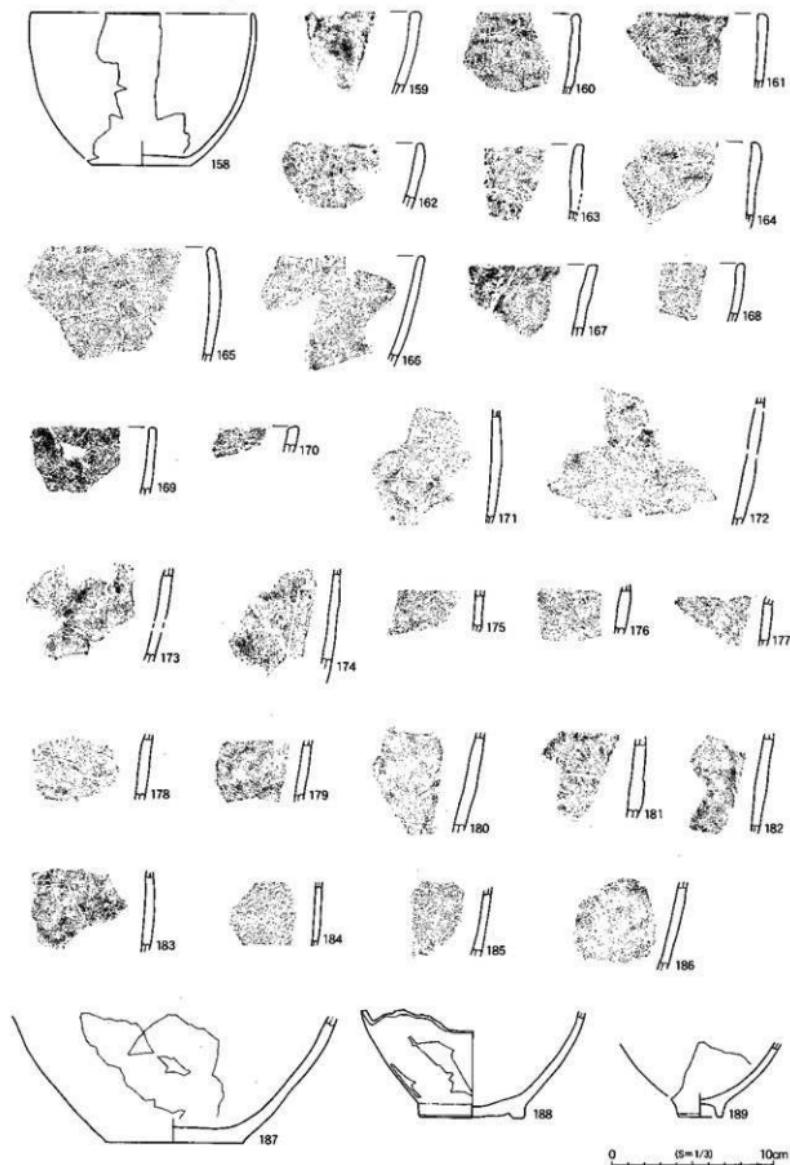


図17 捨て場出土遺物・土器6

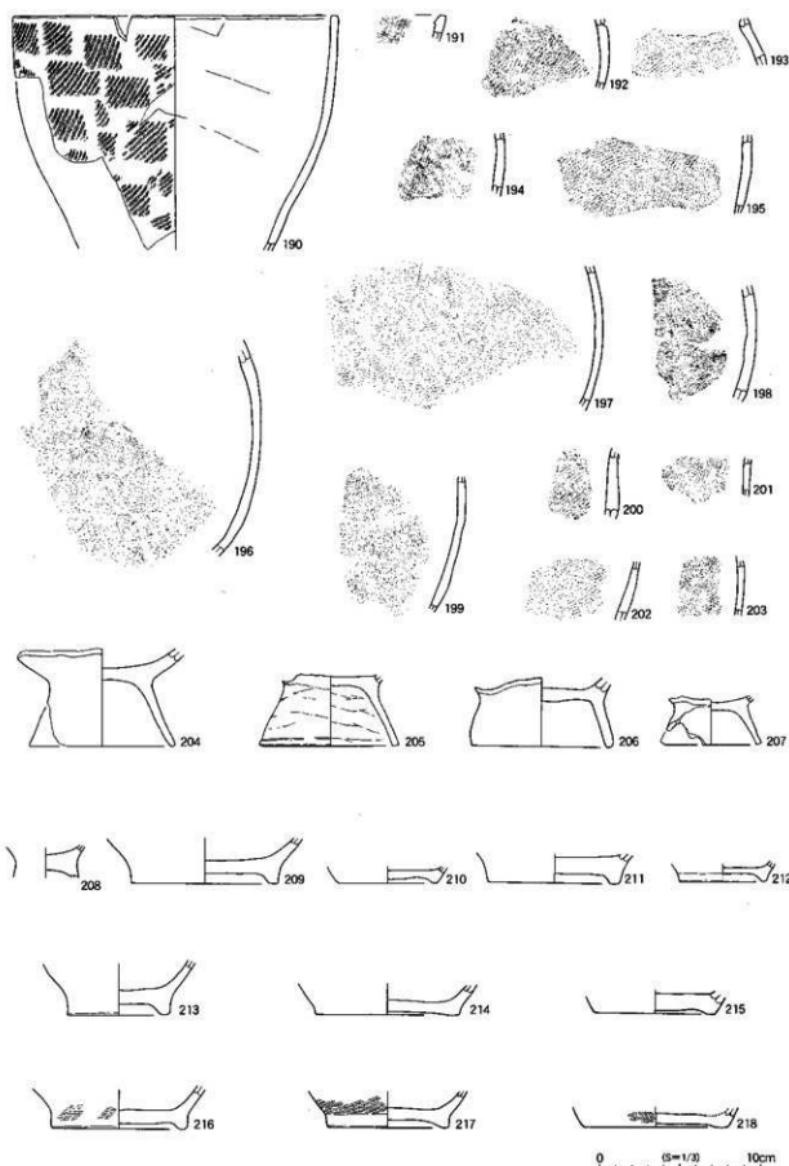


図18 捨て場出土遺物・土器7

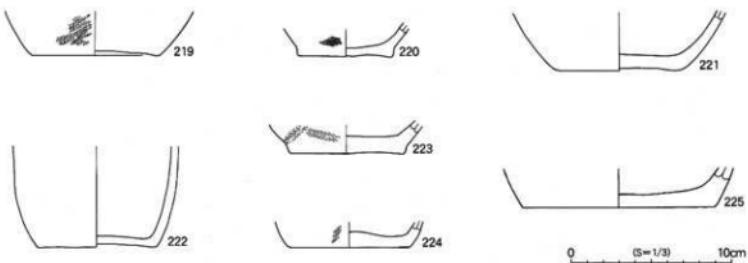


図19 捨て場出土遺物・土器8

捨て場出土石器（図20～22）

捨て場から出土した石器は、剥片石器が総数百六十五点、礫石器総数七十三点である。器種は石鎌・石錐・石匙・スクレイバー・石斧・磨石・敲石・凹石がある。

石鎌は六点の出土である。無茎のもの（1）と有茎のもの（2～6）がある。1は二等辺三角形状の無茎凹基の石鎌で、断面は凸レンズ状である。先端が欠損している。2～6は有茎で、凸基のもの（2～5）のものと平基（6）のものがある。2・3・5は菱形状、4は柳葉形状、6は三角形状である。断面は凸レンズ状がほとんどであるが、3・4は三角形状になる可能性がある。3は被熱によって側縁および器面の一部が被熱によりハジケている。4は器面の一部に表皮が残るほか、側縁が欠損している。5・6は基部の先端が欠損している。

石錐は一点出土した。7は柄部のある石錐で、刃部及び柄部は両面から加工が施されている。刃部断面は三角形状である。

石匙は二点出土した。8は欠損品であるが、基部の形状から本類に納めた。側縁の加工は主に片面のみ施されている。9は小型の石匙である。断面は厚い凸レンズ状である。

スクレイバー類の出土総数は三十六点で、図化したのは一六点である。刃部の形成される辺の数と刃部形状によって分類される。10～14は剥片の一側辺に刃部が形成されたもので、10・11・13は縦長剥片、12・14は横長剥片を素材としている。刃部の調整は、10が両面から施されている他は、片面調整である。刃部の形状は直線的なものがほとんどであるが、12は外湾・13は内湾している。11の一側縁には使用痕がみられる。15～20は剥片の二側辺に刃部が形成されたもので、18以外は縦長剥片である。刃部は17と19が両面から施されている他は、片面調整である。刃部は、15・16・19は向かい合う側縁にあるのに対し、17・18・20は隣り合う側縁に形成されている。20の一側縁には使用痕がみられる。16は形状から石匙の欠損品の可能性が、また、19は端部に両側から丁寧な調整が施されていることから石錐の可能性もある。21は縦長剥片の三側縁に刃部が形成されたものである。刃部調整は主に片面から行われているが、一部両面に及ぶものもある。22は細部調整が行われた剥片で、23～25は辺の一部に使用痕のある剥片である。

なお、図示しなかったが、剥片が総数で百十点出土しているほか、T-42・U-43・U-44グリ

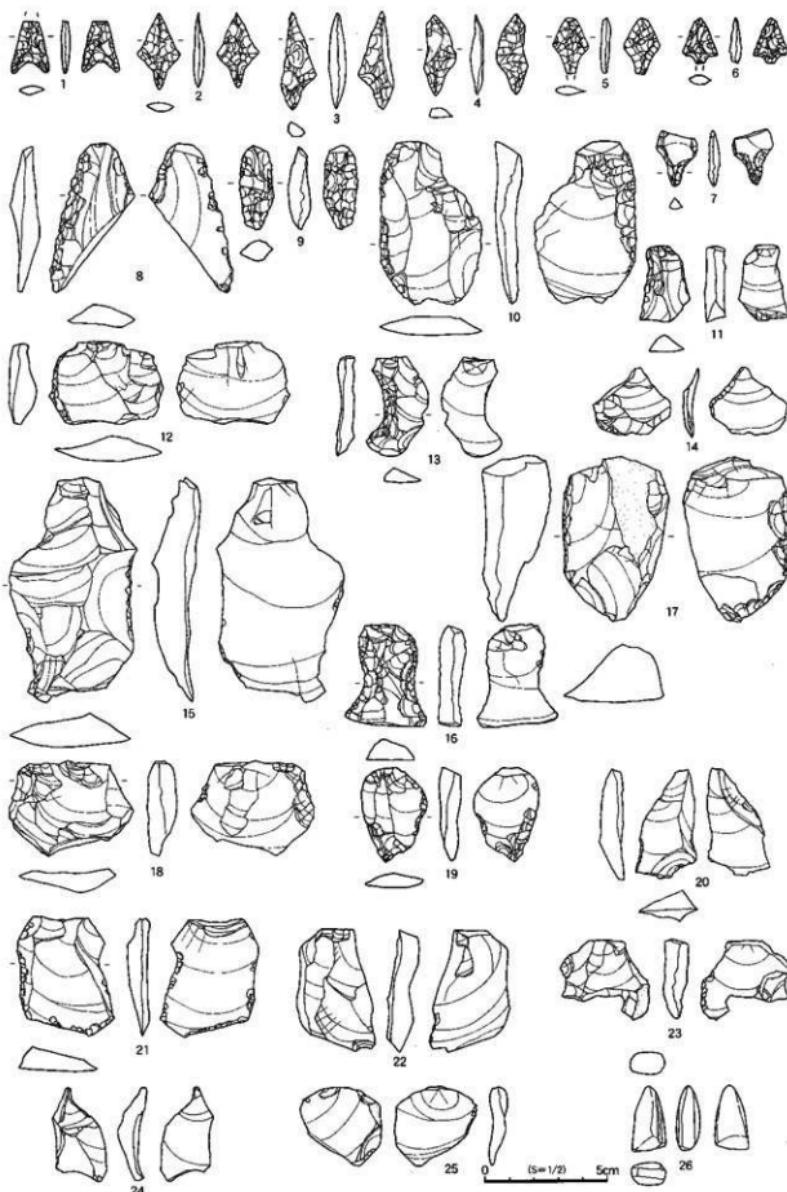


図20 弃て場出土遺物・石器1

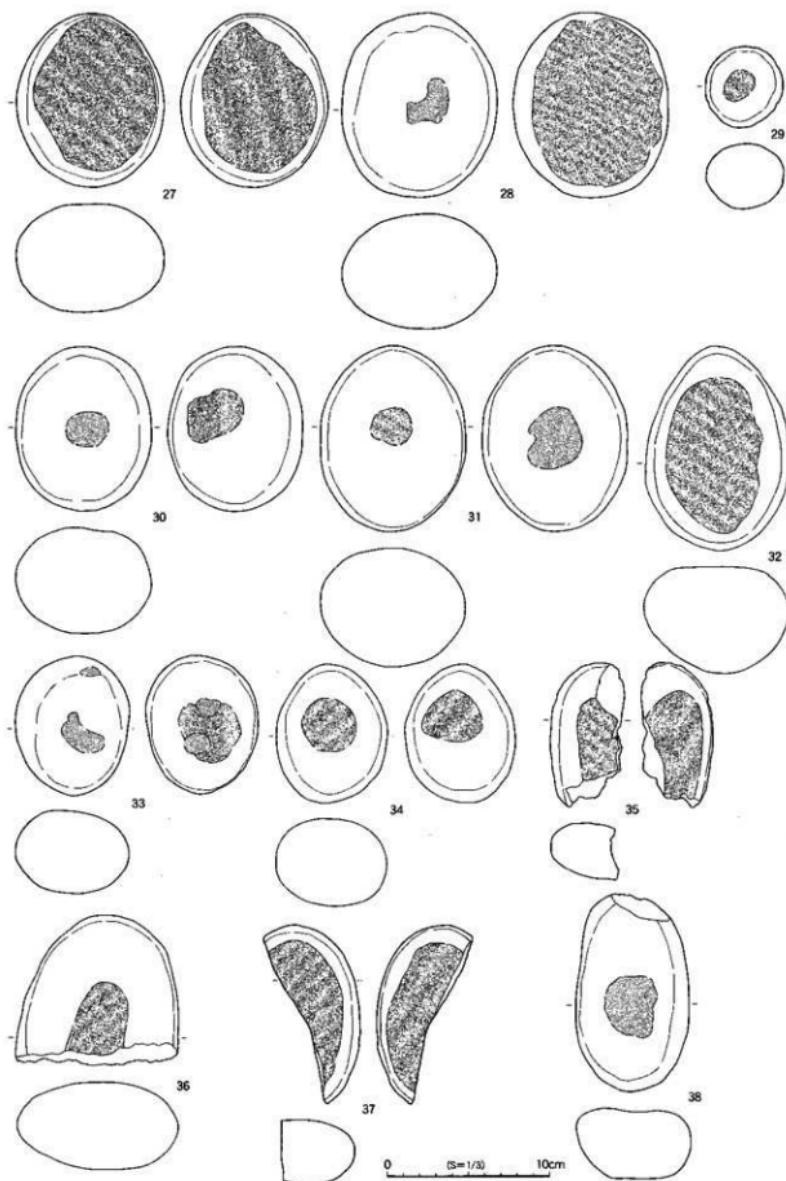


図21 捨て場出土遺物・石器2

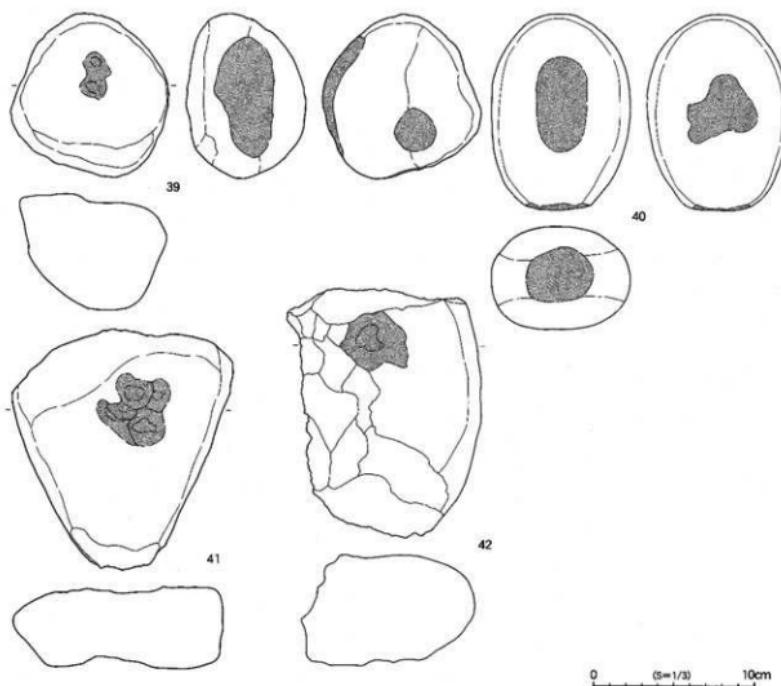


図22 捨て場出土遺物・石器3

ドから黒曜石片が計四点出土している。また、メノウ片がT～U-44とU-45グリッドから計六点出土している。

石斧は磨製石斧が二点出土している。26はミニチュアと思われる小型のものであるが、側縁に擦り切り痕がみられるものである。もう一つは刃部細片であるが、小破片のため図示しなかった。

磨石は十一点出土し、全て図化した。形状には円礫(27～31・33・34)と偏平礫(32・35～37)のものがある。28・30・31・33のようにスリ面の反対側にタタキがみられるものもある。27・28・32・35・37はほぼ器面全体にスリ面が広がっているが、それ以外は器面中央部に径3cm程のスリ面がある。ほとんどのものは両面にスリもしくはタタキ面がみられるが、29・32・36は片面のみである。

蔽石の出土は二点である。38・40ともに楕円礫で、偏平部にタタキがみられるが、40は両面のほかに端部にもタタキがあり、端部のタタキは平坦面が形成される程使用されたものである。

凹石の出土は三点である。39は円礫で、裏面および端部にはタタキがみられる。41・42は大型の偏平礫であるが、いずれも端部が欠損したものである。41は何個かの凹みが集中しており、繰り返し使用されていたことが窺われる。

なお、自然礫が総数で五十五点出土しているが、これらについては図化を割愛した。 (平山)

3 土坑

第1号土坑（SK-01）（図23・25）

【位置・確認】 I D・E・42・43グリッドに位置する。平成11年度調査の第2トレンチで、黒～暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】認められない。

【平面形・規模】 平面形は円形を呈する。開口部で長径212cm、短径183cm、底面で長径182cm、短径180cm、確認面からの深さは88cmを計測する。

【底面・壁】 底面はほぼ平坦である。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がっている。南西側で底面から一部オーバーハングするように立ち上がる。

【堆積土】 21層に分層された。人為体積の様相を呈する。

【出土遺物】 覆土中から口縁部を含む縄文土器片が7点、底面からは石匙と磨製石斧が各一点ずつと比較的大型の縄が3点出土している。1～7は縄文土器片。地文斜縄文に断面が三角形状の細めの沈線が施される。8は横長の石匙である。器面は主に片面から調整されているが、刃部は器面のほぼ全周にわたって両面から施され、端部側縁の剥離はややノッチ状である。断面は凸レンズ状である。捕み部には若干のアスファルト状の付着物が認められた。9は磨製石斧であるが、刃部以外が欠損している。礫には使用痕や加工痕は認められなかった。

【小結】 出土遺物より縄文時代の所産と考えられる。

(齋藤)

第2号土坑（SK-02）（図23）

【位置・確認】 I C・41グリッドに位置する。

【重複】認められない。

【平面形・規模】 平面形は円形を呈する。開口部で長径82cm、短径70cm、底面で長径28cm、短径24cm、確認面からの深さは34cmを計測する。

【底面・壁】 底面はほぼ平坦である。壁は底面からやや傾斜を持ちながら立ち上がる。

【堆積土】 3層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【小結】 時期決定の根拠に欠けており不明である。

(笹森)

第3号土坑（SK-03）（図23）

【位置・確認】 I C・43グリッドに位置する。

【重複】 風倒木痕と重複している。本遺構が新しい。

【平面形・規模】 平面形は梢円形を呈する。開口部で長軸205cm、短軸136cm、底面で長軸112cm、短軸94cm。確認面からの深さは72cmを計測する。

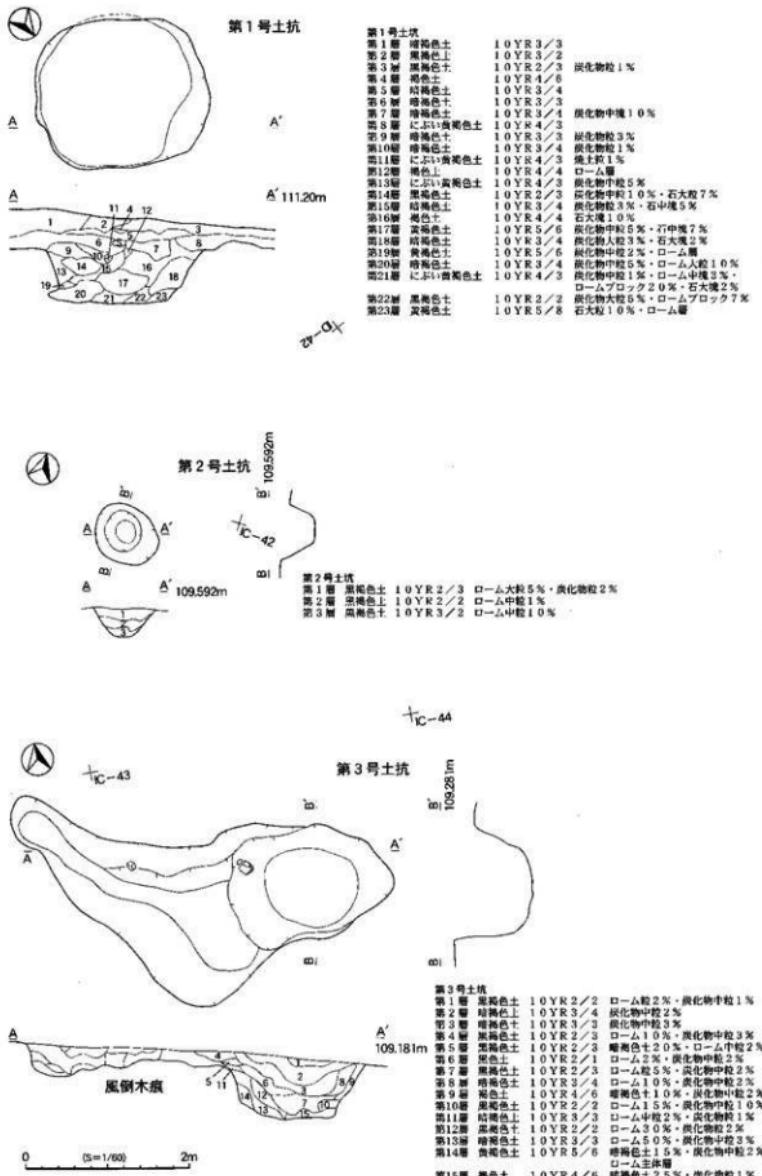


図23 第1～3号土坑

【底面・壁】底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中場を形成して緩やかに開口部に向かう。

【堆積土】15層に分層された。人為堆積の様相を呈する。

【出土遺物】覆土中より礫が4点出土している。

【小結】縄文時代の所産と思われる。

(笛森)

第4号土坑（SK-04）（図24）

【位置・確認】Y・Z-61・62グリッドに位置する。平成11年度調査の第4トレーンチ内で腐葉土がかなり厚めに堆積している落ち込みとして確認した。

【重複】認められない。

【平面形・規模】平面形は円形を呈する。開口部で長軸370cm、短軸330cm。底面で長軸280cm、短軸250cm。確認面からの深さは44cmを計測する。

【底面・壁】底面はほぼ平坦である。壁は底面から緩やかに立ち上がっている。

【堆積土】腐葉土と焼土の混土層であった。図面は作成していない。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】後述する炭窯の東側に近接して検出されている。炭窯に関連した施設とも考えられる。

(齋藤)

第5号土坑（SK-05）（図24）

【位置・確認】IG-53グリッドに位置する。

【重複】認められない。

【平面形・規模】平面形は円形を呈する。開口部で長径50cm、短径45cm。底面で長径40cm、短径36cm。確認面からの深さは16cmを計測する。

【底面・壁】底面はほぼ平坦で、南壁際に小さなピットを有する。壁は底面からほぼ垂直に立ち上げている。

【堆積土】2層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】時期決定の根拠に欠けており不明であるが、後述する掘立柱建物跡に関連する可能性もある。

(笛森)

第6号土坑（SK-06）（図24）

【位置・確認】IG-52グリッドに位置する。

【重複】認められない。

【平面形・規模】平面形は円形を呈する。開口部で長径72cm、短径64cm。底面で長径52cm、短径50cm、確認面からの深さは28cmを計測する。

【底面・壁】底面はほぼ平坦である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。

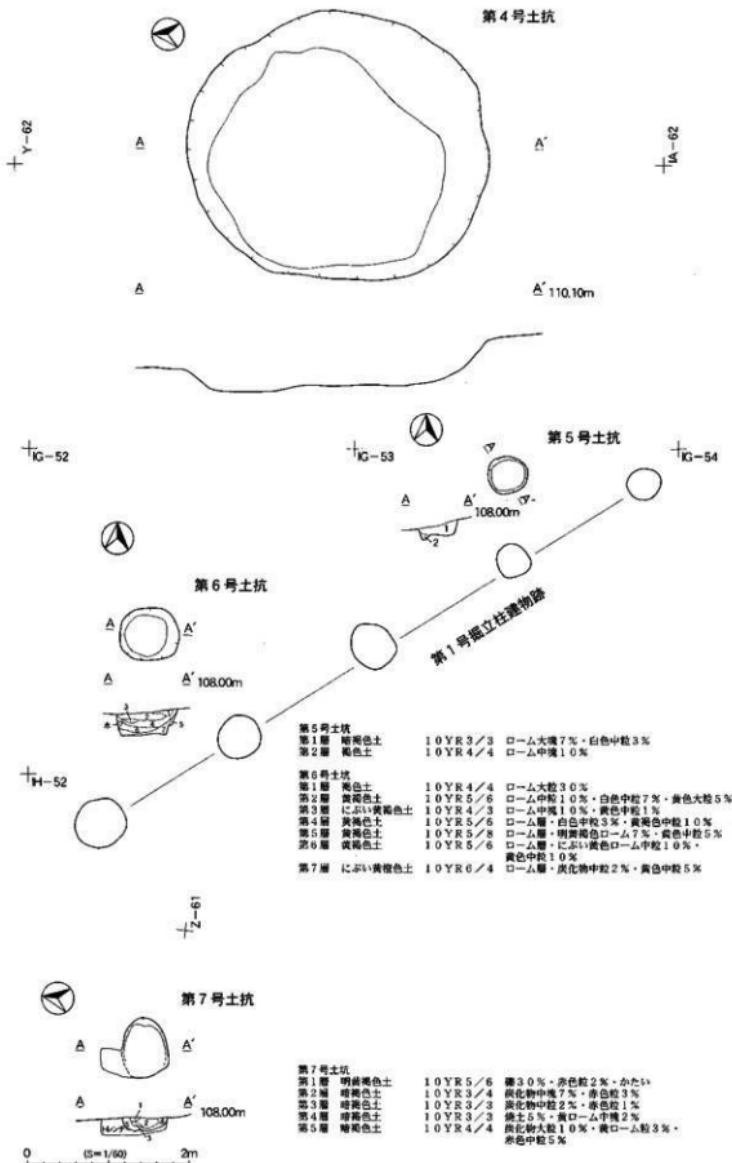


図24 第4～7号土坑

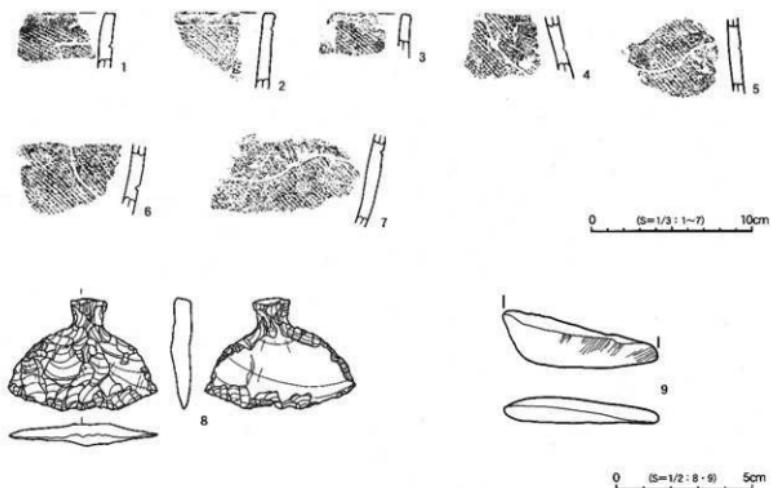


図25 第1号土坑出土遺物

[堆積土] 7層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており不明であるが、後述する掘立柱建物跡に関連する可能性もある。

(笹森)

第7号土坑 (SK-07) (図24)

[位置・確認] Y-60グリッドに位置する。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。開口部で長軸74cm、短軸54cm。底面で長軸62cm、短軸48cm。確認面からの深さは24cmを計測する。

[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。壁は底面から緩やかに立ち上がっている。

[堆積土] 5層に分層された。1・2層中には焼土ブロックの堆積が顕著に認められた。人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[小結] 後述する炭窯の焼き口の南側から検出されている。炭窯に付随する施設の可能性も考えられる。

(笹森)

4 沢跡

沢跡（S W）（図26・27）

【位置・確認】沢跡は調査区の広範囲で南側から北側、或いは南東側から北西側へ向い傾斜しながら検出されている。現地形からは明確にはわからなかった。現地形でも判断できた急峻な沢部はトレチでの確認調査のみを行ったため周辺のコンタ図は作成していない。

【重複】他の遺構との重複は認められないが、後述する井戸跡や溝跡は沢筋から検出されている。

【平面形・規模】開口部で幅120～180cm、底部で幅60～100cm、確認面からの深さは30～60cmを計測する。沢の合流部ではかなり広めの窪地を形成している。

【底面・壁】底面はほぼ平坦で中心に向かいやや傾斜している。緩斜面部の底面ではほぼ全域に礫が顔を覗かせている。壁は底面から緩やかに立ち上がっており、短軸断面形状は逆台形状や皿状を呈している。

【堆積土】覆土上層には白頭山火山灰（B-Tm）が堆積している部分も見られる。10世紀代前半にはかなり埋没が進んでいたものと推測される。下部堆積土には一部に砂粒や浮石の混入が認められる。水が流れていった痕跡がうかがえる。

【出土遺物】遺物はI C - 48・49グリッドの沢跡底面礫上から土師器甕が出土している。1は土師器甕の口縁～胴部片。口縁部は頸部から外反して開く。口縁部外面にはやや幅広の浅い横走弦線が施される。胴部外面には刷毛目調整が施される。2は胴～底部片。外面に刷毛目調整が施される。両個体ともに器壁の摩耗が著しい。器形や特徴から奈良時代の所産と考えられる。

【小結】覆土の堆積状況から、奈良時代には水が流れていった沢跡と考えられる。遺物が出土した地点は沢と沢とが形成する窪地への合流部付近にあたることから、当時は水場として利用されていた可能性も考えられる。今回の調査区からは他に明確に奈良時代と分かる遺構や遺物が検出されていないことから、沢跡から出土した土師器甕に関しては不明な点が多い。沢を利用していた人々のどのような行動に起因するものかは明確には分からない。

(笹森)

5 挖立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（S B - 01）（図28）

【位置・確認】調査区南東端、I G - 52・53グリッドに位置する。ほぼ一直線上に並ぶ円形の落ち込みを5基確認した。

【重複】認められない。

【平面形・規模】東側が調査区域外の林道部分に存在すると思われ、全容は不明である。柱穴と思われるピットは5基、4間分が検出されている。ピット1は開口部で長径45cm、短径37cm、底面で長径32cm、短径27cm、深さは8cm。ピット2は開口部で長径42cm、短径39cm、底面で長径36cm、短径32cm、深さは10cm。ピット3は開口部で長径60cm、短径52cm、底面で長径46cm、短径40cm、深さは22cm。ピット4は開口部で長径54cm、短径50cm、底面で長径44cm、短径40cm、深さは12cm。ピット5は開口部で長径64cm、短径60cm、底面で長径36cm、短径30cm。

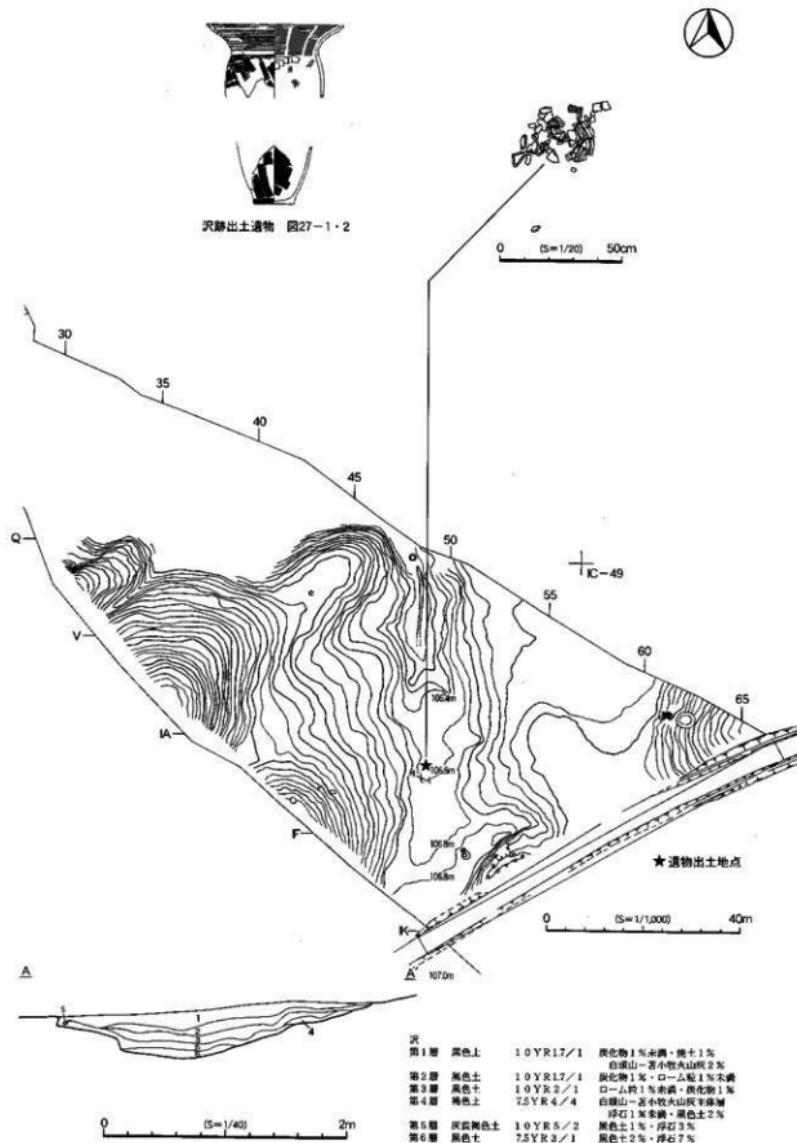


図26 汚跡

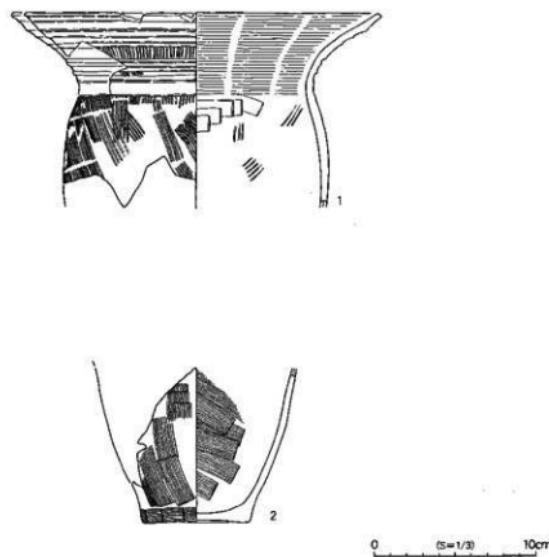


図27 沢跡出土遺物

深さは42cmを計る。柱穴間の距離はピット1・2間が185cm、ピット2・3間が200cm、ピット3・4間が200cm、ピット4・5間が200cmを計る。

【底面・壁】底面はほぼ平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

【堆積土】2～5層に分層された。ほとんど自然堆積の様相を呈する。明確な柱痕は認められなかった。

【出土遺物】出土していない。

【小結】西側部分のみのピット列の検出であるが、掘立柱建物跡の一部と考えられる。全体規模は不明である。また、遺物の出土もなかったことから構築・廃絶時期については不明である。

(笠森)

6 井戸跡

第1号井戸跡（S E - 01）（図29・30）

【位置・確認】調査区東端、I F・G - 50・51グリッドに位置する。

【重複】認められない。沢筋に作られている。

【平面形・規模】平面形は円形を呈している。開口部で長径104cm、短径94cm。底面で長径64cm、短径60cm。確認面からの深さは112cmを計測する。周縁には大きめの礫が一部に巡らされている。

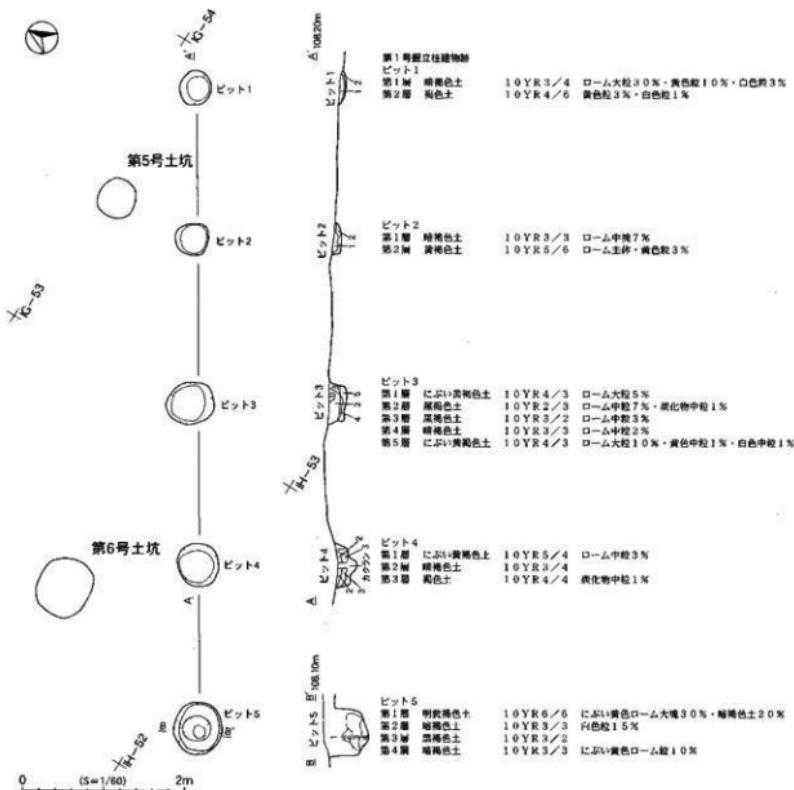


図28 第1号掘立柱建物跡

【底面・壁】底面はほぼ平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面開口部から深さ25cm程のところにテラス状の段を有する。

【堆積土】沢跡からの水の流入や湧水量が多く、土層観察用壁面が精査中に崩落したため全容は不明である。

【出土遺物】覆土中から磨り石が三点と大珠が一点出土している。1～3は磨石である。1は角が欠損した偏平な角礫で、磨り面は表裏のほぼ全面にある。裏面と側面に煤状のものが帶状に付着している。2は偏平な円形礫で、磨り面は表裏のほぼ全面にある。3は偏平な角礫であるが磨り面が短辺側の一面にあるものである。裏面の端部は窪んでいる。4は縄文時代の所産と思われる珪岩製の大珠で、表裏面に未穿孔痕が三箇所確認される。孔の規模は、一つは径3mm・深さ1mm程の小さいもので、他の二つは径約8mmで深さ約5mmの大きなものである。断面形状はともに三角形状である。なお、

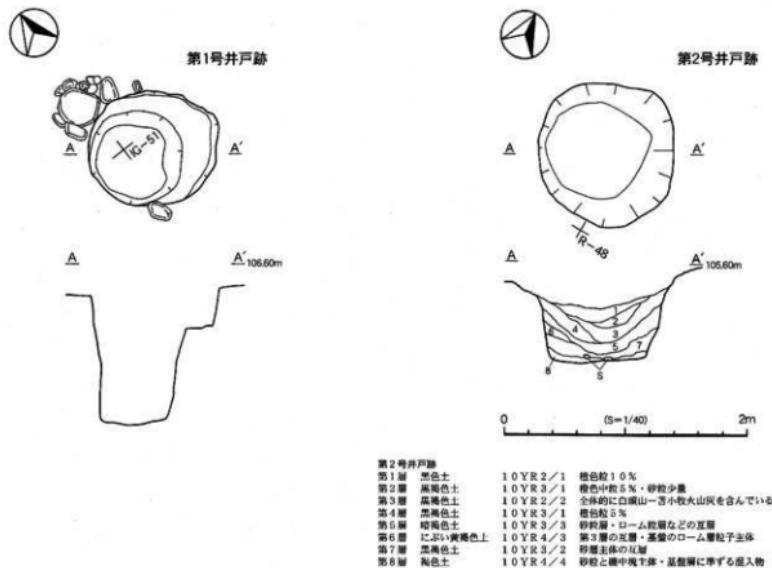


図29 第1・2号井戸跡

縄文土器片も覆土中から出土しているが、水の影響から表裏面の剥落が著しく、図示することはできなかった。また、メノウ片が覆土下層から、黒曜石片が覆土中と井戸周辺から各一点ずつ出土しているが、同様に図化しなかった。

【小結】聞き取り調査によって、調査区がリンゴ園だった頃に掘られ使用されていた井戸跡と判明した。

(笛森・平山)

第2号井戸跡 (S E - 02) (図29)

【位置・確認】調査区北端、Q-47・48グリッドに位置する。

【重複】認められないが、こちらも第1号井戸跡同様沢筋に作られている。

【平面形・規模】平面形は円形を呈している。開口部で長径120cm、短径110cm。底面で長径83cm、短径80cm。確認面からの深さは56cmを計測する。

【底面・壁】底面はほぼ平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。

【堆積土】8層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】礫が数点出土している。

【小結】第1号井戸跡同様、リンゴ作付け時の井戸跡と判明した。

(笛森)

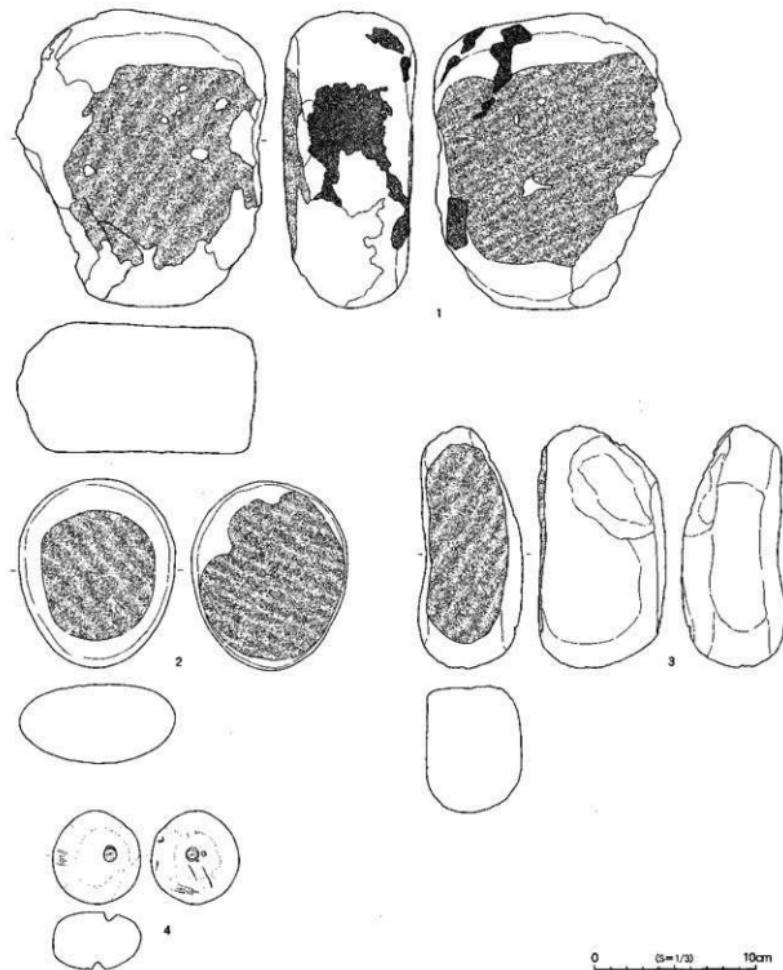


図30 第1号井戸跡出土遺物

7 炭窯

第1号炭窯（図31～33）

【位置・確認】調査区西隅の丘陵端部にあたるY-60・61グリッドに位置する。楕円状の礫の広がりとして確認した。いわゆる石窯である。

【重複】本遺構と重複する遺構はないが、第7号土坑が窯口の南西隅に、第4号土坑がクド（煙出し）の約1m東方に位置していることから、これらの土坑は炭窯の付属施設の可能性がある。

【平面形・規模】楕円形に礫を積んで構築されており、クド（煙出し）・ドウ（炭化室）・ヒバニワ（前庭部）に分けられる。窯は西向きに構築されており、焚き口中央から煙出し中央を結んだ主軸方位はN-99.5°-Eである。

【底面・壁】ここでは窯の主体部の炭化室をドウとして呼称して説明する。ドウの平面は卵形をしており、地山を掘り下げて構築されている。底面にも礫が敷かれており、ほぼ平坦である。底面と壁下端にある礫の表面は青く変色しており、かなり還元化が進んでいるものと思われる。窯口は主軸に対してやや斜めに造られており、底には小礫が敷かれている。

ドウは30cm×20cm・厚さ15cm程の礫を小口積み状に8段積み上げて構築されている。北壁は他よりも若干大きい礫で築かれている。ドウの内法は長軸136cm・短軸98cm、面積は約1m²と狭い。壁高は残存高で96cmあり、床面からやや逆台形状に外反しながら立ち上がる。礫は被熱しており、礫の周辺は焼土化している。

ドウの周辺にはローム混じりの土の広がりが確認された。これは窯の掘り方の埋め土と思われる。平面形は約3m四方の不整な方形で、底面は長軸で217cm・短軸120cmの不整な楕円形である。断面型は鍋底状で、最深部で94cmある。前述のように掘り方の堆積土中にはロームが混入していることから、掘り上げ土で再び埋め戻しているものと思われる。掘り方の底面も中央部は還元、周辺は酸化した状況が確認された。この掘り方の中に礫を積み上げてドウを構築している。

【その他の施設】クドは一部壁の礫が欠損しているものの、径23cmほどの円形である。径15cm・厚さ9cm程度の小振りの礫で構築されているため、ドウより段数が多い。ドウ壁間に開けられた煙出しは、高さ約35cm・幅約40cmの長方形につくられている。

ヒバニワ（前庭部）は窯口の前方部分で、窯口から八の字状に延びた石積みに囲まれた空間である。検出時にはこの付近まで礫が散布していたが、礫は表層にあったため、これらは窯の廃絶時に廃棄されたものと思われる。ヒバニワ周辺で硬化面は検出されなかったが、地形の落ち込みが認められるのはこのあたりのみであることから、ヒバニワは地山を削りだして構築された可能性が高い。

前述のように第4号・第7号土坑は炭窯の近くに位置していることから、炭窯の付属施設の可能性があるが、詳細は不明である。

【堆積土】堆積土中位に焼土層が、その直下には礫層が確認されていることから、ハチ（天井）もドウ同様に積み上げた礫に土を被せて構築されたものと思われるが、堆積土中から軍手や番線が出土したため土層断面図の作成を断念した。そのため、詳細は不明である。

【出土遺物】軍手や番線のほか底面から黒炭片が出土しているが、他の遺物は出土しなかった。

【小結】堆積中の出土物や聞き取り調査から、現代の白炭窯と考えられる。

(平山)

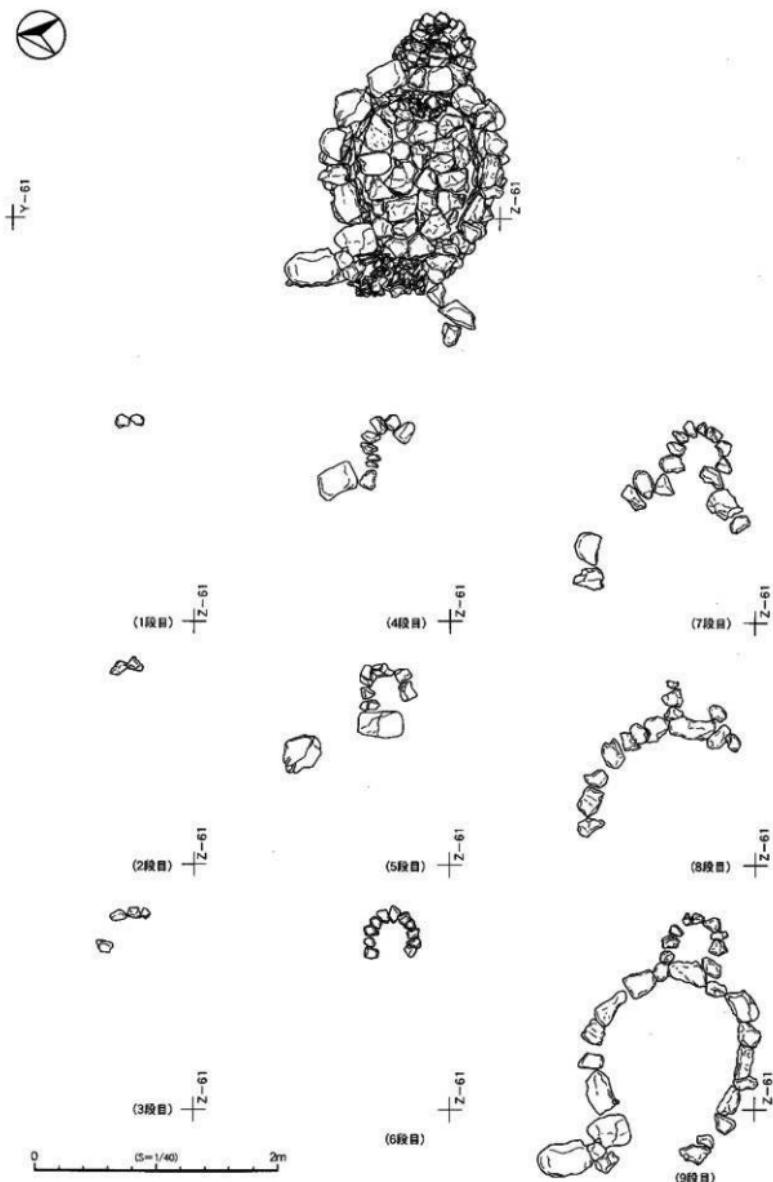


図31 第1号炭窯1

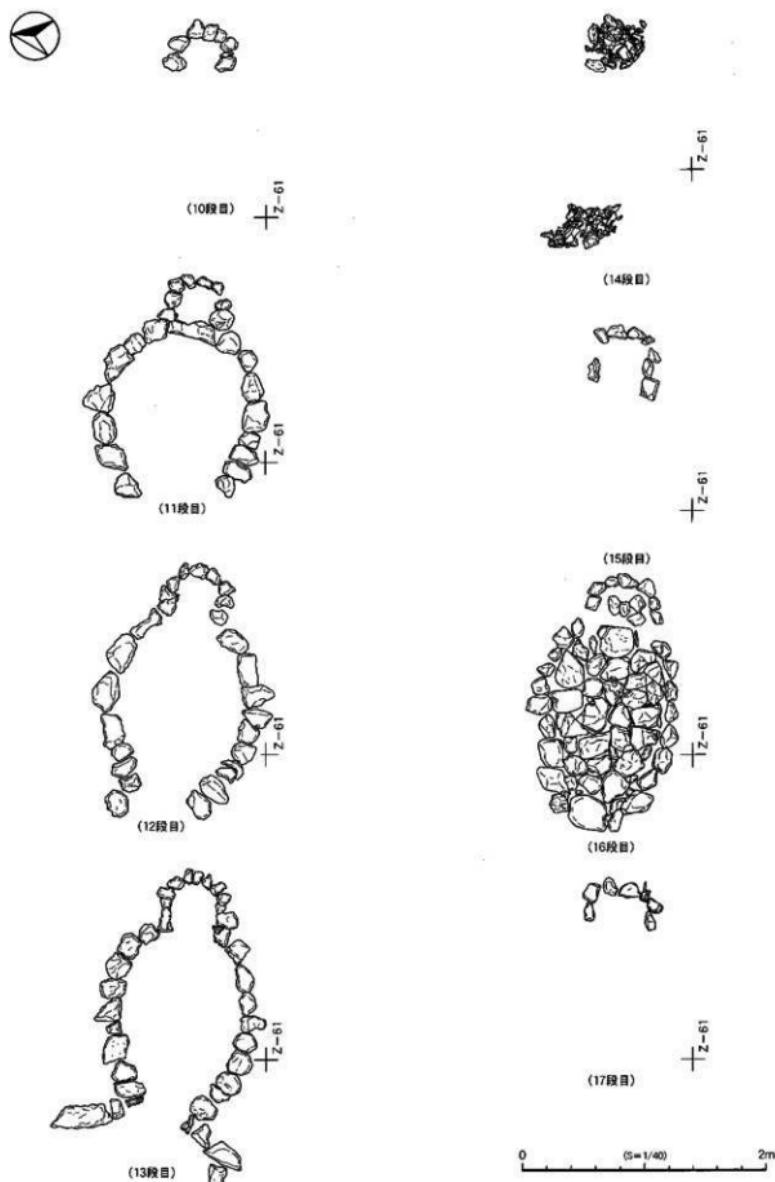
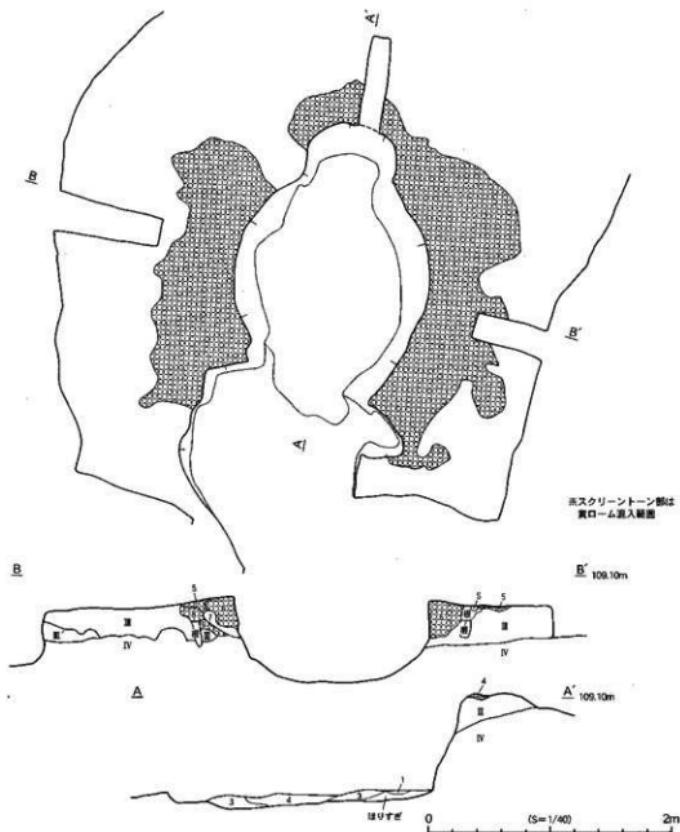


図32 第1号炭窯2



+ 62

+ Y-61



第1号炭窯	
第1層	暗褐色土 7.5YR 3/4
	炭化物中粒2%・赤色粒1%・粘性中中あり。
第2層	褐色土 7.5YR 4/5
	炭化物粒2%。
第3層	明褐色粘土 1.0 YR 6/6
	炭化物中粒2%・油土1.0%。
第4層	黄褐色土 1.0 YR 5/6
	炭化物小粒1%・暗褐色土3%・白色の入粒2%。
第5層	褐色土 1.0 YR 4/6
	黄ローム・大粒1.0%・炭化物中粒2%。
第6層	暗褐色土 1.0 YR 3/4
	黄ローム・中粒5%・炭化物中粒2%。
第7層	暗褐色土 1.0 YR 2/3
	黄ローム・大粒1.0%・炭化物中粒2%。
第8層	暗褐色土 1.0 YR 3/4
	黄ローム・大粒1.0%。
第9層	褐色土 1.0 YR 4/4
	炭化物中粒2%・暗褐色土3%。
第10層	暗褐色土 1.0 YR 3/4
	黄ローム・中粒1%。

図33 第1号炭窯3

8 溝跡

第1号溝跡（SD-01）（図34）

[位置・確認] 調査区北端、Q～T-48ラインに位置する。

[重複] 認められない。第2号井戸跡に端部が近接する。

[平面形・規模] 全長26.4m。短軸断面は逆台形状を呈する。規模は開口部で最大幅82cm、底面で最大幅74cm、確認面からの深さは最大14cmを計測する。

[底面・壁] 底面はほぼ平坦で、壁は底面から急に立ち上がる。

[堆積土] 1～3層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 出土していない。

[小結] 井戸跡に伴う溝跡の可能性も考えられる。

(笹森)

9 ピット群（図35・36・37）

[位置・確認] 調査区南東部、I B～ID-45～52ラインの斜面部から検出されている。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] ピットの規模は開口部直径16～42cm、底部直径12～26cm。深さは7～42cmを計測する。

[底面・壁] 底面はほぼ平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土] 1～2層に分層された。自然堆積の様相を呈する。柱痕が認められるようなものはなかった。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[小結] かなりまとまりを持ったピットも認められるが、掘立柱建物跡として組めるようなものは認められなかった。構築・廃絶時期も含めて不明な点が多い。

(笹森)

10 土壘状地形（図38）

当初、館跡の土壘と考えていた土手状の地形である。樹木伐採の運搬路がこれを切断していたため、その断面の観察・図版作成を行った。

[位置] 調査区北側位置し、東西方向に延びているが、大半は調査区外に続いている。また、植林による地形の改変によって全容は不明である。断面観察はM・N-43グリッドとN・O-44・45グリッド及び調査区外に位置する二箇所で行った。

[堆積土] 薄い表土の直下に基本層序の第Ⅲ～Ⅳ層が存在する。第Ⅱ層は欠如している。版築あるいは盛土といった人為的に土を盛り上げた痕跡は認められなかった。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[小結] 土壘断面観察の結果から、この地形は自然地形と考えられる。基盤層を掘り残して造られた土壘である可能性もあるが、周辺に堀が存在しないことや城館の縛張りからも外れていることなどから、現状ではこの地形を土壘と積極的に支持しない。

(平山)

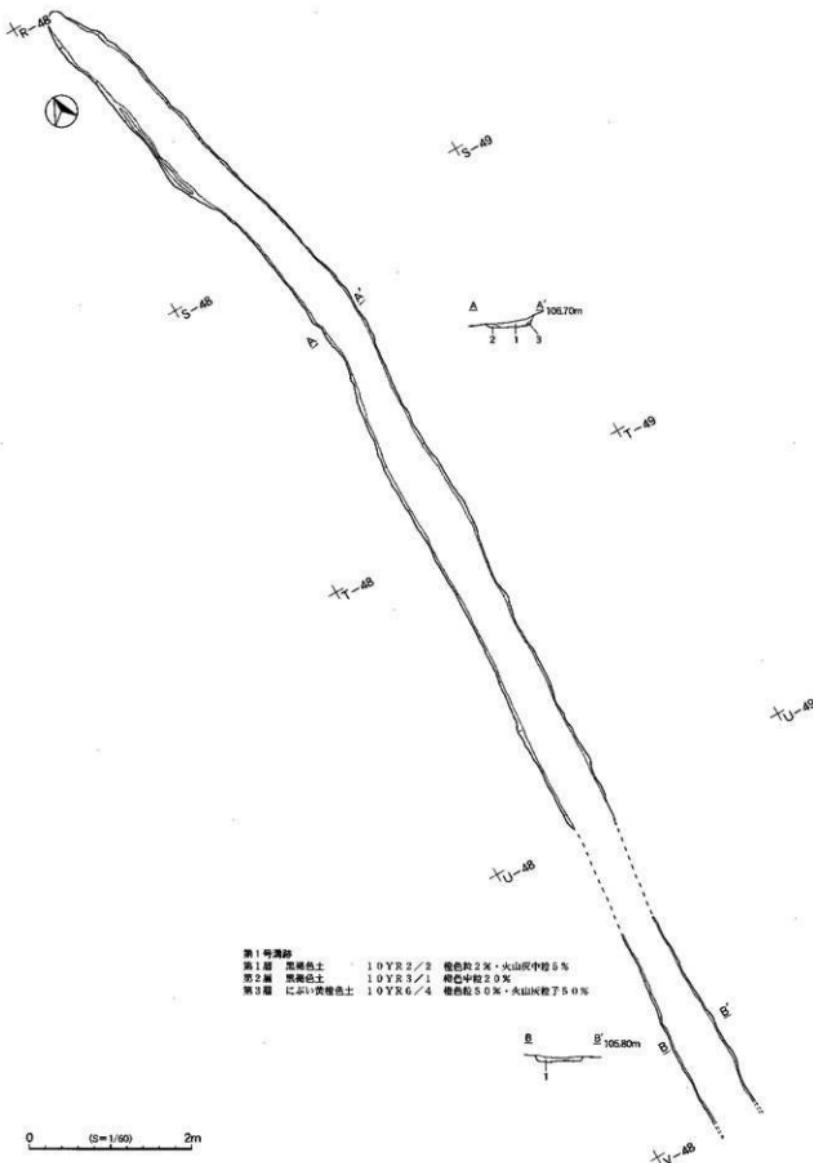


図34 第1号溝跡

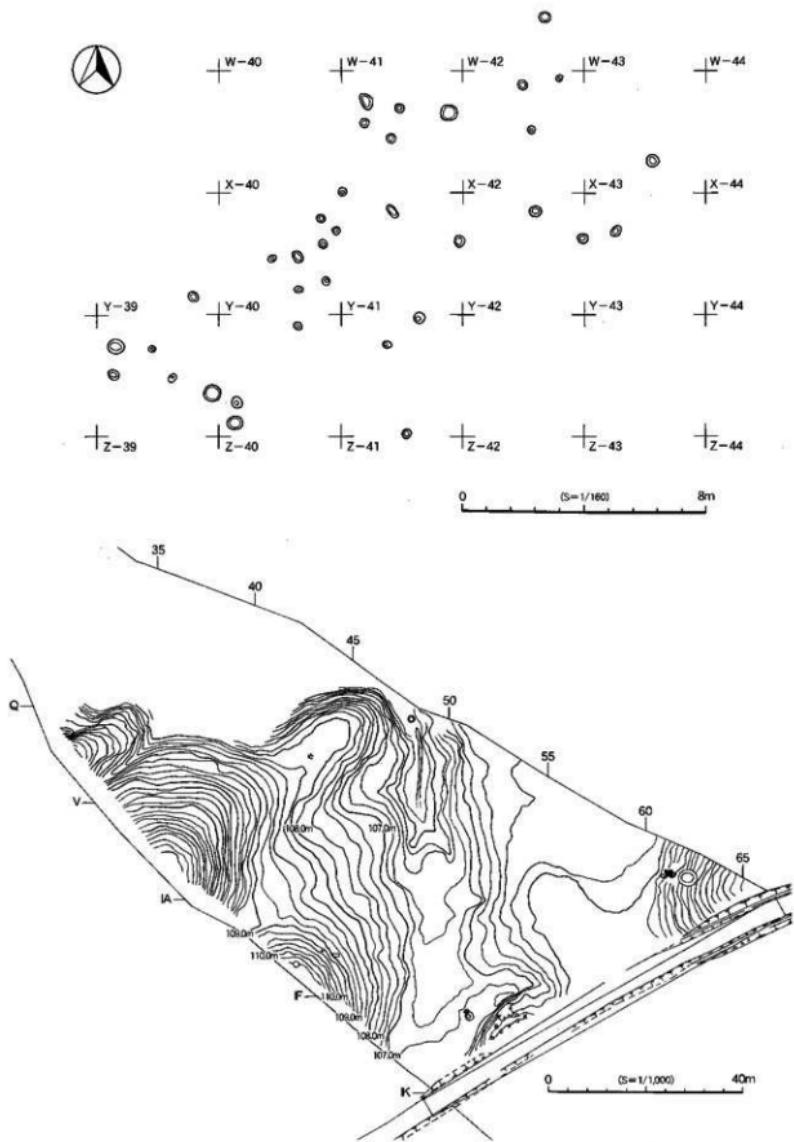


図35 ピット群1

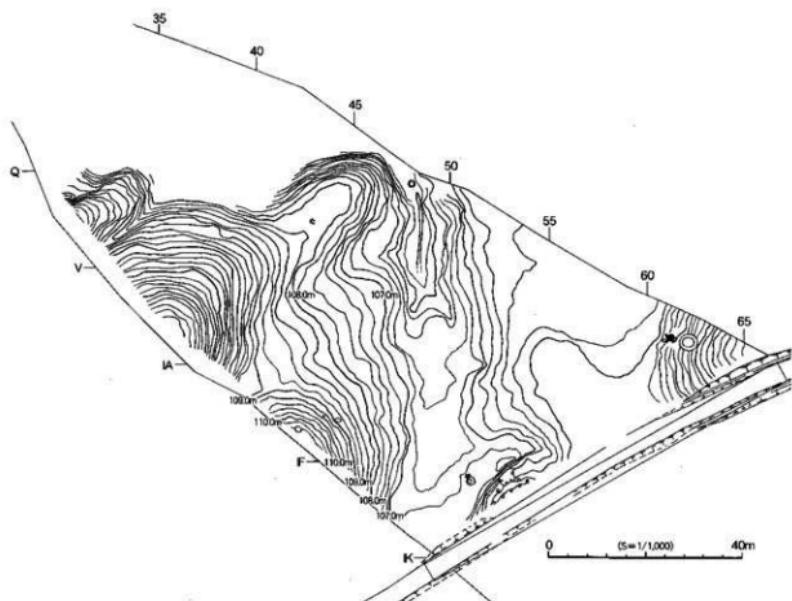
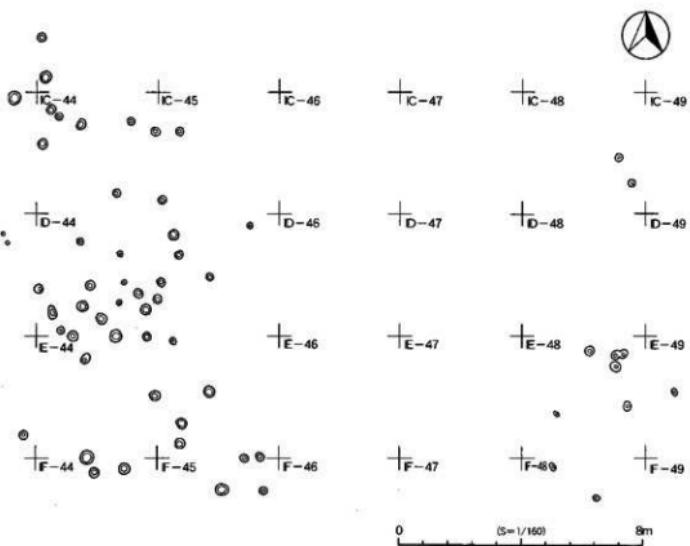


図36 ピット群2

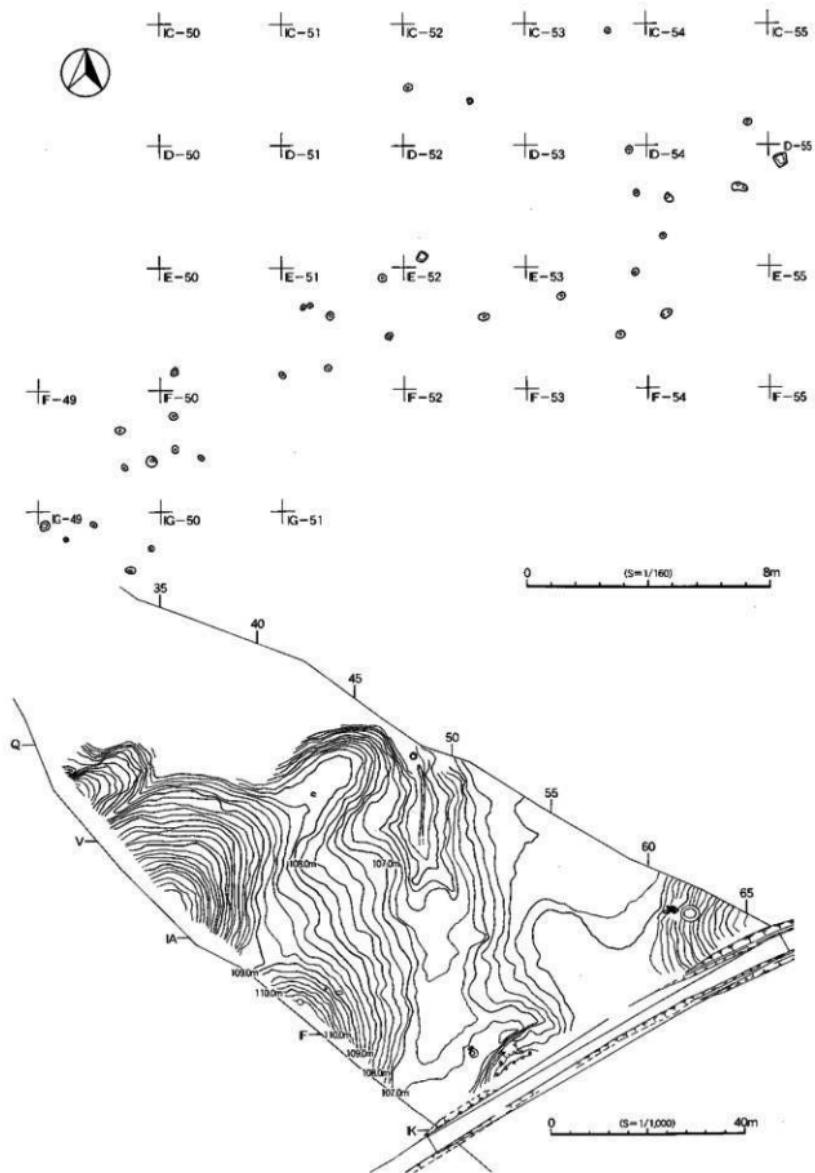


図37 ピット群3

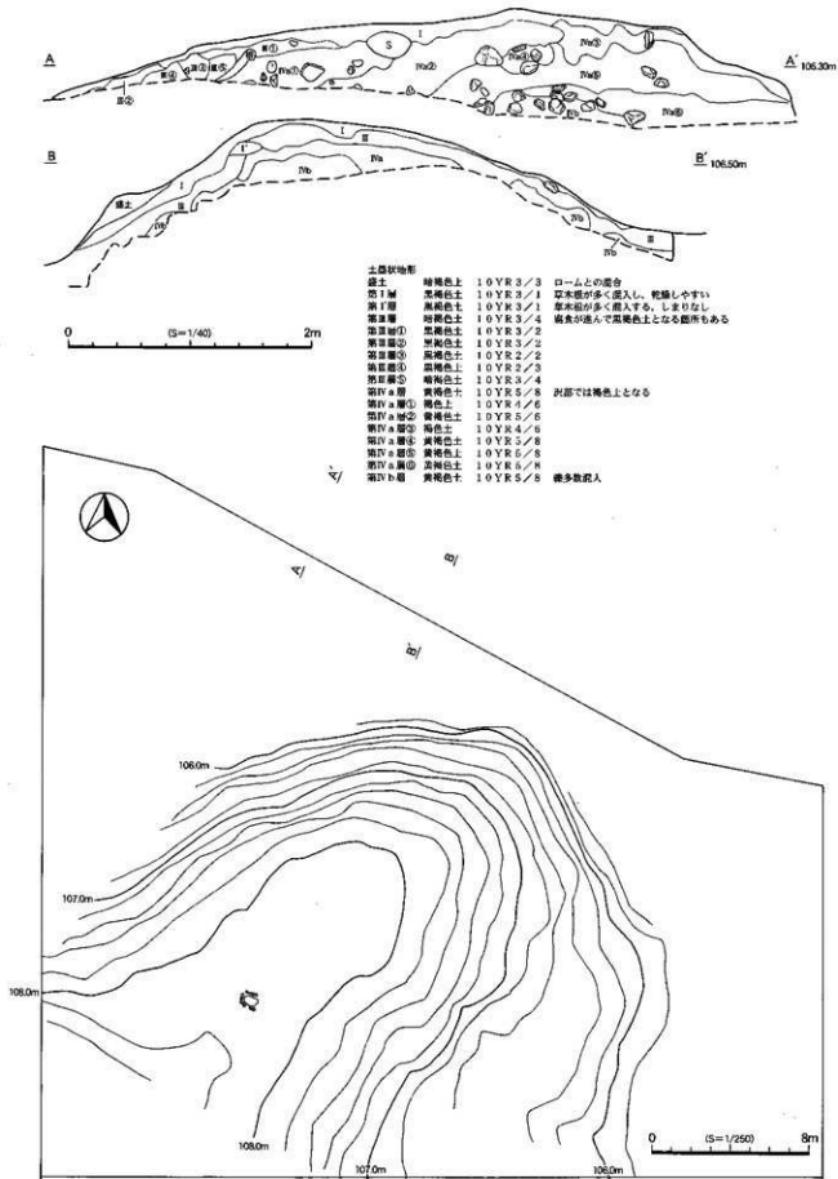


図38 土壌状地形

第2節 遺構外出土遺物

遺構外からは縄文時代の土器・石器、中世の金属製品が出土している。

1 縄文土器（図39～42）

調査区内から散漫に出土している。中期～晩期にかけての土器がほとんどで、大部分が捨て場の土器と重複するが、一部未検出資料も含まれる。破片資料がほとんどで、復元できる個体は少なかった。器壁も摩耗しているものが多く、かなり水の影響を受けていたものと思われる。

1～22は縄文時代中期の土器。1は口縁部で深めに縄の側面圧痕が施される。円筒上層a式に比定されるものと思われる。2も口縁部片。隆帯で飾られる。隆帯には縄の側面圧痕が施される。円筒上層b式に比定されるものと思われる。胎土は砂質でかなり粉っぽく脆い。3～7は胴部片。3・4・6・7は隆帯に側面圧痕が施される。同じく円筒上層b式に比定されるものと思われる。8～15は波状口縁を呈している。8～13は口縁下部に1条の沈線が施される。16～18は胴部片。地文が縦位回転のL R 斜縄文に沈線が施される。縄文時代中期後半の榎木林式に比定されるものと思われる。19は胴部片。地文L R 斜縄文に沈線及び竹管状の工具による刺突が施される。最花式か？。20～22は浅めのL R 斜縄文に曲線に沈線が施される。縄文時代中期末葉の大木10式に比定されるものと思われる。23～46は縄文時代後期～晩期の土器。23～26は地文無文に沈線が施されている。24は口唇部に斜位の刻み目が施される。27～29は同一個体と思われる。27は口縁部片。波状を呈している。沈線が施される。十腰内I式、或いはそれ以前の縄文時代後期初頭～前葉の土器と思われる。30～38は地文無文に沈線が施される。39は台付き浅鉢の口縁部。口縁は波状を呈し沈線により三叉文が施される。地文は縦位回転の比較的細かいL R 斜縄文が施され、磨り消し帯も有している。40は39と同一個体の台部。端部を欠失しているため不明瞭ではあるが下部残存部には横位の沈線が1条確認できる。大洞B式に比定されるものと思われる。41～46は口縁部片。41・42・43は三叉文、44・45は地文細縄文に玉抱三叉文が施される。46は小型鉢形土器の口縁部片。羊歯状文が施される。大洞B C式に比定される。47～67は地文に縄文が施される深鉢形土器。47～59は口縁部片。49は口唇部にも斜縄文が施される。58は補修孔を有する。68～74は深鉢形土器の口縁部片。地文はR Lしが縦位に施文される。口縁部には2条の平行沈線が施される。内面は「く」の字状に屈曲が見られる。口唇部断面は平らなものと丸いものが認められる。75～80は胴～底部片。地文はR Lしが縦位に施文される。81は小型鉢形土器の胴部片。内外面ともかなり摩耗している。上部の施文は不明。下部の地文はR Lの縦位か？。

(笹森)

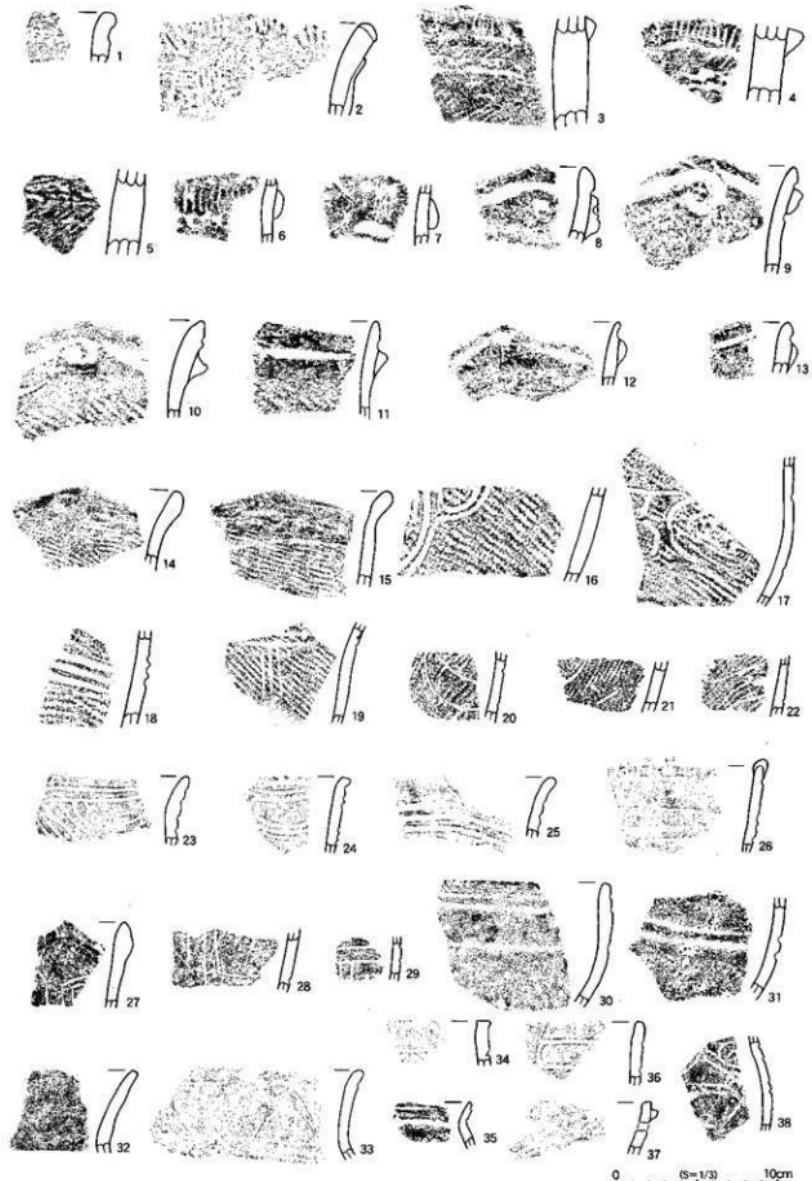


図39 遺構外出土遺物・土器1

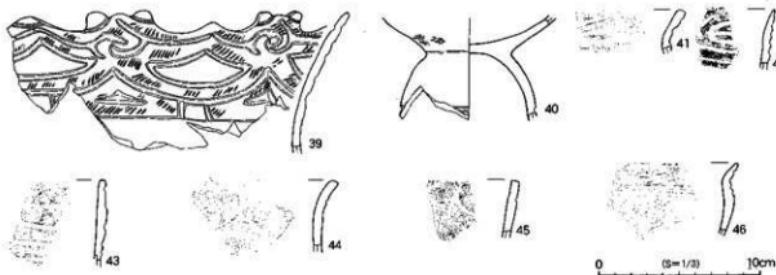


図40 遺構外出土遺物・土器2

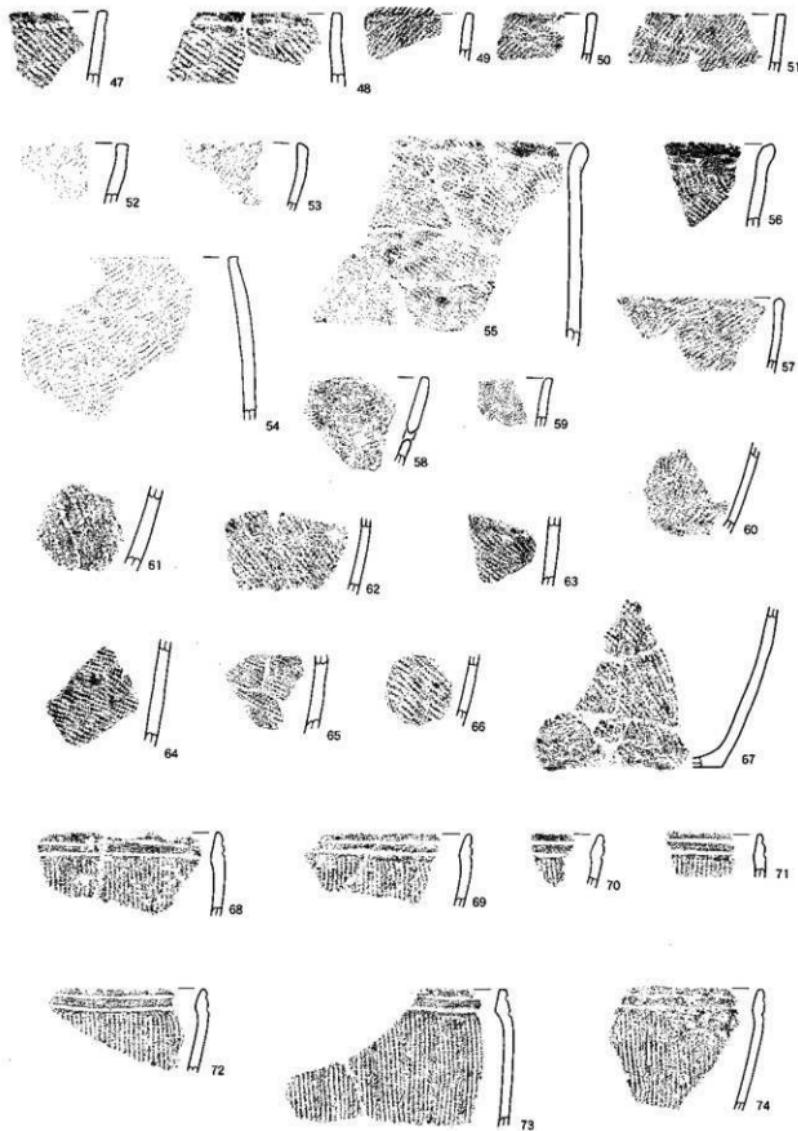


図41 遺構外出土遺物・土器3

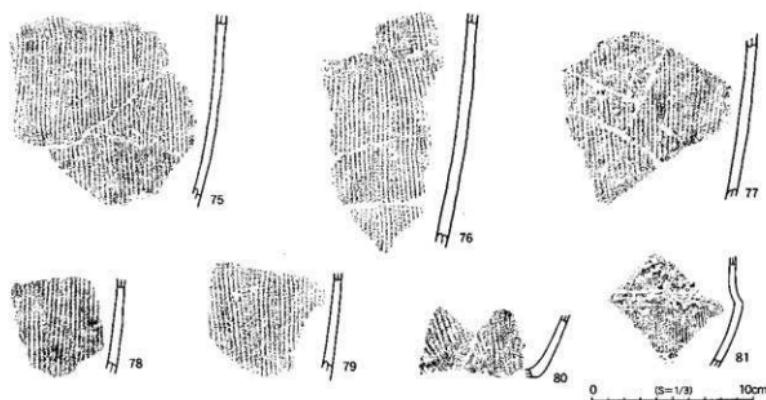


図42 遺構外出土遺物・土器4

2 石器（図43～46）

遺構外出土の石器は、剥片石器の総数六十四点、礫石器の総数四十点である。器種は石鎌・石匙・石籠・スクレイバー・磨石・敲石・凹石・石冠・石製品がある。

(剥片石器)

石鎌は二点出土した。二点とも有茎で1は凸基、2は平基である。ともに三角形状で断面はレンズ状である。

石匙は三点出土した。4・5は縦長のもので、刃部は両側縁とともに片面から調整され、つまみのくびれ部は両面から調整されている。また、断面は三角形状である。5は右側縁の打撃角度が左側縁より急である。また、下半が欠損している。3は横長のもので、刃部は器面のほぼ全周にわたり両面からつくられている。断面は凸レンズ状である。

石籠は三点出土した。7は撥形、6・8は四角形である。6は両面調整で形成されているが、刃部に表皮が一部残る。両側縁はほぼ直線的であるが、上端はやや内湾し、下端の刃部は外湾する。断面は厚い凸レンズ状である。7・8は片面調整である。端部は片面調整であるため打撃角が急であるに対し、両側縁は両面調整であるため端部より緩やかである。断面は凸レンズ状である。

スクレイバー類の出土総数は十三点で、図化したのは六点である。捨て場出土のものと同様に、刃部の形成される辺の数と刃部形状によって分類される。9・12は剥片の一側辺に刃部が形成されたもので、9は縦長剥片、12は横長剥片を素材とし、片面加工の刃部を作られたものである。9の刃部は内湾している。剥片の二側辺に刃部が形成されたものは10・11の二点図化した。ともに縦長剥片を素材とし、片面加工の刃部が10は両側片に、11は隣り合う辺につくられている。10は打点方向の端部に両面から調整が施されていることから、石匙の欠損品の可能性もある。13は細部調整が行われた剥片で、14辺の一部に使用痕のある剥片である。

石核は六点中三点を図化した。15はメノウである。表面の上下面から剥片を剥離している。剥離面にはステップフレイキングが激しい。器面には一部表皮が残る。16は頁岩で、器面を整えた後、上面から一点剥片を剥離している。左面の下端には細部調整が行われている。17は頁岩で、作業面を頻繁に変えながら幅1～2cmほどの剥片を剥離している。

図化しなかったが、剥片が総数二十点、黒曜石片がID-51から一点、IE・F-53グリッドから十六点の計十七点出土している。

(礫石器)

磨石は十点出土し、全て図化した。形状には円礫（18～20・24）と偏平礫（21～23・25・26）・三角柱状（27）のものがある。18・19・21・25は器面の表裏に磨り面がある。24は器面の窪みに磨り面があるので、断面はU字状である。当初は自然面にあった窪みを利用していたものが、使用によりここまで窪んだものと思われる。26は偏平礫の端部周辺に敲打によってつくりだした面に磨り面をつくりだしたものである。27は断面が三角柱状の礫の稜辺とその隣の平坦面に磨り面がつくれたものである。

敲石は四点出土し、全て図化した。偏平礫（28・31）や円柱状の礫（29・30）を素材としており、いづれも器面中央に敲き面がある。

凹石は四点出土し、全て図化した。これにも角礫（32・33・35）と偏平礫（34）とがあり、器面

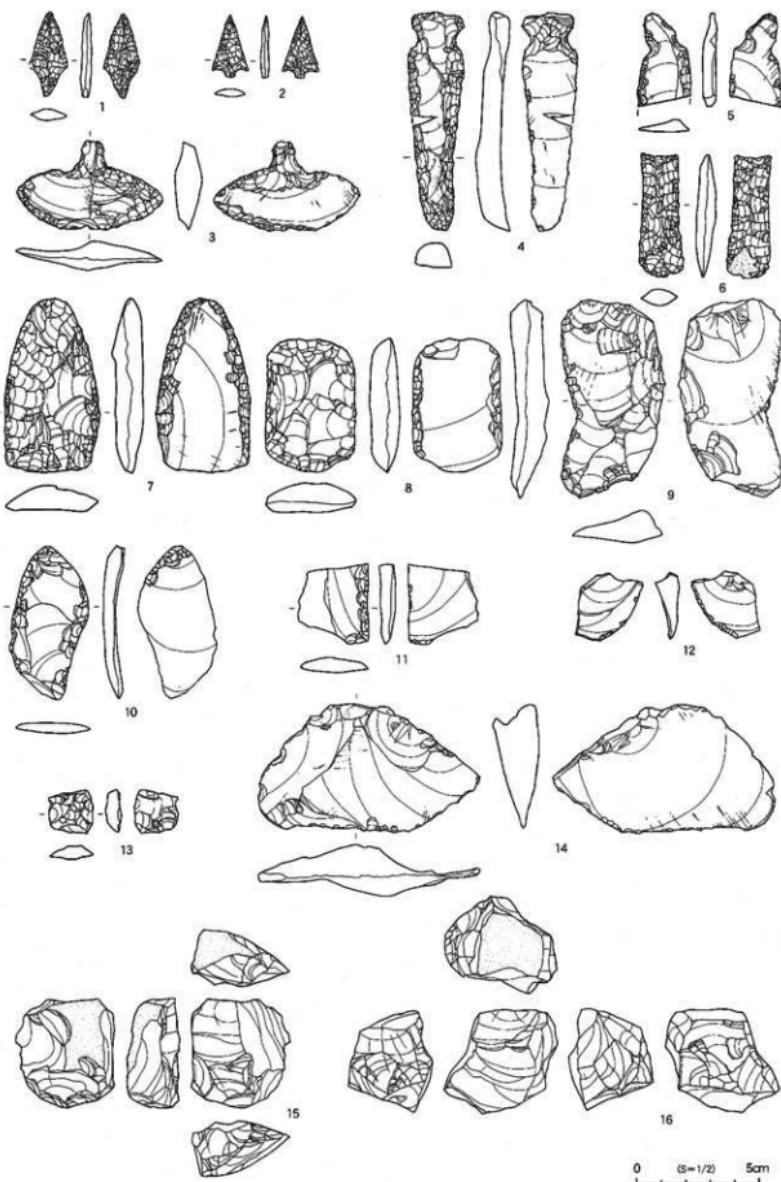


図43 遺構外出土遺物・石器1

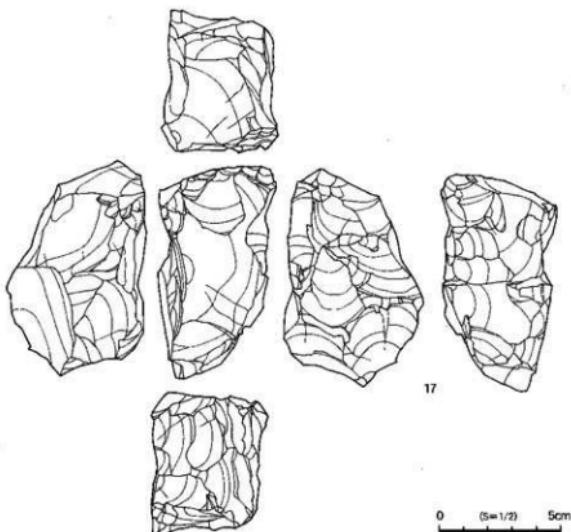


図44 遺構外出土遺物・石器2

中央に凹みが集中している。

石冠は一点出土した。36は東北地方で「北海道式石冠」と呼称されるものである。偏平礫の器面全体を磨って成形した後、タタキを帯状にめぐらしている。下面の磨り面は敲打によってつくりだしたものである。敲きは上面や両端部にあり、端部は一部打ち欠かれている。

不明石製品は一点出土した。37は偏平礫の器面に顕著な擦痕がみられ、端部を打ち欠かれたものである。

その他に、自然礫が総数二十点出土しているが、図化は割愛した。

(平山)

3 金属製品（写真図版20-82）

景德元寶が一点、遺構外の表土中から出土している。北宋銭で、初鑄年は1004年である。錢文の書体は真書である。錢径（外縁外形）は24.6mm、内径（外形内径）は20.4mm、覆輪の厚さ1.5mm、量目は2.1gであるが、表面が非常に脆く拓本がとれなかつたため、写真で図示するに止める。

(平山)

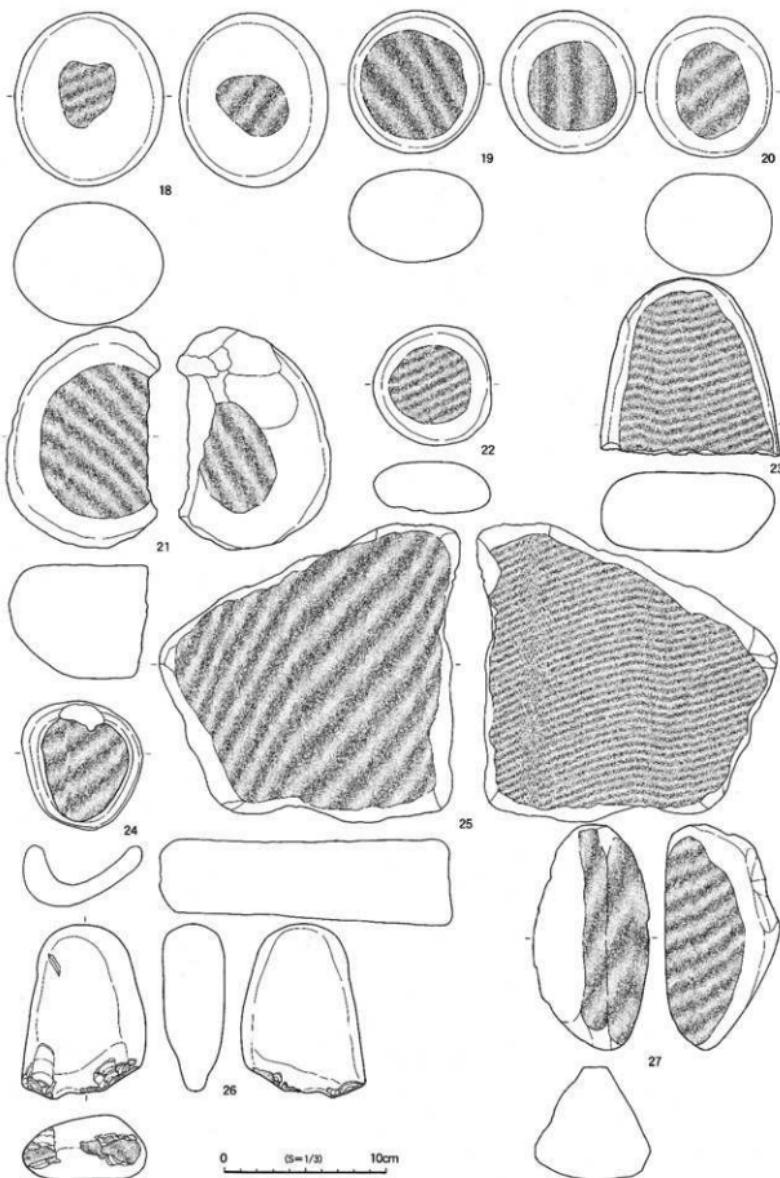


図45 遺構外出土遺物・石器3

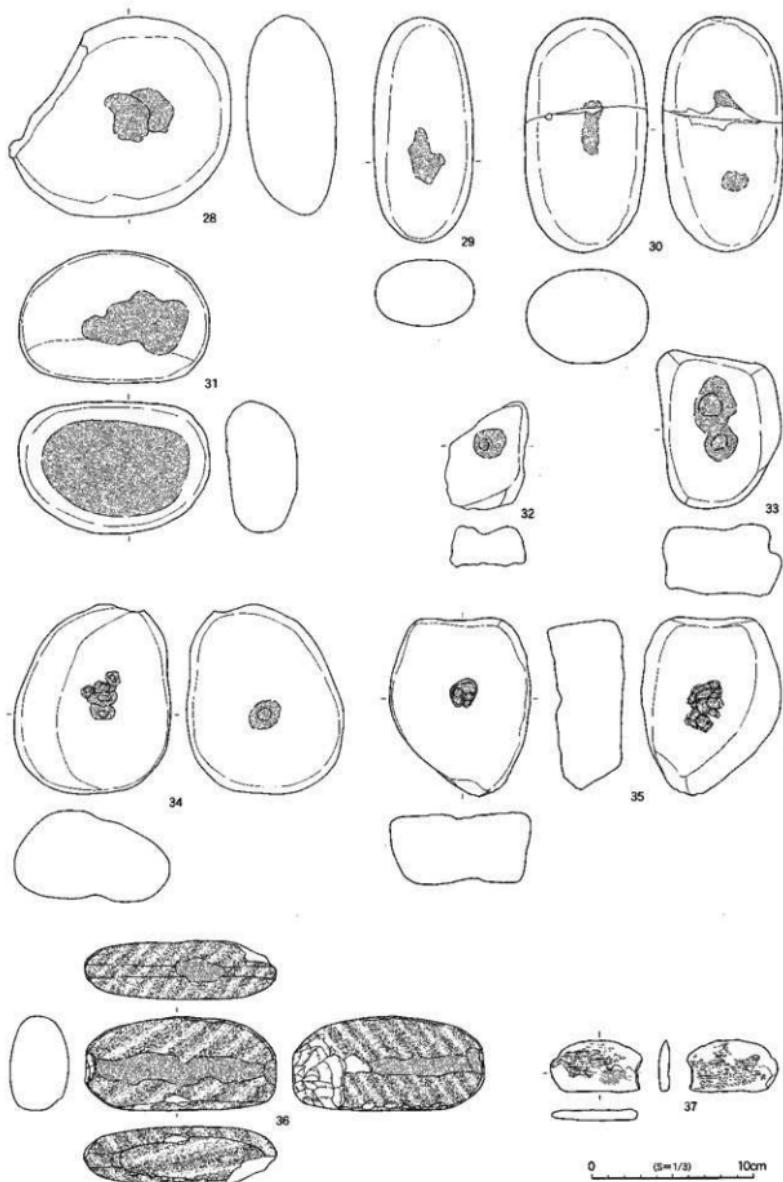
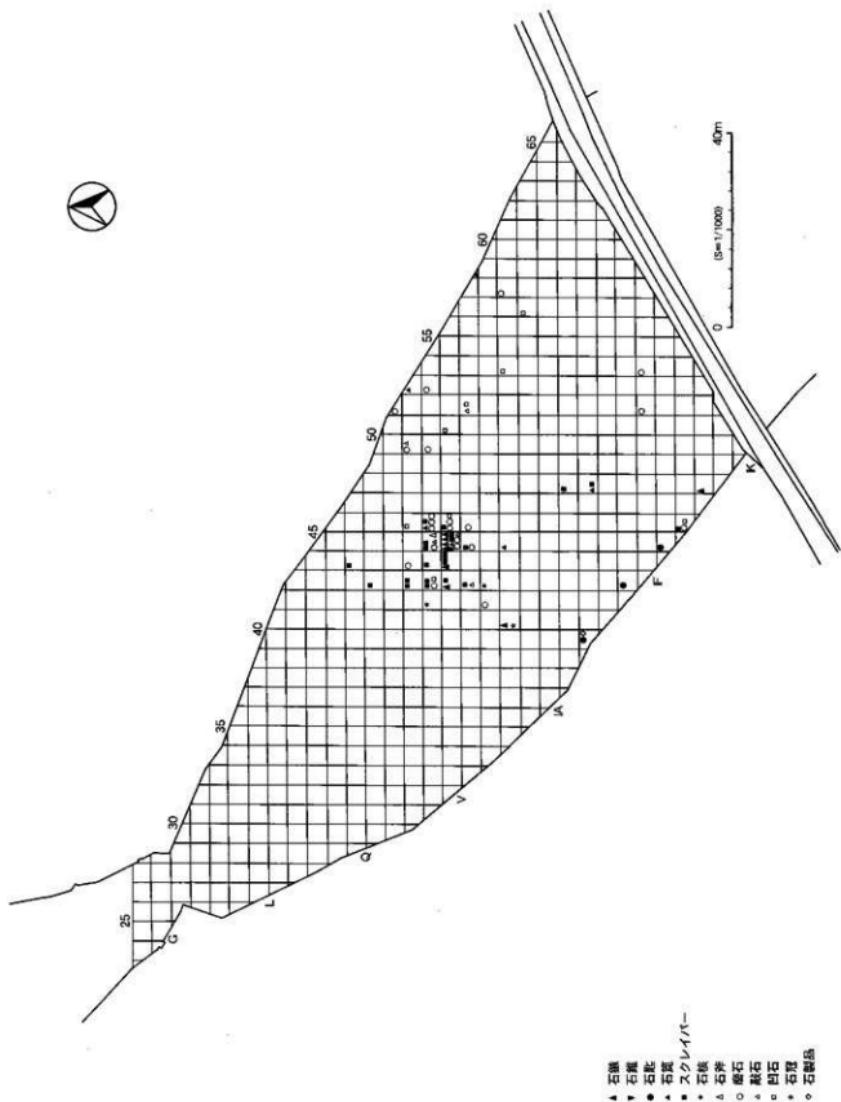


図46 遺構外出土遺物・石器4



図47 捨て場遺物接合図



第5章 自然科学的分析

西浜折曾の関遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定 株式会社 地球科学研究所

捨て場 S - 4 2 グリッド表土下30cm程の遺物包含層内から検出した炭化種子

報告内容の説明

14C age (yr BP) : 14C 年代 "measured radiocarbon age"
試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
半減期はリビーの5568年を用いた。

補正 14C age (yr BP) : 補正 14C 年代 "conventional radiocarbon age"
試料の炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の ^{13}C 比を-25(‰)に標準化することによって得られる年代値である。
層年代を得る際にはこの年代値をもつて。

$\delta^{13}\text{C}$ (permil) : 試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)
で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{試料}} - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{標準}}}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{標準}}} \times 1000$$

ここで、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ [標準] = 0.012372である。

層年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、層年代を得出す。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の測定、サンゴのU-Th年代と
14C年代の比較により、補正曲線を作成し、層年代を算出する。最新のデータベース(
"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al., 1998, Radiocarbon 40 (3))
により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel. Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993. A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results.

測定方法などに関するデータ**測定方法 AMS** : 加速器質量分析**Radiometric** : 液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法**処理・調製・その他** : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄

acid washes : 酸洗浄

acid etch : 酸によるエッチング

none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction : 木材のセルローズ抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A. 33155

C14年代測定結果

青森県埋蔵文化財調査センター 様 20000680

試料データ

C14年代(y BP)
(Measured C14 age) $\delta^{13}\text{C}(\text{permil})$ 補正 C14年代(y BP)
(Conventional C14 age)

Beta- 162512

2830 ± 40

-25.8

2820 ± 40

試料名 (19183) NISHIHAMA

測定方法、期間 AMS-Standard

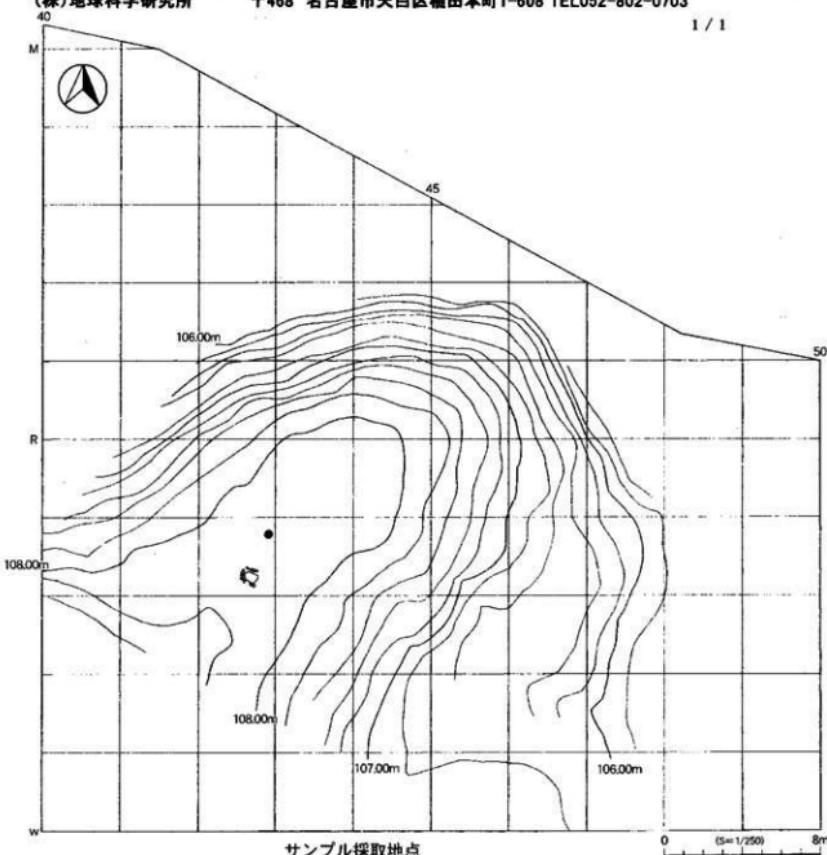
試料種、前処理など charred material

acid/alkali/acid

年代値はRCVBYPC1950 A.D.を0年とするで表記。モダンリファレンススタンダードは国際的慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

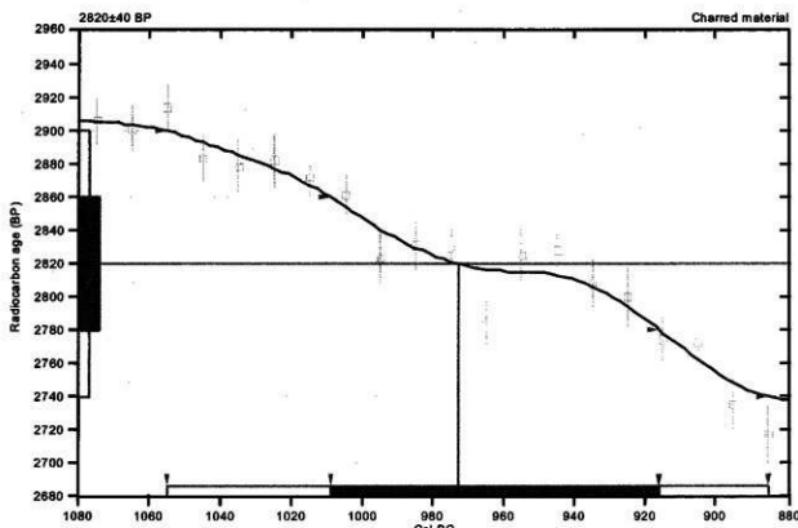
(株) 地球科学研究所 〒468 名古屋市天白区植田本町1-608 TEL052-802-0703

1 / 1



CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.8; lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-162512**Conventional radiocarbon age:** 2820 ± 40 BP**2 Sigma calibrated result:** Cal BC 1060 to 880 (Cal BP 3000 to 2840)
(95% probability)**Intercept data****Intercept of radiocarbon age
with calibration curve:** Cal BC 970 (Cal BP 2920)**1 Sigma calibrated result:** Cal BC 1010 to 920 (Cal BP 2960 to 2870)
(68% probability)**References:****Database used****Calibration Database****Editorial Comment**

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics**A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates**

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第6章 まとめ

第1節 捨て場について

調査区から検出された縄文時代の捨て場は、平坦部から検出された石組の屋外炉を中心に、南西から北東方向に伸びる舌状の丘陵部に形成されていた。出土遺物は土器・石器・礫等をあわせると1000点を超えたが、土器は破片がほとんどで復元個体も少なかった。遺物の分布は丘陵斜面部の北西方向と南東方向に2分されるが、1対4程の割合で南東方向側が多い。接合復元個体も南東斜面部からの出土がほとんどであった。出土した土器は縄文時代中期～晚期にかけてのもので、中期の土器はR・45グリッド、後期の土器はT・U・V・44・45グリッド、注口土器を含む晚期の土器はS・T・U・44・45グリッドを中心に出土している傾向が見られた。また、土器の大部分を占める後・晚期の粗製土器は捨て場全体から出土している。出土した石器の中では石鎚がU・44グリッドからまとまりをもって出土している。石鎚は欠損品がほとんどで廃棄行為に伴うものと考えられるが、時期差があったかどうかについては不明であった。蔽摩器類も南東部のT・U・45グリッド周辺から比較的多く出土している傾向が見受けられた。

石組の屋外炉は軸線N・66°・W上にあり、南東部の石が欠失し開口するように検出されている。周辺からは上屋が想定できる様なピットや施設、また、他の炉状の施設は検出されていない。炉内からは遺物の出土がなかったため、構築時期や使用された期間等については不明な点が多く判然としない。鰐ヶ沢町の餅ノ沢遺跡では縄文時代中期末葉から後期前葉にかけての石囲い炉が25基検出されている、開口部を持つようなものも見受けられる。開口部を持つものが意図的作られたものなのか、後世の攪乱等により偶然できあがったものなのかは、周辺の礫の出土状況や掘り方からも判断することはできなかった。

(笛森)

第2節 沢跡出土の土師器について

沢跡I C・48・49グリッドから土師器が出土している。沢跡底面からつぶれた状態で検出されている。沢跡の堆積土は上部に白頭山火山灰（B-Tm）がブロック、或いは層状に見られた。土師器は沢跡底面疊上から出土していることから、火山灰降下以前の遺物と考えてよいと思われる。

図27-1は口縁部から胴部上半にかけて残存しており、口縁部はかなり聞く形状をなしている。調整については口縁部外面は刷毛目を施した後に多条沈線文が巡らされており、沈線は9条で明確な段状を呈している。体部外面は刷毛目が施されている。口縁部内面は横ナデ、体部内面は刷毛目が施されている。胎土には砂粒が多く含まれている。図27-2は胴部下半から底部にかけて残存している。調整は内外面共に刷毛目が施されている。色調は浅黄橙色である。非クロコ形である。これらの土師器は本遺跡から出土している他時代の土器同様に摩滅が激しい。土師器に沈線文が施されるのは青森県では7～8世紀後半。秋田県では7～8世紀代で特に一般化するのは8世紀である。岩手県では7世紀前半～8世紀後半の幅で捉えられている。律令支配下の宮城県では7世紀後半～8世紀前半である。

多条沈線文が施されている土師器は8世紀後半に北東北3県に多く見られる。青森県での出土例と

しては十三中島遺跡（市浦村）、李平下安原遺跡・五輪野遺跡（尾上町）、小奥戸（2）遺跡（大間町）が挙げられる。秋田県では沈線文は8世紀に増加し、口縁部に多条沈線文が施される土師器は8世紀前半の後城遺跡（秋田市）で認められる。これらの遺跡はいずれも日本海側、或いは津軽海峡に面した地域に点在している。これらの遺跡で出土している土器を土師器として捉えるか、擦文土器として捉えるかという今後に残された問題が当時の人々の交流を考えるうえでも注意される遺物であろう。

（齋藤）

第3節 炭窯について

今回の調査から石組みの炭窯が1基検出された。石窯の検出はおそらく県内ではじめてのことと思われる。窯跡の堆積土中から軍手が出土していることや聞き取り調査から、この炭窯は現代のものであり、最近まで操業しているものと思われる。小屋掛けは確認されなかった。

本県においても大正末から昭和初期にかけて大竹窯や石川窯といった改良黒炭窯が導入されているが、伝統的に津軽地方で製造・使用される炭は白炭が主体であるのに対し、南部地方は黒炭であることが過去の民俗調査からいわれている。このような性格・地域差は、窯の構造にも反映されており、津軽地域では床や壁に石を用いる「石窯」の白炭窯が卓越しており、一方南部地域では壁も土で構築する「土窯」の黒炭窯が主体である。ただ、どちらの窯でも焚き口付近は礫を積み上げるようである。

なお、県内では、鰐ヶ沢町一ツ森町、鰐ヶ沢町長間瀬、平賀町小国、平館、青森市横内、西目屋村大秋・白沢、市浦村脇元などの津軽地域で白炭窯が確認されている。これらの調査事例を列挙すると、①窯は水の便の良いところを選んで構築するが、他にも地形が平で炭材を寄せるのに都合の良いところ（大秋・白沢）や湿気の少ない、風があまり吹き込まないところ（長間瀬）といった要素も必要とされる。②窯は毎年作る例が多い。カマウチの人数や期間は一人で2日～1ヶ月と差がある。③窯には小屋掛けが付属し、カマウチに先立って小屋掛けが行われる。④窯の形状は馬蹄形（脇元）や奥の広い卵形（横内）、円形に近い梢円形（長間瀬）で、規模はゴロクと呼ばれる幅5尺×奥行6尺(151cm×181cm)のものが多い傾向にある。⑤底面に石を敷き詰めるが、排水のために暗渠を掘るものもある（長間瀬・一ツ森町）。⑥ドウは石を粘土で張り合わせて積み上げる。石は近くの沢や川から運ぶことが多く、それが選地要素の1つになっているが、柔らかい岩（大秋・白沢）や、耐火性に富みしかもやわらかい石（一ツ森町）を使う例もある。ドウの高さは4～5尺(121～151cm)で、周囲には肩の高さほどの木（ワラバシラ・カサバシラ）を打ったり（大秋・白沢）、約50cmの土壤層を設け、その外を木柵で囲んだりする（一ツ森町）。ドウは上になるほど広げて積む（一ツ森町）。煙出しにはやや大きめの石で組むことがある（長間瀬、大秋・白沢）。⑦ハチ（天井）は木で骨組みを作った後、その上に石を積み粘土で固め更に土を被せるもの（長間瀬、一ツ森町、大秋・白沢）と、骨組みに粘土のみでつくられるもの（鰐ヶ沢町、小国）とがある。⑧炭材は、ナラ材が一番良いとされる。一回の操業で生産される炭の量は、約1俵（一ツ森町）から10俵（大秋・白沢）と開きがあるが、5俵くらいが平均であると思われる。

遺跡の所在する深浦町の閑地域でも、やはり白炭が主流であることが民俗調査から判明している。以下、閑地域の民俗調査例を引用すると、①窯は湿気がないところを選んで造られる。④窯の平面は長径約5尺(150cm)、短径約4尺(120cm)の長円形で、⑥ドウは石を土で固めながら徐々にすばませて、ハチは丸く形を整える。ドウの高さは約4尺(120cm)、ハチの高さは約2尺(60cm)で

窯の高さは6尺位(180cm)である。石は山にあるもの用い、6寸位(18cm)から上に行くに従い徐々に小さい石を使用する。⑧炭の用材としてはナラ・イタヤ・ブナ・カツラ・コモノキ・サルスベリ・タモなどが用いられ、ナラが一番良いとされて、津軽の他地域と相違ない状況が窺われる。

今回検出された炭窯も壁および底面が石で構築されていることから白炭窯と推定される。しかし、窯本体は掘り込みでつくられていることや、規模がやや小さいこと、また、小屋掛けがないことが他の地域と異なっている。これが時期差なのか地域差をしめすものなのかは調査例が少ないとこでは議論しないが、埋蔵文化財調査によって(偶然であるが)県内ではじめて検出された白炭窯であることと、比較的新しい時期の遺構でも当時の生業を探る貴重な資料となり、民俗資料を活用することによって調査成果を互換できることを(当然のことであるが)ここに提言しておきたい。

(平山)

第4節 まとめ

西浜折曾関は安東氏関連の中世城館として、また、周知の遺跡として青森県遺跡台帳に登録されている。今回の調査地点は推定遺跡範囲の南端部にあたるものと思われていた。調査の結果、中世城館に関係するような遺構は検出されなかった。また、中世と考えられる遺物も古錢が1点出土したに過ぎず、中世の色あいは薄い地点であったように思われた。今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の土坑2基、屋外炉1基、捨て場1力所、奈良時代には水が流れていたと考えられる沢跡4力所、現代の炭窯1基、井戸跡2基、溝跡1条、時期不明の掘立柱建物跡1基、土坑5基である。

縄文時代の捨て場は、沢地形に挟まれた舌状尾根の平場から斜面部に形成されていた。尾根の平坦部には石組の屋外炉があり、それに伴う捨て場と考えられた。捨て場の土器は縄文時代中期～晚期前半にかけてのもので、中でも後～晚期の粗製土器が大半を占めていた。また、捨て場内から出土した炭化堅果類の放射性炭素年代測定の結果は第5章に掲載しているので参照されたい。縄文時代の遺構は屋外炉、捨て場、土坑以外には検出されなかった。遺物でも石鎚等の狩猟用の石器は捨て場以外からはあまり出土せず、陥り穴と考えられる遺構も検出されなかつたこともあり、狩猟区域ではなかつたようである。屋外炉の南東方向には岩木山が眺望できる。また、注口土器片も数点出土していることから、本調査区は縄文時代、祭祀色の強い空間であったものと考えられる。

現在の地形からは分からなかつたが、調査区には沢地形が形成されていたことが確認できた。沢跡に堆積した土層の観察によると、白頭山火山灰(B-Tm)を含む層が堆積土上層に形成され、下部の堆積土中には砂の混入も認められることから、おそらく恒常的ではないにしき、ある程度水が流れていた期間があったものと思われる。沢跡は合流地点で広めの産地を形成している。合流地点に近い沢跡底面から奈良時代の土師器甕がつぶれた状態で出土しており、人々が水場として沢を利用していた可能性も考えられる。

中世から近世にかけては、生活痕跡の希薄な場所であったことが確認できた。調査区北西際の土壌状の地形も、断面の観察からは自然地形であることが確認できた。また、研究者の間でも議論されている沢筋が道として使われていたかどうかについては、土層観察からも明確にすることはできなかつた。

2基検出された井戸跡は、この場所がリンゴ園だった頃に掘られた井戸であることが確認できた。

井戸跡は沢筋に掘られており、井戸と井戸を結ぶような溝跡も一部確認できた。第1号井戸跡からは流れ込みと考えられる縄文時代の大珠の未製品が1点出土している。炭窯は比較的標高の高い地点から検出された。石を積み上げて作るいわゆる石窯で、民俗事例からするとナラなどを使い白炭を作っていた炭窯であろう。

今回の調査区からは、前述したように中世城館として知られる西浜折曾閥に関連するような遺構・遺物は検出されなかった。西浜折曾閥に関しては研究者によって縄張り図等も作成されているが、明確な範囲確認はなされていない。今回の調査地点においても関連遺構が検出されなかつたことにより、西浜折曾閥の範囲が確定されたという訳でもない。今後の調査・研究に期待することとしたい。

(調査担当者一同)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1970『津軽半島北部山村振興町村民俗資料緊急調査報告書』
- 青森県教育委員会 1986『大湊近川遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第104集
- 青森県教育委員会 1988『李平下安原遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第111集
- 青森県教育委員会 1990『塩沢遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第130集
- 青森県教育委員会 1997『垂柳・五輪野遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第219集
- 青森県教育委員会 1998『外馬屋前田(1)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第242集
- 青森県教育委員会 2000『餅ノ沢遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第278集
- 青森県立郷土館 1976『雪国の民俗』青森県立郷土館調査報告書第2集・民俗-1
- 青森県立郷土館 1984『闇の民俗』青森県立郷土館調査報告書第16集・民俗-8
- 青森県立郷土館 1985『脇元の民俗』青森県立郷土館調査報告書第19集・民俗-9
- 青森県立郷土館 1992『小国の民俗』青森県立郷土館調査報告書第30集・民俗-15
- 青森県立郷土館 1993『大秋・白沢の民俗』青森県立郷土館調査報告書第32集・民俗-16
- 青森市史編集委員会民俗部会 2001『横内・荒川の民俗』青森市史叢書3・民俗調査報告書第三集
- 外崎純一 1977 「炭焼」『青森県の木樵用具』青森県民俗資料図録第4集 青森県立郷土館
- 外崎純一 1985 「青森の炭焼」『技術と民俗(上)・海と山の生活技術談』日本民俗文化大系第13巻 小学館
- 昆政明 1982 「青森県における炭窯の変遷」『右工門次郎窯遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第69集
- 谷地 薫 1993 「家ノ後遺跡の晩期初頭土器」『研究紀要』第8号 秋田県埋蔵文化財センター
- 本堂寿一 1993 「津軽安藤(安東)氏の遺跡と歴史—津軽西浜折曾閑比定地の踏査を兼ねて—」『北上市立博物館研究紀要』第9号
- 宇部則保 1997 「7・8世紀の沈線文土器—青森県—」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会秋田大会資料
- 鶴田要一郎 1997 「ふるさと歳時記—赤石奥地の生活記録—」青沼社
- 宇部則保 2000 「古代東北地方北部の沈線文のある土師器」『月刊考古学ジャーナル』No.462
- 北越考古学研究会 1997 「新潟県北部地域における縄文時代後・晩期の研究」『北越考古学』第8号

捨て壙出土遺物・土器類表

固 番号	出土地点	階 位	器 種	部 位	分 類	外面施文様・調査	備 考
12 1	R-45	Ⅲ	深鉢	胴部	I-3	施蒂・側面压痕・刺突	
12 2	R-45	Ⅲ	深鉢	胴部	I-3	施蒂・側面压痕・刺突	
12 3	R-45	Ⅲ	深鉢	胴部	I-3	施蒂・側面压痕・刺突	
12 4	R-45	Ⅲ	深鉢	胴部	I-3	施蒂・側面压痕・刺突	
12 5	V-45	Ⅲ	深鉢	胴部	I-3	施蒂・側面压痕・刺突	
12 6	U-45	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	II-1	斜綱文・沈緯・磨消し	口唇部平
12 7	U-45	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	II-1	斜綱文・沈緯・磨消し	口唇部平
12 8	T-45	Ⅲ	會	胴部	II-2	沈緯・曲線	
12 9	R-46	Ⅲ	壺	胴部	II-2	沈緯・曲線	
12 10	T-44	Ⅲ	壺	胴部	II-2	沈緯・曲線	
12 11	T-44	Ⅲ	壺	胴部	II-2	沈緯・曲線	
12 12	T-44	Ⅲ	壺	胴部	II-2	沈緯	
12 13	T-44	Ⅲ	壺	胴部	II-2	沈緯・曲線	
12 14	U-44	Ⅲ	壺	胴部	II-2	沈緯	
12 15	T-44	Ⅲ	壺	胴部	II-2	沈緯	
12 16	S-44	Ⅲ	深鉢	胴部	II-2	沈緯・曲線	
12 17	T-44	Ⅲ	深鉢	胴部	II-2	格子状沈緯	
12 18	T-44	Ⅲ	深鉢	胴部	II-2	格子状沈緯	
12 19	T-44	Ⅲ	深鉢	胴部	II-2	格子状沈緯	
12 20	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	III-1	斜綱文・沈緯	口唇部平
12 21	V-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	波状口縁・口唇部平
12 22	U-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	口唇部平
12 23	U-44	Ⅲ	深鉢	胴部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	
12 24	T-44	Ⅲ	深鉢	胴部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	
12 25	U-44	Ⅲ	深鉢	胴部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	
12 26	U-45	Ⅲ	深鉢	胴部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	
12 27	U-44	Ⅲ	深鉢	胴部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	
12 28	S-45	Ⅲ	深鉢	胴部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	
12 29	T-44	Ⅲ	深鉢	胴部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	
12 30	U-44	Ⅲ	深鉢	胴部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	
12 31	U-45	Ⅲ	深鉢	胴部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	
12 32	T-44	Ⅲ	深鉢	胴部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	
12 33	T-45	Ⅲ	深鉢	胴部	III-1	斜綱文・沈緯・磨消し	
13 34	T-45	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文・斜削斜綱文	小波状口縁・口唇部平
13 35	T-45	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文	小波状口縁・口唇部平
13 36	U-44	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文・胴部斜綱文	小波状口縁・口唇部丸
13 37	U-44	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文・胴部斜綱文	小波状口縁・口唇部丸
13 38	T-45	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文	小波状口縁・口唇部平
13 39	U-43	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	斜綱文・沈緯・三叉文	小波状口縁・口唇部丸
13 40	R-45	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文	口唇部丸
13 41	R-45	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文	小波状口縁・口唇部丸
13 42	T-44	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文	波状口縁・口唇部平
13 43	S-45	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文・胴部斜綱文・沈緯	小波状口縁・口唇部丸
13 44	U-44	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文	口唇部丸
13 45	V-44	Ⅲ	鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文	口唇部丸
13 46	U-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	II-2	沈緯・三叉文	小波状口縁・口唇部丸
13 47	U-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	II-2	斜綱文・沈緯・三叉文	小波状口縁・口唇部丸
13 48	T-45	Ⅲ	深鉢	胴部	III-2	沈緯・三叉文	
13 49	T-44	Ⅲ	深鉢	胴部	III-2	沈緯・三叉文	
13 50	U-45	Ⅲ	深鉢	胴部	III-2	沈緯・三叉文	
13 51	R-46	Ⅲ	深鉢	胴部	III-2	斜綱文・沈緯・三叉文	
13 52	V-44	Ⅲ	深鉢	胴部	III-2	沈緯・三叉文・胴部斜綱文	
13 53	R-46	Ⅲ	深鉢	胴部	III-2	沈緯・三叉文・胴部斜綱文	
13 54	U-44	Ⅲ	深鉢	胴部	III-2	斜綱文・沈緯・三叉文	
13 55	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	II-2	斜綱文・沈緯・三叉文	口唇部丸
13 56	T-44	Ⅲ	注 口	胴部	II-2	沈緯・三叉文	
13 57	T-44	Ⅲ	鉢	口縁～胴部	II-2	沈緯・三叉文・胴部斜綱文・沈緯・三叉文	口唇部平
13 58	T-45	Ⅲ	注 口	頭～胴部	II-5	地文鉢貼り付け・地文斜綱文・沈緯・磨消し	
13 59	T-44	Ⅲ	注 口	頭～胴部	II-5	地文鉢貼り付け・地文斜綱文・沈緯・磨消し	
13 60	T-45	Ⅲ	深鉢	頭	II-5	地文斜綱文・沈緯・磨消し	
13 61	S-46	Ⅲ	注 口	口縁～胴部	II-2	沈緯・三叉文・Sガキ	口唇部平
13 62	T-44	Ⅲ	鉢	口縁部	II-4	地文斜綱文・沈緯・半彎状文	口唇部丸

13	63	S-46	Ⅲ	鉢	口縁部	IV-4	地文斜綱文・沈線・半盛状文	口唇部丸
14	64	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	65	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	66	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	67	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	68	S-46	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	69	S-46	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	70	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	71	S-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	72	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	73	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	74	U-43	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	75	S-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	76	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	77	U-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	78	S-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	79	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	80	T-46	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	81	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	82	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	83	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	84	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	85	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	86	T-46	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	87	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	88	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	89	S-46	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	90	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	91	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	92	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	93	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
14	94	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	95	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	96	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	97	T-46	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	98	R-46	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	99	S-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	100	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	101	S-46	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	102	T-46	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	103	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	104	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	105	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	106	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	107	T-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	108	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	109	V-44	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	110	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	111	R-46	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	112	T-45	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	113	T-45	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	114	R-45	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	115	V-44	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	116	S-45	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	117	V-43	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	118	T-44	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	119	U-44	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	120	S-46	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	121	T-45	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	122	T-45	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	123	T-46	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	124	U-44	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	125	V-44	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸
15	126	T-44	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-1	斜綱文	口唇部丸

15	127	U-45	III	深鉢	胴部	IV-1	斜縞文		
15	128	U-45	III	深鉢	胴部	IV-1	斜縞文		
15	129	T-45	III	深鉢	胴部	IV-1	斜縞文		
15	130	T-45	III	深鉢	胴部	IV-1	斜縞文		
15	131	S-44	III	～	胴～底部	IV-8-a	胴部斜縞文		
15	132	S-45	III	～	胴～底部	IV-8-b	胴部斜縞文		
16	133	T-44	III	深鉢	口縁～胴部	IV-2	斜縞文	口唇部平	
16	134	T-44	III	深鉢	口縁～胴部	IV-2	斜縞文	口唇部円	
16	135	T-44	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部円	
16	136	V-43	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部円	
16	137	T-44	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部鋸	
16	138	T-44	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部円	
16	139	S-46	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部円	
16	140	U-44	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部平	
16	141	T-44	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部平	
16	142	T-44	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部平	
16	143	R-45	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部平	
16	144	T-46	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部平	
16	145	R-46	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部平	
16	146	S-45	III	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口唇部平	
16	147	S-45	III	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文		
16	148	U-44	III	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文		
16	149	T-44	III	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文		
16	150	T-45	III	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文		
16	151	T-44	III	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文		
16	152	S-45	III	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文		
16	153	T-44	III	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文		
16	154	T-46	III	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文		
16	155	U-44	III	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文		
16	156	T-45	III	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文		
16	157	T-44	III	深鉢	胴部	IV-3	羽状縞文		
17	158	S-45	III	鉢	口縁～底部	IV-6	無文	口唇部鋸	
17	159	T-44	III	鉢	口縁部	IV-6	無文	口唇部丸	
17	160	S-45	III	鉢	口縁部	IV-6	無文	口唇部丸	
17	161	T-45	III	鉢	口縁部	IV-6	無文	口唇部丸	
17	162	T-44	III	鉢	口縁部	IV-6	無文	口唇部丸	
17	163	T-45	III	鉢	口縁部	IV-6	無文	口唇部平	
17	164	T-45	III	鉢	口縁部	IV-6	無文・擦痕	口唇部平	
17	165	U-44	III	鉢	口縁部	IV-6	無文	口唇部鋸	
17	166	T-45	III	鉢	口縁部	IV-6	無文	口唇部丸	
17	167	T-44	III	鉢	口縁部	IV-6	無文	口唇部平	
17	168	U-44	III	鉢	口縁部	IV-6	無文	口唇部平	
17	169	T-44	III	鉢	口縁部	IV-6	無文	口唇部円	
17	170	S-45	III	鉢	口縁部	IV-6	無文	口唇部鋸	
17	171	T-44	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	172	T-45	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	173	T-44	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	174	T-45	III	鉢	胴部	IV-6	無文・擦痕		
17	175	U-45	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	176	T-44	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	177	U-45	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	178	U-43	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	179	S-45	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	180	S-45	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	181	T-44	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	182	T-44	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	183	S-45	III	鉢	胴部	IV-6	無文・擦痕		
17	184	U-43	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	185	U-43	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	186	T-45	III	鉢	胴部	IV-6	無文		
17	187	S-45	III	鉢	胴～底部	IV-6	無文	底部平底	
17	188	T-45	III	鉢	胴～底部	IV-6	無文	底部高台氣味	
17	189	U-45	III	鉢	胴～底部	IV-6	無文	底部高台付き	
18	190	S-45	III	深鉢	口縁～胴部	IV-6	無縫斜縞文	口唇部平	

18	191	T-44	III	深鉢	口縁部	NV-7	細斜縞文
18	192	S-45	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	193	U-44	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	194	U-44	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	195	U-44	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	196	T-44	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	197	U-45	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	198	T-44	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	199	U-44	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	200	T-45	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	201	T-45	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	202	T-44	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	203	T-44	III	巻	脇部	NV-7	細斜縞文
18	204	V-44	III		合部	NV-8-a	合部織文
18	205	S-45	III		合部	NV-8-a	合部端部に浅い割り状の沈継
18	206	T-44	III		合部	NV-8-a	合部織文
18	207	T-46	III		合部	NV-8-a	合部織文
18	208	T-44	III		合部	NV-8-a	合部織文
18	209	T-44	III		底部	NV-8-b	網部織文
18	210	V-44	III		底部	NV-8-b	網部織文
18	211	S-44	III		底部	NV-8-b	網部織文
18	212	U-44	III		底部	NV-8-b	網部織文
18	213	T-45	III		底部	NV-8-b	網部織文
18	214	T-44	III		底部	NV-8-c	網部織文
18	215	V-45	III		底部	NV-8-b	網部織文
18	216	T-44	III		底部	NV-8-b	網部斜縞文
18	217	T-44	III		底部	NV-8-b	網部斜縞文
18	218	V-44	III		底部	NV-8-b	網部斜縞文
19	219	U-45	III		底部	NV-8-c	網部斜縞文
19	220	V-44	III		底部	NV-8-c	網部斜縞文
19	221	T-45	III		底部	NV-8-c	網部織文
19	222	T-45	III		底部	NV-8-c	網部織文
19	223	U-45	III		底部	NV-8-c	網部斜縞文
19	224	T-45	III		底部	NV-8-c	網部斜縞文
19	225	T-45	III		底部	NV-8-c	網部織文

土坑内出土物・土器觀察表

図 番号	出土地点	層位	器種	部位	分類	外面施文文様・調整	備考
25. 1	第1号土坑	堆積土	深鉢	口縁部	II-1	斜縞文・沈緋・磨消し	口唇部平・沈緋新面観
25. 2	第1号土坑	堆積土	深鉢	口縁部	II-1	斜縞文・沈緋・磨消し	口唇部平・沈緋新面観
25. 3	第1号土坑	堆積土	深鉢	口縁部	II-1	斜縞文・沈緋・磨消し	口唇部平・沈緋新面観
25. 4	第1号土坑	堆積土	深鉢	胴部	II-1	斜縞文・沈緋・磨消し	
25. 5	第1号土坑	堆積土	深鉢	胴部	II-1	斜縞文・沈緋・磨消し	
25. 6	第1号土坑	堆積土	深鉢	胴部	II-1	斜縞文・沈緋・磨消し	
25. 7	第1号土坑	堆積土	深鉢	胴部	II-1	斜縞文・沈緋・磨消し	

沢跡出土物・土器觀察表

図 番号	出土地点	層位	器種	部位	分類	外面施文文様・調整	備考
27. 1	沢跡	底面	甕	口縁～胴部	II-1	粘土紐施文・側面刷毛目	
27. 2	沢跡	底面	甕	胴～底部	II-1	粘土紐施文・側面刷毛目	

選択外出土遺物・土器觀察表

図 番号	出土地点	層位	器種	部位	分類	外面施文文様・調整	備考
39. 1	Z-37	III	深鉢	口縁部	II-1	側面圧痕	口唇部円
39. 2	X-39	III	深鉢	口縁部	II-2	粘土紐施文・側面圧痕	口唇部円
39. 3	I.G-50	III	深鉢	胴部	II-2	粘土紐施文・側面圧痕	
39. 4	I.D-46	III	深鉢	胴部	II-2	粘土紐施文・側面圧痕	
39. 5	I.E-46	III	深鉢	胴部	II-2	側面圧痕	
39. 6	X-40	II	深鉢	胴部	II-2	粘土紐施文・側面圧痕	
39. 7	X-40	III	深鉢	胴部	II-2	粘土紐施文・側面圧痕	
39. 8	2T-11	III	深鉢	口縁部	II-4	粘土紐・沈緋	波状口縁・口唇部観
39. 9	I.D-40	III	深鉢	口縁部	II-4	粘土紐・沈緋	波状口縁・口唇部観
39. 10	2T-13	III	深鉢	口縁部	II-4	粘土紐・沈緋	波状口縁・口唇部観
39. 11	2T-13	III	深鉢	口縁部	II-4	粘土紐・沈緋	波状口縁・口唇部観
39. 12	I.F-43	III	深鉢	口縁部	II-4	粘土紐・沈緋	波状口縁・口唇部観
39. 13	2T-13	III	深鉢	口縁部	II-4	粘土紐・沈緋	波状口縁・口唇部丸
39. 14	2T-14	III	深鉢	口縁部	II-4	斜縞文	波状口縁・口唇部丸
39. 15	2T-13	III	深鉢	口縁部	II-4	斜縞文	波状口縁・口唇部丸
39. 16	I.D-42	III	深鉢	胴部	II-4	斜縞文・沈緋	
39. 17	2T-14	III	深鉢	胴部	II-4	斜縞文・沈緋	
39. 18	2T-14	III	深鉢	胴部	II-4	斜縞文・沈緋	
39. 19	I.E-45	III	深鉢	胴部	II-5	斜縞文・沈緋・竹管斜突	
39. 20	2T-11	III	深鉢	胴部	II-6	斜縞文・沈緋	
39. 21	I.D-53	III	深鉢	胴部	II-6	斜縞文・沈緋	
39. 22	I.E-51	III	深鉢	胴部	II-6	斜縞文・沈緋	
39. 23	R-41	III	深鉢	口縁部	II-2	沈緋	口唇部丸
39. 24	R-44	III	深鉢	口縁部	II-2	沈緋	口唇部丸
39. 25	Q-44	III	深鉢	口縁部	II-2	沈緋	口唇部円
39. 26	R-41	III	深鉢	口縁部	II-2	沈緋	口唇部貼り付け
39. 27	I.C-45	III	深鉢	口縁部	II-2	沈緋	波状口縁・口唇部観
39. 28	I.C-45	III	深鉢	胴部	II-2	沈緋	
39. 29	I.F-52	III	深鉢	胴部	II-2	沈緋	
39. 30	1T-5	III	鉢	口縁部	II-2	沈緋	口唇部丸
39. 31	1T-5	III	鉢	胴部	II-2	沈緋	
39. 32	I.G-47	III	甕	口縁部	II-2	無文	口唇部観
39. 33	Y-35他	III	甕	口縁部	II-2	無文・沈緋	口唇部丸
39. 34	I.D-42	III	甕	口縁部	II-2	沈緋	口唇部平
39. 35	X-40	III	甕	口縁部	II-2	沈緋	口唇部観
39. 36	Q-42	III	甕	口縁部	II-2	沈緋	口唇部丸
39. 37	R-41	III	香炉?	口縁部	II-2	沈緋・粘土粒貼り付け・透かし	口唇部平
39. 38	X-40	III	甕	胴部	II-2	沈緋	
40. 39	Y-56	II	鉢	口縁部	II-2	斜縞文・沈緋・三叉文	波状口縁
40. 40	Y-56	II	鉢	脇～台部	II-2	網目斜縞文・台部下部沈緋	39.2同一個体
40. 41	Q-42	II	鉢	口縁部	II-2	沈緋・三叉文	口唇部平
40. 42	P-44	II	鉢	口縁部	II-2	沈緋・三叉文	口唇部平
40. 43	Q-43	II	鉢	口縁部	II-2	沈緋・三叉文	口唇部平
40. 44	P-43	II	鉢	口縁部	II-3	沈緋・玉ねぎ三叉文	波状口縁・口唇部平
40. 45	P-43	II	鉢	口縁部	II-3	沈緋・玉ねぎ三叉文	口唇部平
40. 46	Q-43	II	鉢	口縁部～胴部	II-4	沈緋・羊曲状文・胴部斜縞文	口唇部観
41. 47	3T-20	III	深鉢	口縁部	IV-1	縦輪印転斜縞文・側面圧痕	口唇部平

41	48	3T-20	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜縞文	口番部平
41	49	4T-26	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜縞文	口番部斜縞文
41	50	4T-11	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜縞文	口番部平
41	51	4T-11	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜縞文	口番部平
41	52	R-41	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜縞文	口番部平
41	53	Q-42	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-1	斜縞文	口番部級
41	54	Q-41	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口番部平
41	55	IB-41	IV	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口縞部肥厚・口番部級
41	56	IB-41	IV	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口縞部肥厚・口番部級
41	57	4T-11	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-2	斜縞文	口番部級
41	58	IB-42	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-7	細斜縞文	補修孔・口番部丸
41	59	IB-42	Ⅲ	深鉢	口縁部	IV-7	細斜縞文	口番部平
41	60	IC-45	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文	
41	61	ID-43	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文	
41	62	ID-44	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文	
41	63	IB-41	IV	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文	
41	64	IB-41	IV	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文	
41	65	IB-41	IV	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文	
41	66	2T-13	Ⅲ	深鉢	胴部	IV-2	斜縞文	円盤状土製品?
41	67	ID-42	Ⅲ	深鉢	胴～底部	IV-2	斜縞文	
41	68	IE-53	II	深鉢	口縁～胴部	IV-4	2条横位沈線・胴部縦位縞文	口番部級
41	69	IE-53	II	深鉢	口縁～胴部	IV-4	2条横位沈線・胴部縦位縞文	口番部丸
41	70	IE-53	II	深鉢	口縁～胴部	IV-4	2条横位沈線・胴部縦位縞文	口番部丸
41	71	IF-53	II	深鉢	口縁～胴部	IV-4	2条横位沈線・胴部縦位縞文	口番部丸
41	72	ID-51	II	深鉢	口縁～胴部	IV-4	2条横位沈線・胴部縦位縞文	口番部級
41	73	IE-53	I	深鉢	口縁～胴部	IV-4	2条横位沈線・胴部縦位縞文	口番部平
41	74	IE-53	II	深鉢	口縁～胴部	IV-4	2条横位沈線・胴部縦位縞文	口番部平
42	75	IE-53	II	深鉢	胴部	IV-4	縦位縞文	
42	76	IE-53	II	深鉢	胴部	IV-4	縦位縞文	
42	77	IE-53	II	深鉢	胴部	IV-4	縦位縞文	
42	78	IE-53	II	深鉢	胴部	IV-4	縦位縞文	
42	79	IE-53	II	深鉢	胴部	IV-4	縦位縞文	
42	80	IE-53	II	深鉢	胴～底部	IV-4	縦位縞文	
42	81	IE-53	II	鉢	胴部	IV-4	胴部縦位縞文	捨れ有

石器・石製品陳列表

図 番 号	説 明	石 質	出土地點	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重 量(g)	備 考	
20 1	石刀	珪質頁岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	(21)	15	4	(0.9)	隔壁凹面	
20 2	石刀	珪質頁岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	31	18	5	1.1	有茎凸面	
20 3	石刀	珪質頁岩	活て塙(U-43)	Ⅲ	40	(15)	7	(2.3)	有茎凸面	
20 4	石刀	珪質頁岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	33	(13)	6	(1.4)	有茎凸面	
20 5	石刀	珪質頁岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	(23)	15	4	(0.9)	有茎凸面	
20 6	石刀	玉髓質頁岩質	活て塙(U-42)	Ⅲ	(19)	14	5	(0.7)	有茎平基	
20 7	石刀	珪質頁岩	活て塙(U-45)	Ⅲ	22	17	5	1.0		
20 8	石刀	珪質頁岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	34	14	9	3.9		
20 10	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	67	42	8	25.1	一端刃	
20 11	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(U-43)	Ⅲ	31	20	7	4.7	一端刃	
20 12	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	33	47	10	18.9	一端刃	
20 13	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(U-45)	Ⅲ	41	25	6	5.2	一端刃	
20 14	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	27	32	5	2.9	一端刃	
20 15	スクレイバー	珪質頁岩質	活て塙(V-44)	Ⅲ	92	52	14	59.1	一端刃	
20 16	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(S-42)	Ⅲ	42	33	10	12.9	一端刃	
20 17	スクレイバー	石英質頁岩質	活て塙(U-43)	Ⅲ	68	42	24	72.1	一端刃	
20 18	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	39	51	10	21.8	一端刃	
20 19	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(T-42)	Ⅲ	33	27	8	7.1	一端刃	
20 20	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(T-42)	Ⅲ	45	25	13	7.6	一端刃	
20 21	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(U-42)	Ⅲ	48	40	10	16.1	三端刃	
20 22	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(U-43)	Ⅲ	50	32	8	12.8	彫刻	
20 23	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(S-42)	Ⅲ	32	36	10	8.2	刃の一節	
20 24	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(U-45)	Ⅲ	38	21	10	4.5	刃の一節	
20 25	スクレイバー	珪質頁岩	活て塙(T-43)	Ⅲ	32	33	5	4.5	刃の一節	
20 26	石斧	灰岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	26	14	9	5.0		
21 27	磨り石	ディサイト	活て塙(U-45)	Ⅲ	107	91	66	877.1		
21 28	磨り石	ディサイト	活て塙(U-45)	Ⅲ	114	95	70	1054.4		
21 29	磨り石	磨紋岩	活て塙(S-43)	Ⅲ	50	43	40	128.2		
21 30	磨り石	ディサイト	活て塙(T-45)	Ⅲ	101	83	65	807.8		
21 31	磨り石	ディサイト	活て塙(T-45)	Ⅲ	114	89	72	1024.5		
21 32	磨り石	石英安山岩	活て塙(T-45)	Ⅲ	126	89	66	957.9		
21 33	磨り石	ディサイト	活て塙(T-44)	Ⅲ	86	68	50	418.6		
21 34	磨り石	ディサイト	活て塙(V-45)	Ⅲ	85	68	54	423.7		
21 35	磨り石	凝灰岩	活て塙(T-42)	Ⅲ	(90)	(45)	(42)	166.6		
21 36	磨り石	石英安山岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	(92)	100	(54)	666.5		
21 37	磨り石	凝灰岩	活て塙(U-44)	Ⅲ	(110)	(60)	(40)	241.6		
21 38	磨り石	底原質頁岩質	活て塙(U-44)	Ⅲ	(17)	70	(49)	553.2		
22 29	磨みわら	石灰岩	活て塙(U-45)	Ⅲ	(10)	86	74	65.2		
22 40	磨みわら	ディサイト	活て塙(T-44)	Ⅲ	121	86	64	970.9		
24 41	磨みわら	石英安山岩	活て塙(T-42)	Ⅲ	(149)	138	(62)	1116.3		
24 42	磨みわら	石英安山岩	活て塙(S-45)	Ⅲ	(154)	(120)	(68)	1739.9		
25 8	石斧	珪質頁岩	土	Ⅳ	41	55	8	12.5	塊裏面に未穿孔痕	
25 9	磨石	灰岩	第1号戸内	Ⅳ	22	57	10	9.0	刃部のみ	
30 1	磨石	灰岩	第1号戸内	Ⅳ	183	154	82	3139.3		
30 2	磨り石	灰岩	第1号戸内	Ⅳ	116	91	49	894.4		
30 3	磨り石	灰岩	第1号戸内	Ⅳ	149	84	79	1087.5		
30 4	大珠	珪質頁岩	第1号戸内	Ⅳ	58	55	36	152.4	表裏面に未穿孔痕	
43 1	石刀	珪質頁岩	I-H-47	I	35	15	5	1.7	布文凸面	
43 2	石刀	珪質頁岩	X-40	Ⅲ	26	15	4	0.7	有茎平基	
43 3	石刀	珪質頁岩	D-42	Ⅲ	37	60	12	14.4	縫合	
43 4	石刀	珪質頁岩	I-B-39	沢原面直上	90	23	14	(20.6)		
43 5	石刀	珪質頁岩	F-44	Ⅲ	(39)	22	6	(4.6)		
43 6	石刀	珪質頁岩	X-44	Ⅲ	51	18	8	5.4		
43 7	石刀	珪質頁岩	S-52	Ⅲ	72	39	13	33.5		
43 8	石刀	珪質頁岩	I-B-47	Ⅲ	55	36	12	29.7		
43 9	9	スクレイバー	I-G-45	Ⅲ	82	43	16	43.2	一端刃	
43 10	10	スクレイバー	I-B-47	Ⅲ	63	33	9	10.4	一端刃	
43 11	11	スクレイバー	I-A-47	Ⅲ	32	28	6	5.4	一端刃	
43 12	12	スクレイバー	P-43	Ⅲ	28	27	3.1			
43 13	13	スクレイバー	G-42	Ⅲ	16	18	7	1.9	一端刃	
43 14	14	スクレイバー	V-42	Ⅲ	53	91	22	56.3	刃の一節	
43 15	23	石刀	珪質頁岩	W-42	Ⅲ	45	41	23	43.4	
43 16	24	石刀	珪質頁岩	T-41	Ⅲ	43	47	34	66.9	
44 17	25	石刀	珪質頁岩	V-58	Ⅲ	89	49	58	269.0	
45 18	磨り石	流紋岩	V-44	Ⅲ	108	97	75	997.9		
45 19	磨り石	流紋岩	I-E-51	Ⅲ	88	83	57	571.1		
45 20	磨り石	流紋岩	W-41	Ⅲ	87	79	62	597.7		
45 21	21	磨り石	石英安山岩	I-E-63	Ⅲ	137	(95)	(70)	1229.3	
45 22	22	磨り石	流紋岩	T-49	74	72	32	249.7		
45 23	23	磨り石	R-51	Ⅲ	(130)	114	(49)	987.9		
45 24	24	磨り石	X-57	Ⅲ	79	75	37	174.4		
45 25	25	磨り石	石英安山岩	S-49	184	166	53	2850.3		
45 26	26	磨り石	流紋岩	I-G-45	I	107	77	40	423.9	
45 27	27	磨り石	流紋岩	T-52	Ⅲ	138	73	67	722.9	
45 28	28	磨り石	V-51	Ⅲ	(137)	122	(56)	1117.6		
45 29	29	磨り石	S-49	Ⅲ	139	61	41	548.3		
45 30	30	磨り石	珪質頁岩	U-60	Ⅲ	145	75	58	940.9	
45 31	31	磨り石	V-2	Ⅲ	148	62	44	557.6		
45 32	32	磨り石	珪質頁岩	Y-56	I	66	52	25	63.5	
45 33	33	磨り石	珪質頁岩	V-51	Ⅲ	98	72	44	502.9	
45 34	34	磨り石	珪質頁岩	X-63	Ⅲ	117	96	55	563.5	
45 35	35	磨り石	珪質頁岩	I-G-45	Ⅲ	116	68	47	545.0	
45 36	36	石刀	珪質頁岩	X-40	Ⅲ	118	58	36	393.0	
45 37	37	石質品	シルト	I-B-39	沢原面直上	32	57	7	12.2	

写 真 図 版



遺跡近景（北西から）

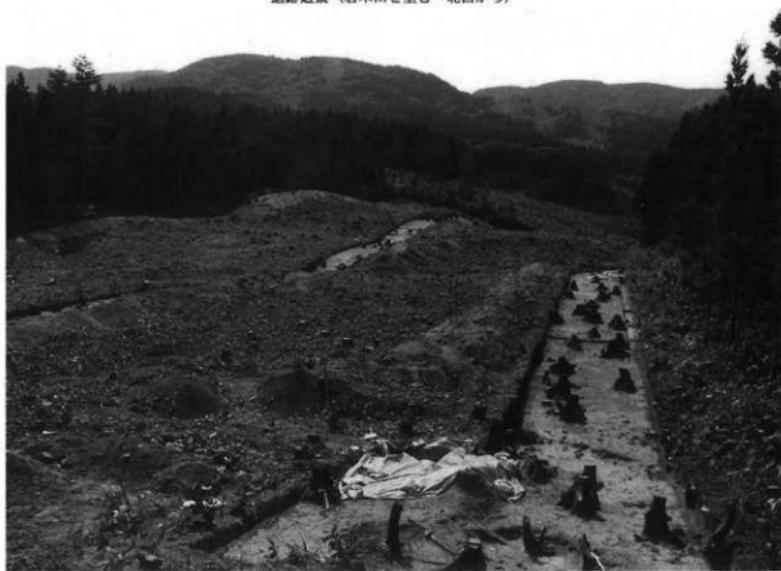


調査前風景（南東から）

写真1 遺跡近景（1）



遺跡近景（岩木山を望む・北西から）



調査地形（南東から）

写真2 遺跡近景（2）



作業風景



遺跡外遺物出土状況

写真3 作業風景

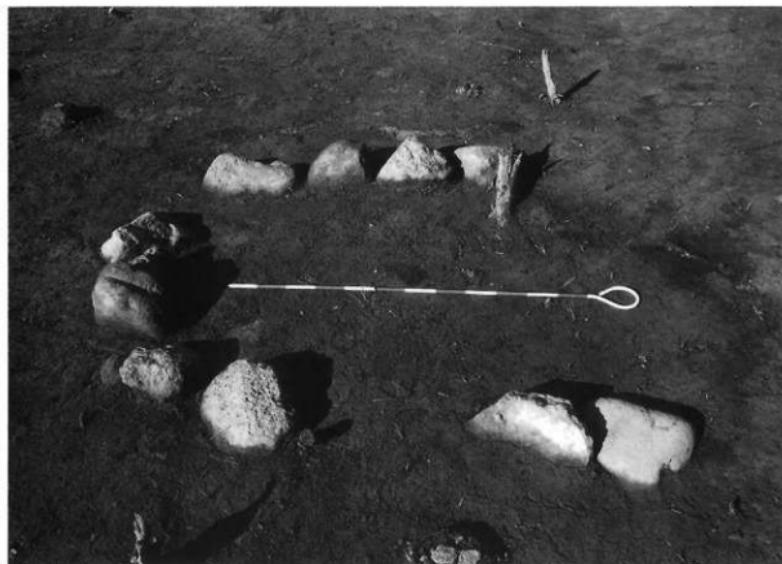


基本層序 (A-A')



基本層序 (B-B')

写真4 基本層序



屋外炉（南から）



屋外炉断面（南から）

写真 5 屋外炉

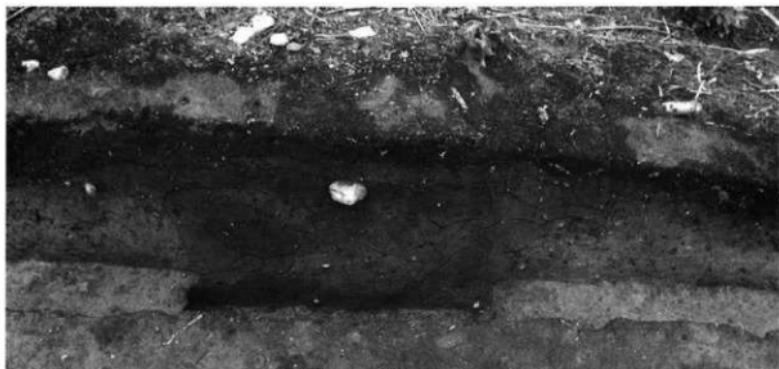


捨て場 遺物出土状況（南から）



捨て場 作業風景

写真6 捨て場



第1号土抗 土層断面（北東から）

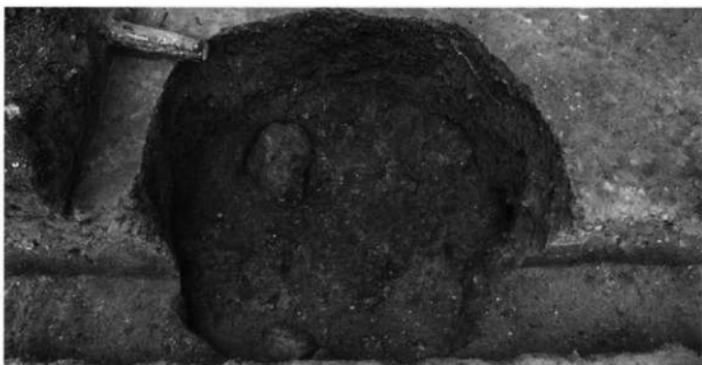


第3号土抗 土層断面（南から）

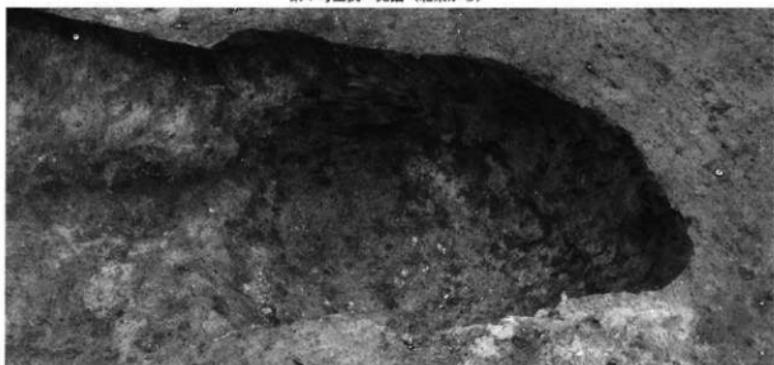


第5号土抗 土層断面（北東から）

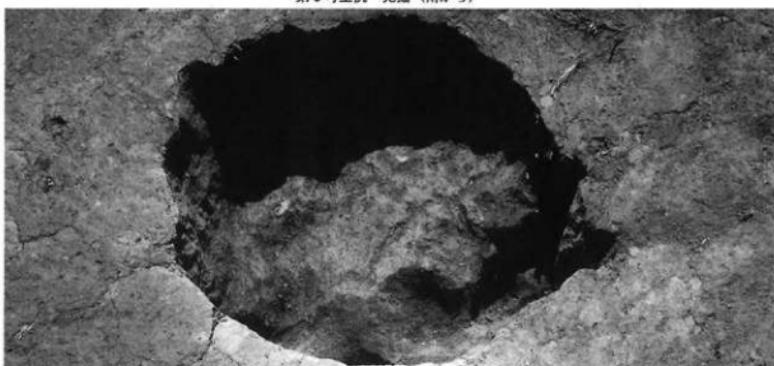
写真7 土抗 土層断面



第1号土抗 完掘（北東から）



第3号土抗 完掘（南から）



第5号土抗 完掘（北東から）

写真8 土抗 完掘

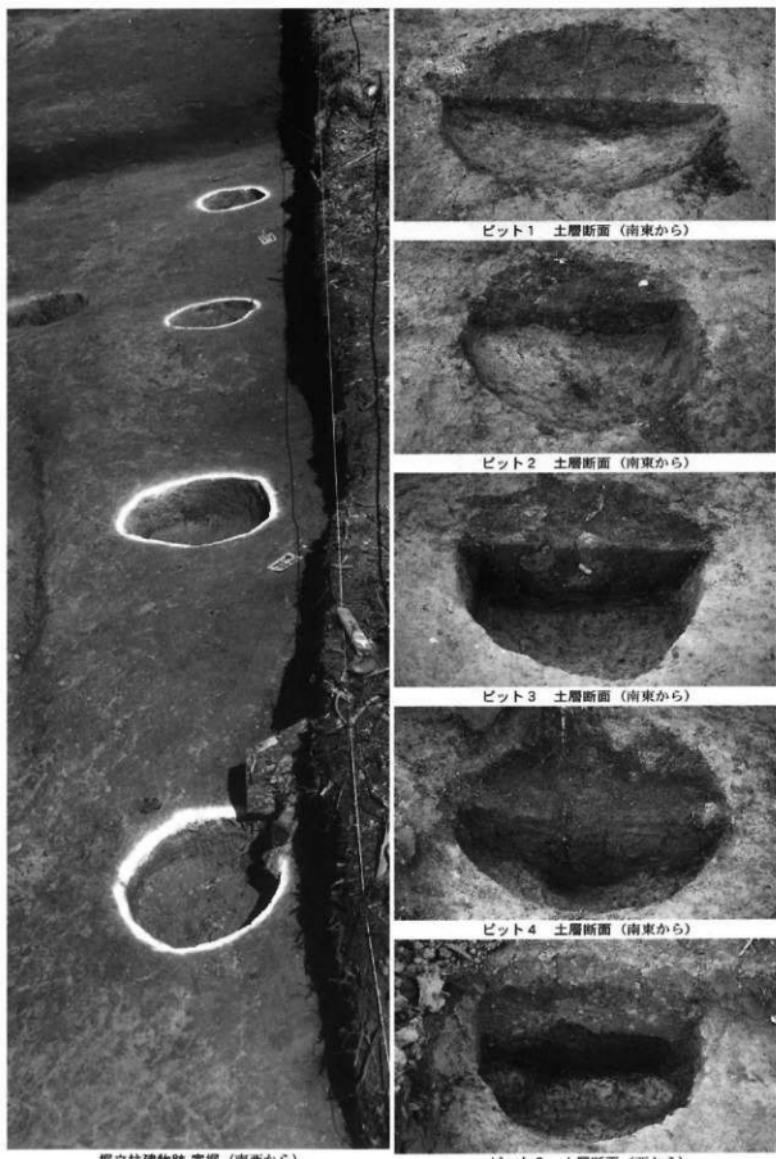


沢跡検出状況（遺物出土地点・北西から）



沢跡遺物出土状況

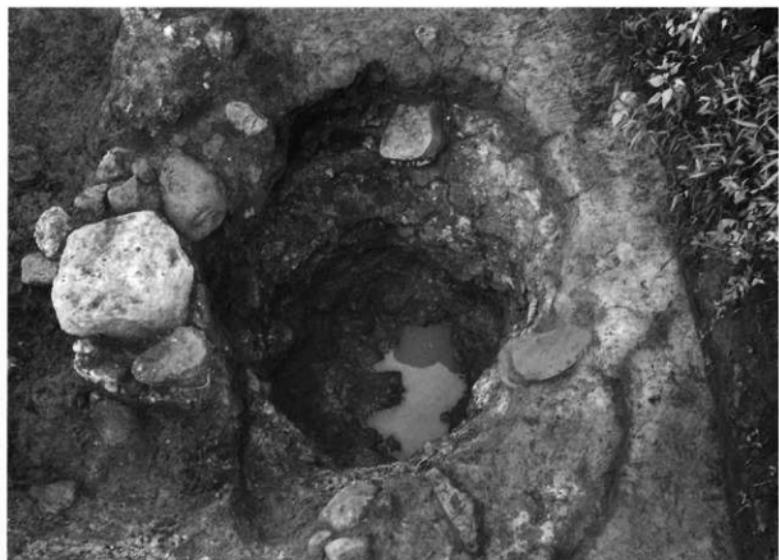
写真9 沢跡



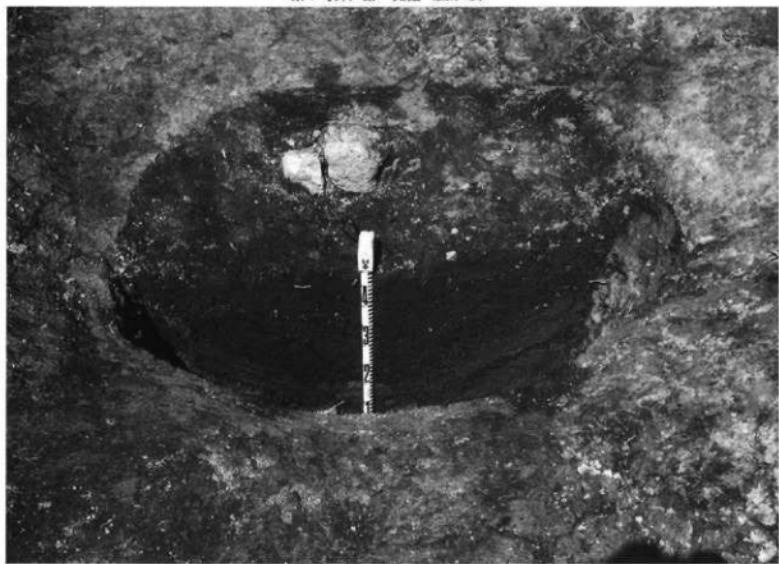
掘立柱建物跡 完掘（南西から）

ピット5 土層断面（西から）

写真10 掘立柱建物跡



第1号井戸跡 完掘（西から）



第2号 井戸跡 土層断面（南東から）

写真11 井戸跡



炭窯 検出状況（西から）



炭窯 土層断面（南から）



炭窯 発掘（西から）



炭窯 発掘（東から）

写真12 炭窯



土壠状地形土層断面（A-A'）



土壠状地形 土層断面（B-B'）

写真13 土壠状地形

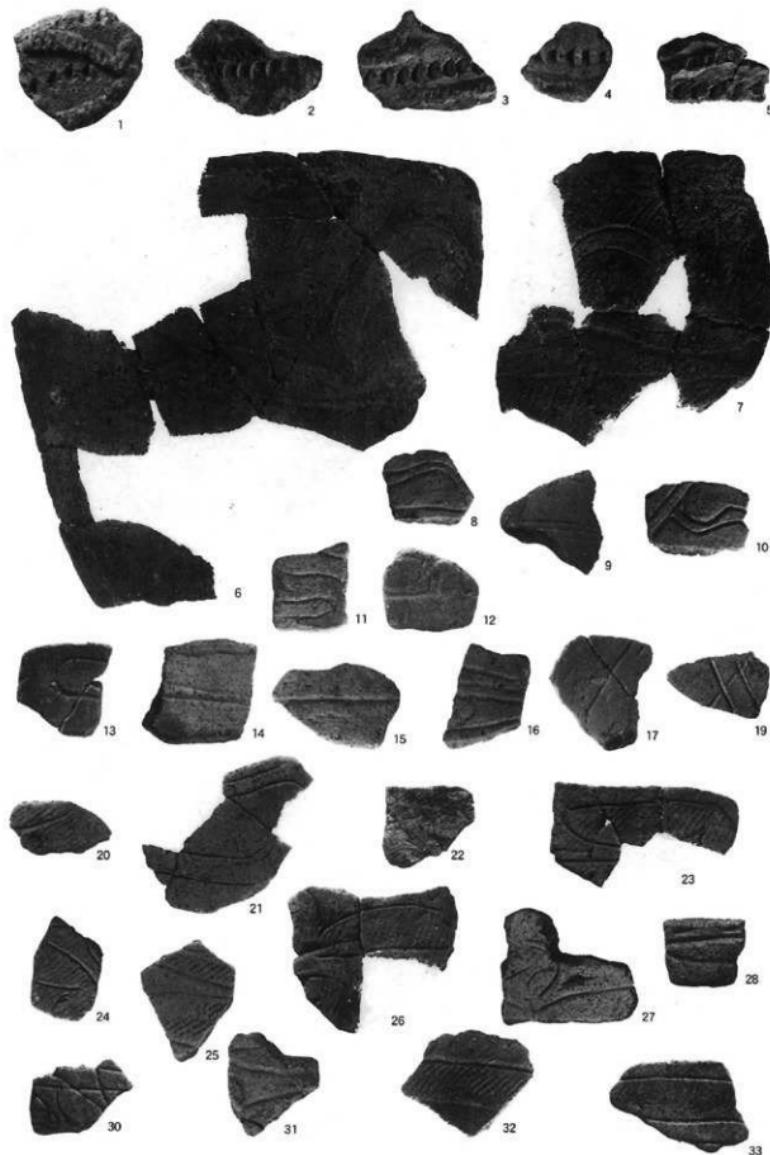


写真14 捨て場出土遺物・土器 1

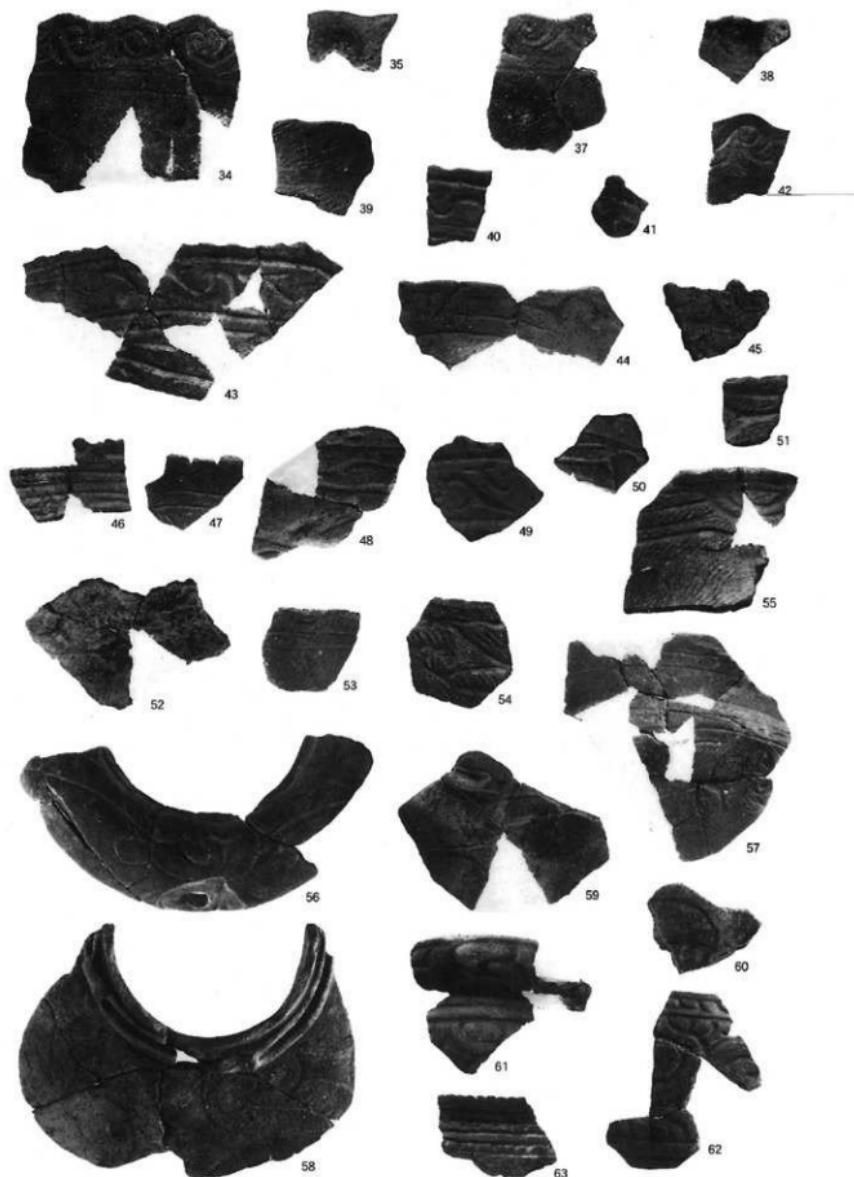


写真15 捨て場出土遺物・土器 2



写真16 捨て場出土遺物・土器3

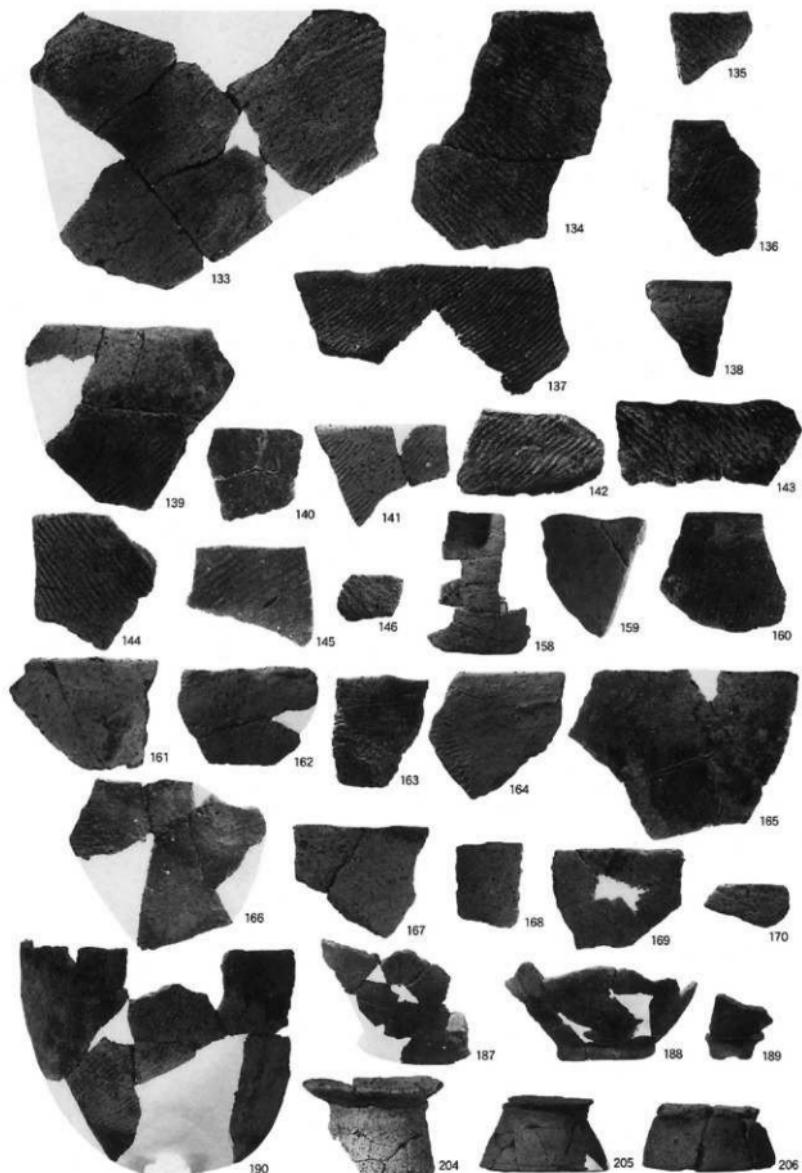
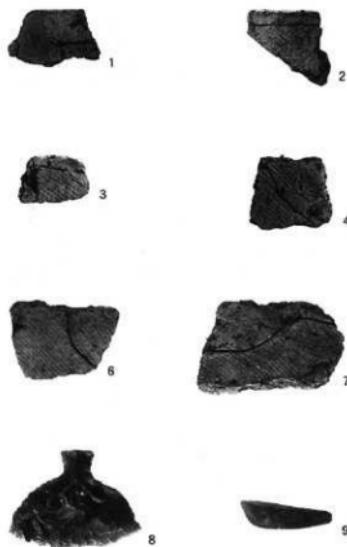


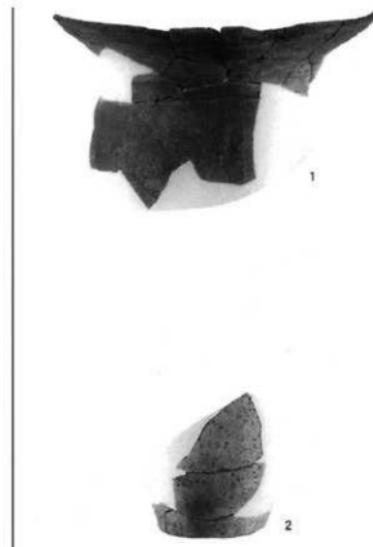
写真17 捨て場出土遺物・土器 4



写真18 捨て場出土遺物・石器



第1号土坑



沢跡



※穿孔は1→2→3の順に行われている

第1号井戸跡

写真19 土坑・沢跡・井戸跡出土遺物

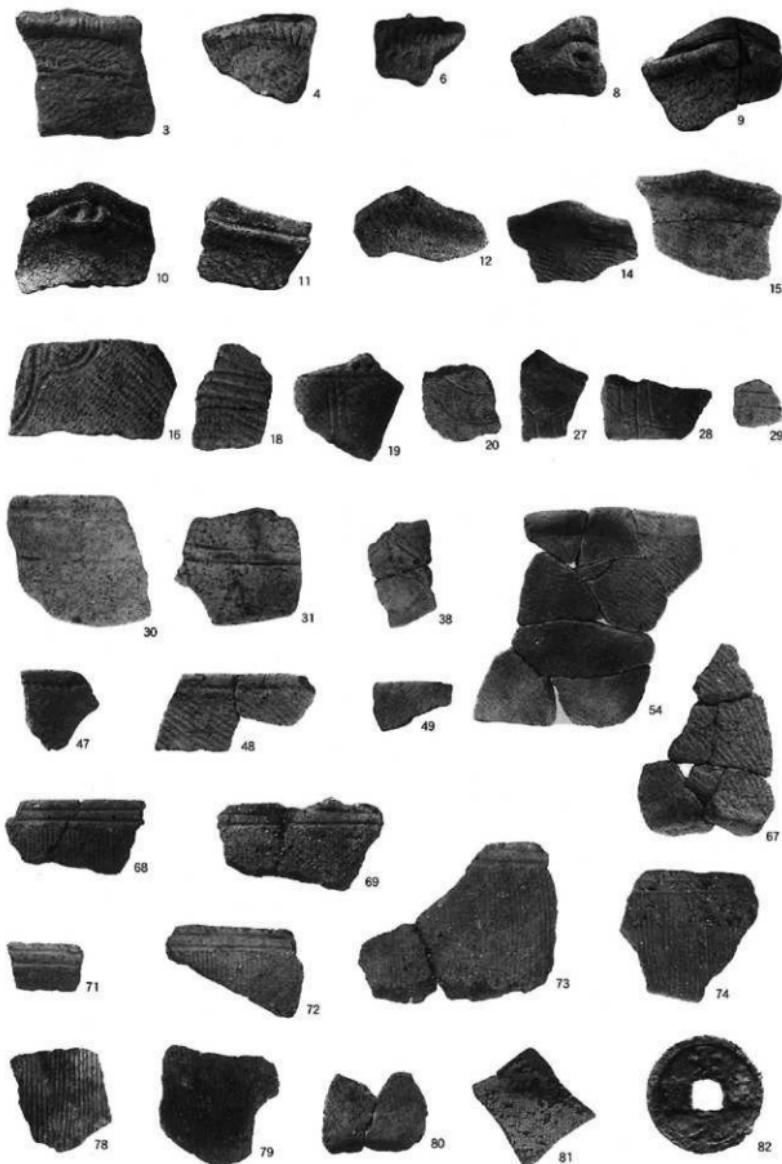


写真20 造構外出土遺物・土器・金属製品

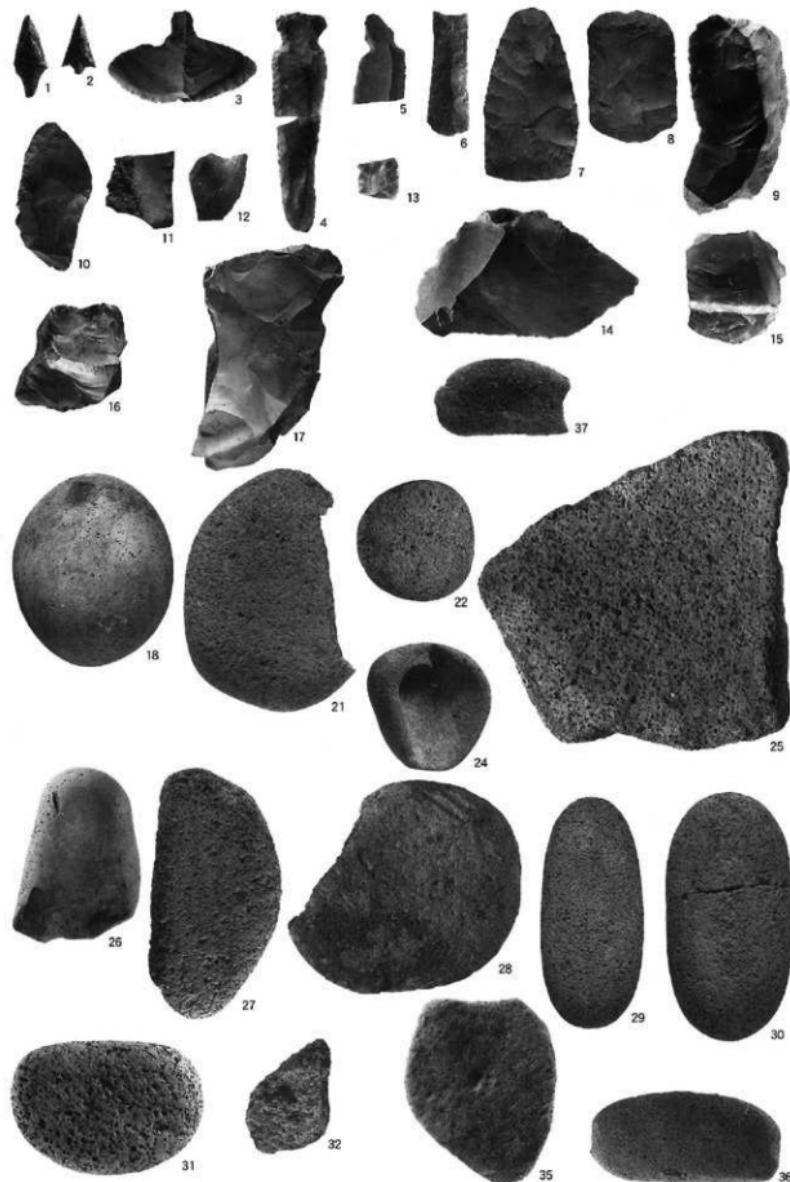


写真21 遺構外出土遺物・石器

報告書抄録

ふりがな	にしはまおりそのせきいせき							
書名	西浜折曾の関遺跡							
副書名	西海岸広域農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第341集							
編著者名	笹森一朗・平山明寿・齋藤正							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天山内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2003年3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 旧日本制地系	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしはまおりそのせきいせき 西浜折曾の関遺跡	あおもりけんにしひがもくん 青森県西津軽郡 ふかうちょうおおせきあが 深浦町大字霞字 とうさわほか 橋沢1-126外	02323	17015	40° 44° 04"	140° 05' 56"	19990928 19991029 20000620 20000811 20010820 20011031	8,000	西海岸広域 農道建設事 業に伴う調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
西浜折曾の関 遺跡	屋外炉 捨て場	縄文	屋外炉 捨て場 土坑	1基 1箇所 2基	縄文上層(中層～底層)・石器 (石器・石窓・スクレイバー・鐵 器等)・石製品			
	散布地	奈良	沢跡		土師器			
	散布地	中世	井戸跡 炭窯 溝跡	2基 1基 1条	銭貨(景德元寶) 大珠			
		現代						
		時期不明	掘立柱建物跡 土坑 ピット	1基 5基 多数				

青森県埋蔵文化財調査報告書第341集

西浜折曾の関遺跡

－西海岸広域農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日 平成15年3月17日

発 行 青森県教育委員会

〒030-8540 青森市新町二丁目3-1

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701、FAX 017-788-5702

印 刷 第一印刷株式会社

〒038-0003 青森市石江字江渡3-1

TEL 017-782-2333、FAX 017-781-9153



活彩あおもり

—輝くあおもり新時代—